まえがき

エンディングセンター理事長　井上治代

21世紀初頭に出現した「桜葬」とは何か。それを知っていただくために、いろいろな人の想いをこの本にぎゅっと詰め込んでみました。

まず1章では、「桜葬のバックステージ」と題して、桜葬が世に出るまでの時間を振り返っています。30歳で墓の問題を抱えてしまった私の問題意識や、跡継ぎを必要としない墓と、をつくった運営者との出会い・活動などが書かれています。またそれをずっと見守ってきた上野千鶴子さんが原稿を寄せてくださっています。

2章は「桜葬」の理念が書かれています。なぜ集合墓なのか、継承を前提としない墓の特徴や、家族機能に代替するサポートシステムが紹介されています。桜葬がこれまでの墓とどこが違うか、いかに違うか、が分かっていただけることでしょう。さらに詳しく知りたい方は『自分らしい葬儀とお墓の全てが分かる本』（三省堂）と、ただいま第2弾を執筆中ですので、これもぜひご覧ください。

3章では私たちの桜葬の理念を具現化してくださった設計者の、桜葬に込められた想いを掲載

しました。内藤氏が東京大学大学院教授だった２００６年当時、ある21世紀ＣＯＥのプログラム「全面的都市化・少子高齢化時代の墓地に関する研究と実践」という研究の一環として行った勉強会で私が話をしたのがきっかけとなって、その後、桜葬は2基め以降、内藤先生の景観研究室に集まる当時の大学院生たちによって次々と設計されていきました。

本書のメインは４章の「桜葬を求めた人々の想い」と題された「手記」です。とにかくお読みください。たくさんの生きること、死ぬこと、準備することへの示唆をあたえてくれるでしょう。

５章は私たちと同様な主旨で桜葬を展開しているお寺とご住職の想い、そして桜葬の紹介が書かれています。

また私たちは、檀家制度に運営基盤を置く仏教ではなく、個を尊重し、社会や家族の変化に対応した日本仏教の可能性を追求している僧侶たちと、ともに学び活動しています。たくさんのご住職たちの記事ここに登場するお寺の僧侶に書いていただいたのが６章の「協働している団体」です。

創立20周年記念誌として２００９年から編集が始まった本書。いま、このような私たちの「歩み」と「作品（桜葬）」がつまった本が、桜の季節に刊行されることのうれしさをかみしめております。

目次

まえがき　エンディングセンター理事長 井上治代……1

第1章
「桜葬」のバックステージ

「桜葬」のバックステージ　井上治代……8
井上さんとのおつきあい　上野千鶴子……25

第2章
「桜葬」の理念

「桜葬」の理念　井上治代……32

第3章
設計者が語る各エリアの設計意図

【En21】桜葬の始め――開発にあたって　下村貢司…44
【宙】拠り所を創出する　長田喜晃…52　【木立】人と樹木が対話する場所　関野らん…55

第4章

桜葬を求めた人々の想い

【樹林墓地】「樹林墓地」の設計コンセプト　西村祐人…58
【文音】時間と空間のつながり　関野らん…61　新しい場所と空間の力　川添善行…64
【En21】桜葬墓地への想い　和田知子…70　一冊の本　古川不盡子…73
桜葬に寄せて　畑仲紀子…77　「桜葬」との出会い　山根千代…80
希望どおりの桜葬墓地　塚本忠昭…84　樹木葬墓地に眠る私　鈴木和子…87
あの秋の日に　渡辺美佐子…90　小野威・和子詩画集…94
【En21合祀】桜葬の思い出　中原葉子…95　桜葬への想い　五月女雪子…99
来しかた 行くすえ　山脇洋子…103
【宙】夫とふたり、歩き親しんだ場所が終の棲家に　荻原節子…106　お墓への想い　中村憲弘…110
【木立】夫と決めた終の棲家は桜のもと　昆カズコ…112
桜が大好きだった主人と眠る　木名瀬沙代子…115　桜葬に癒されて　岩淵修身…118
【樹林墓地・木の精】山本のり子俳句…122　自然の中で父母と一緒に眠りたい　深田桃代…123
【樹林墓地・水の精】あこがれの桜葬　宮川美智…126　桜葬に出会い改葬へ　吉田睦枝…129

第5章

桜葬ネットワーク会員

里山再生活動と樹木葬　岡本和幸［千葉県・真光寺住職］…166
天徳寺における樹木葬の意味　二神成尊［千葉県・天徳寺住職］…172
「家墓」からの自由　渡辺大修［鳥取県・正福寺東堂　樹木葬運営責任者］…178
東北に涙と希望の桜咲け――震災の悲しみを復興のチカラに
後藤泰彦［岩手県・常堅寺住職］…184

庭の桜と桜葬　小林昭昌…132
【樹林墓地・風の旅人】素敵なポエム――樹木葬との出会い　武内勇子…135
「風の旅人」の造成に携わって　横尾直子…139
人もまた自然にかえる　江刺公子…146
【樹林墓地・杜の家族】さくら さくら　品田ケイ…151
愛犬と共に　岡本富美子／原和子…156
【文音】市民運動から学ぶ私死後の自立　角竹美好子…158
終の棲家は小彼岸桜の下に　佐々木淑子…161
桜の下で眠りたい　山嵜清子…153
いつも光の中に風と共に　伊佐和代…142

第6章

協働している団体

京都の「桜葬」　村井定心［京都府・西寿寺住職］……190
桜と共に寺が変わる　菊池泰啓［大分県・妙瑞寺住職］……196
「安穏廟」の22年とエンディングセンター　小川英爾［新潟県・妙光寺住職］……204
NPOの時代とお墓　秋田光彦［大阪府・大蓮寺住職］……210
私が目指す活動の指針　鳴海善通［神奈川県・成就院住職］……216
これからのお寺と墓のあり方　長谷川俊道［群馬県・瑞岩寺副住職］……222
大自然に抱かれる墓のかたち　三上隆章［山口県・宝宗寺住職］……228
あとがき　エンディングセンター事務局長　東　操……234

第1章

「桜葬」のバックステージ

「桜葬」のバックステージ

井上治代［いのうえはるよ］
NPO法人 エンディングセンター
理事長

この本を手にとってくださった読者のみなさま、「桜葬」の世界にようこそいらっしゃいました。

墓地を世に出したNPO法人エンディングセンターが20周年を迎えた2009年を機に、本書の編集が始まりました。まずはじめに「桜葬」ができるまでのバックステージを語り継ぎたいと思います。最近ではお墓の事情をほとんどご存知なくて、桜葬が当然のように思われている人もいらっしゃいます。桜葬がどのような経緯で社会に登場したのか、そのかでの市民団体の存在をご理解いただき、このような活動が社会に広まっていくことを願っています。

そうそばし、おつきあいくださいませ。

う自己紹介をしなければいけませんね。私は、桜の下に眠るという「桜葬」を企画したNPO法人エンディングセンターの理事長をしております井上治代と申します。東洋大学ライフデザイン学部に所属し、若者たちと接しながら「家族の社会学」「生死の社会学」「いのちの教

育」などを教える一方、社会学を専門とする研究者でもあります。「桜葬」は、私の中では研究成果の「社会還元」という位置づけにあります。

いやいやそれだけではありません。私が手がけている葬送の研究は、私自身が抱えた一生のテーマでもありました。自分自身の問題解決を図ろうと動いたら、それは私だけの問題ではなく、同時代の人々に通ずる社会問題であることがわかったのです。少し早めに親が亡くなったことで、やがて来る深刻な問題が一足先に見えてしまったというわけです。

原点となった出来事は、今から約30年あまり前の1981年、母が62歳で亡くなったことでした。父は次男であったため親の代からの墓はなく、新たに墓をつくることになったのです。その時でした、不条理を感じたのは。私が生まれた家族は、父・母・姉・私の4人家族。いわゆる子どもが「娘だけ」というケースです。当時、姉も私も長男と結婚して夫側の姓に変わっていたので、私たち娘が墓を継いでもやがて「無縁になる」と言われたのです。男の子が生まれなかった夫婦は「無縁仏」になるというではありませんか。では子どもがいない人はどうなるの？　当時は墓を売ってももらえず、たらい回しにされている人たちを見かけました。戦後の教育を受け、近代的な考えをもった両親のもと、2歳違いの姉と分け隔てなく育てられた私には、どう考えても不条理以外の何ものでもありませんでした。

この息苦しさはどこから来るものか、すぐさま調べ始めました。そこで姿を露わにしてきたのが日本の「家制度」です。終戦後の法改正で「家制度」は解体したはずなのに、それが慣習レベルで残っているかのように、慣習の中に生きていたのです。

なぜ「娘」では継げないのか。その根拠は、次のように語られていました。女性は結婚すると夫の姓に改姓するため、実家の家名が刻まれた墓は次第に守りにくくなって無縁化してしまうと。さらに古い考えの人は、結婚改姓した時点で、女性は夫の家の人間になったのだから、当然、夫側の仏壇や墓を守っていくものだと言うのです。実はこれらは全て、戦後の民法からすると何の根拠もない、むしろ間違った考えなのです。

このような現行法と慣習の乖離を知った私は、墓の問題を追いかけつつも、それをわかっても らうために「夫婦の姓（なまえ）」というテーマからアプローチを試みました。そうして出版したのが１９８６年の『女と姓を返して――夫婦別姓のすすめ』（創元社）です。その中では「墓と姓」と題した頁ばかりではなく、随所に墓の継承問題を盛り込み、かなりの頁をさきました。タイトルについてはいますが、実際は慣習として残る「家」の実態を浮き彫りにすることが本書の目的でした。なぜならば、皆自分の悩みがどこからくるものなのか問題の所在がわからずにも

がいていたからです。この本をよく読むと、目次には一切名前が出ていませんが、樋口恵子さん、上野千鶴子さんらが、多くの一般の人たちとともに、執筆してくださっています。

このような80年代前半から半ばごろの取材・調査活動の中で知り合った法律家が、田由紀子さん（現・明治大学法科大学院教員）でした。事務所にうかがったとき、彼女が書棚から法律書を出し、私に民法897条の存在を教えてくれました。その後、それほど時をあけず、当時、京都に暮らしていた上野千鶴子さんのもとへ、中日新聞の記者と訪ね、この家と墓、法律の話もした覚えがあります。上野さんは、女性と墓のテーマに興味をもってくださって、その後、自身が講師を務めていた講座に通っていた森綾子さん（宝塚NPOセンターの理事・事務局長を務め、2011年に亡くなられた）をはじめとする女性グループ「野菊」に、関西で墓の調査をすすめる運びになったように記憶しています。

ところで民法897条ですが、この説明を始めるととても長くなるので、ここで必要な説明をごく簡単にしたいと思います（他は『現代お墓事情――ゆれる家族の中で――』67～79頁参照のこと）。この条文には、系図や仏壇・仏具、墓といった祭祀財産の承継者（法律では「承継」という）の決め方が書かれています。それには「慣習に従って」決めなさいと書いてあるものの、どこにも「娘が継いではいけない」とは書かれてはいません。家庭裁判所での判例でも、「慣習」

が必ずしも「長男」を意味していないことがわかっています。内縁の妻や、同居しない長男・長女に代わって次女が指定されたり、霊園の管理者が指定された場合もあります。さらに、「墓には、承継者を決めなければならない」という条文もないので、近年増加している「継承を前提としないお墓」は違法ではないということです。このころ、そういった墓といえば、85年に開設した比叡山延暦寺の「久遠墓」だけでした。当時私はよく比叡山延暦寺の大霊園に行き、僧侶やお墓の購入者にインタビューを繰り返していました。

市民団体の発足と最初の10年

80年代後半、夫婦別姓をテーマにした本だけでは消化不良であった私は、真っ向からお墓に向き合った本を書きたいと思い取材を続けていました。当時は国内だけでなくアメリカにも視察に行き、海外情報を盛り込んだりして、執筆活動も終盤を迎えたころ、『週刊朝日』に新潟の妙光寺で「安穏廟」という継承者を必要としない永代供養墓をつくったという記事を見つけました。さっそく執筆中の本で紹介しようと思い、埼玉県の大宮に出てくるという小川英爾住職とお会いしました。それは90年の春のことでした。妙光寺では「安穏廟」という、私が理想とする継承を前提としない墓が89年に完成していました。一方、同じ89年に東京では元東洋大学学長の磯村英



フェスティバル安穏
妙光寺の「安穏廟」の夏の合同慰霊祭を、エンディングセンターは1990年の1回からずっと現在も参画している



樹木葬メモリアル
一関市祥雲寺（現·知勝院）の樹木葬に関わったときに、それまでの10年間の経験からすすめた樹木葬メモリアル

[井上治代のデザイン毛筆文字]
関わった団体には、井上の文字が足跡のように残されている



もやいの会
1990年から使われている「もやいの会」の文字。デザイナーが「い」の字を左右逆にしたことが、心残り

一さんが中心となった「もやいの碑」ができあがっていました。まだ始動はしていない段階で、私も加わって、約款やパンフレット、封筒などの制作を担当し、90年6月に「もやいの会」発会式を迎え、使用者との契約が開始されました。また、89年の晩秋には戦争のために独身を余儀なくされた女性たちがつくった「女の碑の会」が、京都の常寂光寺に「志縁廟」を完成させ、その落慶法要に、私は代表の谷嘉代子さんから招待されて立ち会いました。こういった日本で初めての「継承者を必要としない墓」の誕生と始動に何らかの形で立ち会えた私は、充実感を味わっていました。

そういった記念すべき90年の6月に『現代

お墓事情――ゆれる家族の中で――』（創元社）を出版しました。今読み返してみても決して古くない本だと思います。社会がこの本に追いついてきた感がします。しかし当時は、この本を出したとしても、その影響力は小さいから、何とかしなければと考えていました。なぜなら、当時、墓の継承問題で悩んでいる人たちの多くは、「うちには男の子がいないから」「単身者だから」「離婚したから」と、「個人の境遇だから仕方ない」と思っていたからです。しかしそれは「個人の境遇などではなく社会問題である」と伝えてあげたかった。そしてまだ登場してきたばかりの「継承を前提としない墓」の存在を知らせてあげたかったのです。何とか社会に知らせる方法として私は90年7月に「21世紀の結縁と墓を考える」と題して開催しました。第一回のシンポジウムを「21世紀の結縁と墓」を考える会」を発足させ、会場は新潟・妙光寺です。そこにある「安穏廟」をモデルにこれからの墓のあり方について、大勢の参加者とともに考えました。93年には、人々の関心がお墓だけでなくお葬式にも向けられるようになったため、会名の「墓」を「葬送」に替えて「21世紀の結縁と葬送を考える会」になりました。

妙光寺と共催したこのシンポジウムと合同慰霊祭は、その後、毎年夏に「フェスティバル安穏」と命名して２００９年まで開催されてきました。（２０１０年から「万灯のあかり――妙光

寺の送り盆」として継続）。99年には岩手県一関市の祥雲寺が「樹木葬」を始め、まだ社会に知られていない段階から、エンディングセンターはその広報活動を手伝ったり、生前契約のシステムを教えてさし上げたり、また数年間はエンディングセンターが問い合わせ電話の窓口にもなって支援しました。その後、地元の人たちの樹木葬についての認識が高まり、様々な形で参加するようになったので、私たちは役割を終えました。

以上述べてきたように、90年代の私たちの会の活動は、葬送のシンポジウムや会員向けの講座、合宿勉強会などを行い、さらに私たちが理想とするお墓を運営するお寺の行事に参画したり、広報活動を続けるといったことでした。

「考える会」から「実践する会」に

発足して10年が過ぎたころ、会員の中で「10年も考えてきたのだから、今度は実践してほしい」という声が高まり、「東京に自分たちが企画したお墓がほしい」といった意見も出てきました。そして何よりも「21世紀の結縁と葬送を考える会」が、その21世紀という本番を迎えてしまったのですから、考えてばかりいられなくなりました。そこで実践を伴う組織に発展するために１９９９年に会名を「エンディングセンター」に変更し、２０００年から実践する会の活動を模索し

ました。そのとき、お墓の問題だけでなく、死後の葬儀や墓の担い手が確保できない人々のために「葬儀や死後の事務処理等の生前契約」を広めなければと思っていました。そこでＬｉｓｓ（りす）システム本部（現・ＮＰＯ法人りすシステム）と協働し、アドバイザー養成講座を行ったことがありました。その当時の想いを伝えるため、「毎日新聞」の１９９９年10月６日（夕刊）に掲載された私の署名記事を、ここで紹介しておきたいと思います。

「死者の人権」と「死の助産フ」

「フ」は、当時「助産婦」の語のみで、男女共通用語がなかったため片仮名表記に。「助産師」という言い方は、２００２年３月１日以降

少子・高齢社会の到来で、年金や介護問題が指摘され、国レベルの対策が講じられている。そして今、介護保険制度の導入に伴って、活発な議論・検討がなされている。その様子を見るにつけ、私はなぜ「死後の福祉」が視野に入っていないのか、もどかしく思えてならない。人間が死ぬと瞬時に、様々な医療や福祉サービスの担い手が手を引き、福祉の対象からはずされる。これまでは、死後のことを担う家族が存在したから問題にもなってこなかった。しかし、介護者を家族で確保できない時代に、死後の担い手を家族で確保できない人が増えていても当然であろう。

人間は例外なく死ぬ。そして他の動物と違って遺体を葬るところにその特徴がある。しかし、当然のことながら死者本人には、自分の遺体の処理はできない。それを担ってきたのは「遺族」と呼ばれる人たちであ

る。「死者と遺族」の関係性があって、人間特有のこの営みも成立する。しかしこの「死者と遺族」の関係が刻々と変化を見せている。究極は、死後の葬儀や事務処理を行う「遺族を確保できない人々」の増加である。

これまで法律や福祉は死者を対象としてこなかった。わずかにあるのは、「生活保護法」による葬祭費の給付と、「行旅病人及行旅死亡人取扱法」による、旅行中の死亡者や住所・氏名の不明な死亡者のうち、引き取り手のない者に関して、死体があった市町村長の責任において埋・火葬が行われる、といった措置に留まっている。ところが現在増えているのは、葬祭費もあり、身元もはっきりしているが、死後のことを託す者がいないケースであって、先の2つの法律の範疇を超えた、既存の法律が想定していない事態が進んでいるのである。これが放置されれば、人間らしく死ぬ権利が侵されかねない。「死者の人権」が認められ、人たように、「死の助産フ（婦・夫）」が必要であると私は考える。

核家族の最晩年の姿は「独居」である。少子化で一人ぐらいしかいない子どもが長命の親より先に死なないともかぎらない。また、未婚・非婚者や子どものいない夫婦も多くなる。今後はより一層、「死後の自立」が活躍するような、家族だけに頼らない「死後の自立」システムが必要となってくる。実はこういったシステムのパーツはすでに出現している。生前の介護システム、葬儀を代行する「生前契約」、継承者を必要としない墓、そして葬送の相談・提言などを行っている市民団体などがそれである。しかしまだシステムとしては不完全である。なぜならば死体はそれらのところを自分で回っては歩けないからだ。生前の介護者から死後事務処理を担う者までを一連につなぐネットワークの存在がなければ、これまでの遺族が担った「喪主」という役割を代行するものには成り得ない。

脳死か心臓死か、死でさえも選択肢を持ち、またその死を意識して生きる高齢期が長くなった。それゆえ意識的な死への取り組みや、自分の遺体の葬られ方に関する希望などが主張されている。そのようなときにこそ、人間の生と死を一連のものとしてとらえる「エンディング論」に基づいた、「サポートネットワーク」づくりが急務である。

しかし、これは大変むずかしい。本来、家族が無償でやってきたことに人々は対価を払う習慣がないため、それを第3者が担ったとき、相当な金額になることが実感できにくい。ましてお金をかけず、質素にと思っている。ここに利潤を追求する営利企業だけでこの仕事を行う限界がある。国の補助金や、ボランティアなどの人的支援の導入や、営利と非営利団体のドッキングなど、さまざまな方法が模索されなければならないだろう。そういった小さな一歩として、「エンディングセンター」という、ともに考えて行動していくための連絡場所ができた。今秋、「死の助産フ」をめざしたアドバイザー養成講座が開催される。さらに12月に「市民の手で死の助産フを」と題したシンポジウムも行われる。「死の助産婦」という言葉は、英国の心理療法士ニコラス・オルベリー氏が使った言葉である。この夏、私は、英国の死と葬送に関する意識視察し、その折に「死者の権利憲章」を入手した。それは、英国でも90年代に入って死と葬送に関する意識が高まり、そういった背景があって社会に提言されたものである。英国では市民運動・NGO活動・大学教育などが相互に作用しあいながら、よりよい死と葬送をめざして活動している。シンポジウムでは、その渦中にいるレディング大学のトニー・ウォルター教授を日本に招いてお話を聞くことにした。できれば死や葬送に関する多彩な分野の人が集い、その催しが日本におけるサポートネットワークづくりの第1歩となればと願っている。

エンディングセンターは、この「死の助産師」に匹敵する、可能な範囲での寄り添いや、葬儀の担い手を確保できない人との生前契約によって、葬儀および死後の事務処理を家族に代替して行うというエンディングサポートを行っています。

「エンディング」の語のさきがけ

２０１１年「エンディングノート」が流行語大賞にノミネートされました。それを感慨深く見守っていました。残念ながら大賞は逃しましたが、ノミネートされたことの流れを感じます。というのは、現代的な流れの中で、日本で最初に「エンディングノート」を出版したのは私だったからです（葬儀関連企業が提供するノートはあった）。１９９６年の出版当時、「エンディング」という言葉は一般的でないため、書店で売る一般書としては不適切ということで、その名前を用意しつつ結局『遺言ノート』（ＫＫベストセラーズ）と名づけて出版したのでした（その後、第２版が出て『新遺言ノート』という）。

１９９９年に「21世紀の結縁と葬送を考える会」が会名を変更するさいに、待っていたかのように「エンディング」という言葉を使いました。なぜならば、マイナーな言葉であっても使用する私たちがいいといえば誰も反対できないし、そして使用することによってその意味を広げたい

と思ったからです。それが「エンディング」という言葉の先駆となりました。「Ｅｎｄ」という名詞ではなく、英文法的には整合性がありませんが進行形の「ｉｎｇ」を「終わり」を意味する名詞ではなく、高齢期から終末期、そして死および死後というように、一人の人間が命をつけることによって、「一連の流れでとらえたい」という考えから造語したものです。次第に「エンディング」の語が、時代の要請によって使用されるようになりました。いまでは自分の死の準備を意味する「終活」の語が飛び交い、希望をエンディングノートに書いて意思を伝え、安心してその時を迎えようとする人が多くなっています。

20周年を迎えた2つの団体

先に、「21世紀の結縁と墓を考える会」は１９９０年に発足し、新潟・妙光寺の安穏廟を21世紀にふさわしい墓のモデルとして、その活動にも参画してきたと話しました。２００９年には両団体とも20周年を迎え、第１回目から参画している「フェスティバル安穏」という合同慰霊祭で、私は読経と読経の合間に、エンディングセンターの代表として「奉告文」（仏に対する報告）を読み上げるという大役を仰せつかりました。私は僧侶でもないのですが、これまで立ち会って来た人間として、来し方を振り返り、20年の歩みを仏に奉告しました。日本海に面した夏の新潟・

角田浜にある妙光寺で読み上げた文章の一部を次にあげることにしたいと思います。
で言ってもいろいろなことがありました。妙光寺で行われる夏の「フェスティバル安穏」に20年
間、毎年参加してきたエンディングセンターの歩みを感じ取っていただけたら幸いです。

奉告文

NPO法人エンディングセンター理事長　井上治代

今から遡（さかのぼ）ること、十九年前の春
それまで全く、互いに存在をも知らなかった
「僧侶」と「俗人」が出会った。

僧は、日本仏教のあり方、寺のあり方、
そして、人々の墓の祭祀のあり方を憂い、
「安穏」の道を、生涯かけて探ろうとしていた。

俗人はというと、母亡き後、墓の継承問題を抱え
それが社会問題であることを世に問い、
その解決のため、力を尽くそうと、模索していた。

そしていま
その時の僧は、ここに、中心を成して読経し、
その時の俗人は、この奉告文を読み上げている。
そして何百という生者が集い
そして、そして、
何百という死者も参列している。
見えないけれども、みな笑顔
仏の言う「安穏」の世界に、
いま皆がいる。

十九年前の夏
仏が見守る、この角田の妙光寺に、
地元の、熱き思いを持った人々が集まった。
都会からも、何かをやり遂げようと人々が集まった。
意識ある僧侶も
それから二十年の歳月が流れようとしている。

寺で出迎えて、いろいろな話をしてくれた、
小粋な僧侶の母上は、

もうこの世にいない。
安穏法会に参加した俗人の父も、
故人となった。「安穏Tシャツ」を
「安穏Tシャツ」集中治療室で、
お守りのように持っていたことを
いまでも思い出す。

いつも　安穏法会に来る人々のために、
こころを尽くした年
親を亡くしていた僧侶も、俗人も、
とめどなく、あ
ぬぐいもせずに
泣いた、泣いた
それは、身内を
心底一つになれ

泣いた。
亡くして参列する安穏仲間と、
た時だった。

万物が燃えさか
生者と死者が
今日ここに集い
る夏
語り合う

（中略）

私たちは誓いま
日本海の風、澄
生命あるかぎり
大切に守ること
そして今後の十
バトンタッチの

（後略）

以上見ていただいたように、エンディングセンターは
墓や葬儀をめぐる活動をしてきました。特に妙光寺とと
墓のあり方の研究と実践の蓄積、その中でも合同祭祀な
展開に関与して、「樹木葬メモリアル」として定着して
の裏方的な実践が、いろいろなところで息づいているとい
ってもよいでしょう。

す。
み切った夏の陽差しの中で
、いただいた「ご縁」を
を。
年を、次代を担う若人への、
年にすることを。

井上さんとのおつきあい

上野千鶴子［うえの ちづこ］
社会学者、東京大学名誉教授
NPO法人 ウィメンズアクションネットワーク
理事長

井上治代さんとのおつきあいは、彼女もわたしも30代のころから。ずいぶん長くなりました。彼女が『女の姓（なまえ）を返して』（創元社、１９８６年）という本でノンフィクションライターとしてデビューして以来のおつきあい。その頃から、自分が死んだあとに、夫の家の「先祖代々の墓」に入るのはイヤ、と口にする女性たちが増えはじめていました。それを取材して『現代お墓事情』（創元社、１９９０年）を書いたのはこのひと。夫婦別墓を「死後離婚」と呼んだのには、うなりました。生きているうちは嫁（家の女、と書きます）をやっていても、死んでからまで婚家のもとにはいたくない、と念じた女の思いが伝わってきました。井上さんには『墓をめぐる家族論』（平凡社新書、２０００年）という新書もあります。副題は「誰と入るか、誰が守るか」……まったくそのとおりですね。

気がついたらお墓の社会学的研究に深く入りこみ、大学院に進学して「家族変動と先祖祭祀の変容――墓祭祀を中心に分析」という学位論文まで書いて博士号を取得しました。お墓の研究を

してみると、「先祖代々の墓」など、ぞんがい歴史が浅いことがわかります。せいぜい幕末にさかのぼる程度。そもそも日本人は長いあいだ、火葬じゃなくて土葬の習慣を持っていましたし、亡骸を埋める埋め墓と、碑を建てる詣り墓とは別々の場所にあった、なんてことも次々にわかってきました。「先祖代々の墓」っていうのは、幕末から明治にかけて村社会が分解するなかで、成り上がっていった一族のひとたちが、自分の家柄を誇示するためにつくったものなんですね。それも仏壇と墓を相続するのは長男だけ。次男坊、三男坊は、自分の家墓をつくることも叶わず、独身のまま兄の家の墓に入る運命でした。

それが一人っ子時代になると墓守のさえおぼつかない。墓守の絶えた家墓は無縁墓になります。娘しかいない家系では、養子をとる以外の娘の結婚に、親がつよく反対する例もあるとか。こんな少子社会では、「お墓の統廃合も必要だ」と預言したのは、高齢社会をよくする女性の会の代表、樋口恵子さん。そう考えると、「先祖代々の墓」の賞味期限はおよそ1世紀ばかりだった、と言えそうかもしれません。

井上さんの学位論文は、『墓と家族の変容』（岩波書店、２００３年）と題されて学術図書として刊行されました。その業績を評価されて、大学の教員に採用されたのが、54歳。遅いスタートだったけれど、だれにもマネのできない先駆的でオリジナルな研究をすれば、年齢にかかわらず、

ちゃんと評価してもらえるというモデルケースになりました。こういう例があると、わたしの業界である学界というところが、性別や年齢にかかわらず、ひとをその業績でフェアに評価するところだ、という信頼が持ってもらえます。

井上さんはそのうえ、実践家でもあります。90年という早い時期に、「21世紀の結縁と墓を考える会」を設立、それを発展させて2000年に会の名称を「エンディングセンター」に変更、2007年にNPO法人の認証を取得、その代表の座につきました。夫の家の「先祖代々の墓」には入りたくないし……どころか、死んでも行き場のないのが女です。女三界に家なし……どころか、死んでも行き場のないのが女です。女性に限らず、これまでの家を中心にした墓に違和感を持つひとたちが増えてきていました。それに無理して墓を建てて、その墓守をひとりっ子や嫁いだ娘に背負わせることに対してためらいを持つひとたちも。それだけでなく、子どもを産まなかったり、子どもがいても先立たれたりして、とうてい墓守を期待できないために、無縁仏になることを覚悟しなければならないひとたちも。そういうひとたちの希望にこたえて、墓地の経営・管理者と契約して、樹木葬や桜葬を実現してしまいました。希望者が多いところをお墓が、ほんとうに待たれていたのだと思います。

ひとりで死んでも、ひとりじゃない。同じ桜樹のもとには、自分とおなじような思いを持った

ひとたちが、とりあって眠っています。やがて桜は大きく育ち、毎年忘れずに満開の花を咲かせ、そして老樹になっていくでしょう。願わくば花のもとにて春死なん、と唄ったのでしたっけ。満開の桜の花の下には死体が眠っている、と言ったのは梶井基次郎でしたね。桜と死はなぜだか似合います。一瞬の生をきらめかせて去っていく者たち。桜の季節が来るたびに桜樹のもとにつどい、死者を思いだすひとときを、生前は縁のなかったひとたちが共にすごすことを考えついたのも、井上さんでした。彼女はこういうえにしを、「結縁（けつえん）」と

　わたしも桜葬のメモリアル場にいちどだけ立ち会ったことがありますが、その場にいつどうひとたち、やがてその桜の樹の下に眠ることを先約したひとたちが、とても穏やかな表情をしておられたことを思いだします。家の墓に入らない、入れない選択をしたひとたちには、それぞれのご事情がおありでしょうに、自分が死んだあと、こうやって新たにえにしを結んだひとびとに弔ってもらえるのだと思える安心感があるからでしょう。

　思いついたらやってしまう。ニーズがあるのに、そこにないものがあれば、自分たちの手でつくりだす。そしてひとを束ね、組織し、関わりのなかったところに関わりを生み出す……こんなふうに書くとすごいベンチャー企業家のように思えます。事実、彼女のやってきたことは前例の

ないベンチャーでした。それももっとも旧弊で変化を拒む、葬礼や祭祀の世界に食い込んだのです。どんなに抵抗や苦労があったでしょうに、彼女はいつ会っても、ひかえめにニコニコしています。

井上治代さんには、わたしにまねのできない才能があります。それは男性の協力をとりつける のがうまいこと。いつのまにか、お坊さんやおじさまがたのあいだに井上ファンをつくりだして、このひとのためなら一肌脱いであげたい、と思わせるスキルをお持ちです。こんなスキル、わたしにも教えてもらいたいものです。

エンディングセンターを設立してから20年経ったとか。20年と一言でいうけれど、はんぱな長さではありません。ゼロ歳児だった赤ん坊が二十歳になるまでの長さです。40代だった井上さんが60代を迎えます。このわたしも還暦を越しました。このあいだには、お仲間の何人もが、あちらへ逝かれたことでしょう。

信心のないわたしには、魂は死後も生きているとは思えません。自分が死ぬときにも亡くなった人たちを思い起こして「お父さん、お母さん、あの世に行ったら会えるわね」とはとうてい思えませんし、周りのひとたちに「一足お先に行ってるからね」とも言えそうもありません。また死んでゆくひとを前にして、「あの世で会おうね、あとから行くからね」とも言えないでしょう。

そんなわたしでも、桜葬とか樹木葬があれば、「あの樹の下でいっしょに眠ろうね」ってぐらいのことは、言えそうな気がします。そしてそう言えることはどんなに気持ちが安らぐことでしょう。

超高齢社会の平均寿命はおよそ女性86歳、男性80歳に達しました。60代の井上さんにはあと20年は生きていただかなくては。さあて、エンディングセンターの20年後はどうでしょうか。40周年を迎えられることを念じています。

第2章

「桜葬」の理念

「桜葬」の理念

井上治代

「桜葬」とは

「桜葬」とはどのようなものか。６００字以内という制約のもとで書いた「桜の下に眠る墓」という記事を紹介したいと思います（東京新聞の「紙つぶて」２０１１年８月２日夕刊１面）。まずは大づかみにご理解いただいたうえで、のちに要点を説明いたします。

桜の木の下に眠るという自然志向の墓で、跡継ぎを必要としない。一人でもいいし、夫婦、家族でも入ることができる。友達同士でも、故郷のご先祖様を連れて来てもいい。そして何よりも墓標が「桜」。さらに、子どもがいない人やお子さんが障がいを持つ親、また〝おひとりさま〟のために、家族に代わって死後の葬儀や事務手続きを担う「エンディングサポート」という支援も備えている。

こんな理想の墓を「桜葬」と命名し、東京の町田市につくった。私が理事長を務めるＮＰ

O法人エンディングセンターで商標登録も済ませ、申込者から「こんなお墓がほしかったのよ。生きているうちに出会えて良かった」と、絶大な支持を得ている。いま各地に広げる努力をしているところ。

「桜葬」は、シンボルの桜の下で、それぞれが個別区画の使用権を持ちながら、それらが隣接して一つの墓をつくる形式の墓地。住宅でいえばマンションような集合住宅に似ている。一戸建ての墓なら、管理する家族が絶えれば草ぼうぼうになってしまう。しかし合墓ならば容易に管理することができるというわけだ。これからはこういった墓、一つの集くに違いない。家族だけでは介護や看取り、死後の葬送を担うことが難しい社会が増えていは、桜を墓標として集まった隣同士が墓を核として縁を結ぶ。そこには家族を超えた〝ゆるやかな絆〟が生まれている。

「こんなお墓がほしい」を実現――生活者からの企画

これまでの墓地と違って、桜葬墓地は、墓の経営者側から企画・提供された墓ではなく、生活者である私たちが、時代背景を踏まえ、「こんなお墓がほしい」という希望を実現させたものです。私が研究者として行った意識調査やたくさんの方々へのインタビューなどを踏まえ、現代人

が求めているお墓のあり方を把握し、それを、たくさんの人たちの力を借りて実現しました。

いまお墓の多くは石材店が販売しています。とはいえ石材店からは墓石を立てるお墓もいいと思いますが、違う選択肢を求めるならば、既存のシにくいでしょう。墓石を立てるお墓は生まれステムを超えなければなりません。そこに生活者側が企画する必要性がありました。

「桜葬」墓地をつくるまでの10年余の経験が下地となって、市民団体として機が熟したときに、それらの集大成として、どこにもない独自のシステムをもった「桜葬」を世に出すことができました。独自につくったからこそ「桜葬」はこれまでになない特徴をもっています。それは、①自然志向であること、そして②継承を前提としない墓であること。さらに他にない特筆すべき特徴は、家族機能が衰退した社会に対応したシステムとして、③墓を核として結ばれる縁、家族を超えた絆＝「墓友」や、④家族の代替として看取りや葬儀・納骨・死後の事務処理等を担うエンディングサポートを備えている点です。

待たれていた「自然志向の墓」

桜葬は、墓石を立てず桜の木を墓標としたお墓です。そしてエンディングセンターでは、骨壺から遺骨を出して土中に埋めています。「自然に還りたい」という人々の希望をかなえた形態で

す。「母が死んで納骨の時に墓をあけたら、コンクリートで固めた薄暗く湿ったカロートの中に、先に逝った人たちのお骨がそのまま置かれているではないですか。それだけはイヤと思いましたね」。

このような考えをおもちの方がたくさんいます。桜葬は墓標も植物である桜、そして遺骨も土に還すという自然な葬法です。さらに、今あるエンディングセンターの桜葬区画は、埋葬後、遺骨をそこから掘り出して移動することがありません。

現代社会に「集合墓」の意味

集合墓にした意味が2つあります。桜葬は、桜の木の下に、個別区画の使用権をもちながら、それが隣同士くっついて一つの墓を形成しています。住宅でいうならば、家族単位の墓を「戸建て」とすると、桜葬は「集合住宅」。墓でいえば「集合墓」です。このような形態では、継承者がいない区画があっても、大きな一つの墓として皆で守っていくことができるのです。

もう一つは、「結縁」を想定した形態であることです。家族だけでは介護や看取り、死後の葬送を担うことが難しい社会で、桜を墓標として集まった隣同士が、墓を核として縁を結ぶ。そこには家族を超えた絆＝「墓友」が生まれています。

これこそエンディングセンターの前身「21世紀の結縁と葬送を考える会」が目指した世界の実現です。２０１０年、ＮＨＫによって広められた言葉に「無縁社会」がありますが、私たちは、この到来を20年も前から意識していたため、今日の社会は想定内でありました。

ゆるやかな共同性

個別区画の使用権をもちながら、大きな一つの墓を皆で守っていくことができる桜葬。桜の咲くころみなが集まって「合同祭祀」を行うので、身内がいなくても墓を同じくする仲間とともに供養されています。もちろん、家族による管理も継承も必要としません。家族も含み込みつつ、しかし家族という単位に縛られず、1本の桜の木の下に皆で眠り、皆が集う。そこに眠る人も、眠る人を偲んで訪れる人も、まさに「血縁」を超えた「結縁」でつながっています。

この特徴を私は「ゆるやかな共同性」と言っています。定められた血縁や、そこに住む限り絶対的な縛りのある共同体ではありません。行事の参加、不参加も自由に選べ、強制力をもたず、包括的なコミットメントを要求しない。毎月墓参に来ている人同士が出逢い、そこで同じような境遇や考えの人とめぐり会って、そこから人間関係が生まれ「墓友」となるケースも増えています。自らが「これ」を選択したという高い意識をもった人々が集まって、ゆるやかにつながって

います。

「半匿名性」の墓

一般的な墓には1基ずつ「○○家之墓」などと彫られた表札ならぬ墓石が立ち、「ここがウチ」といわんばかりにその区画を外柵（垣根）で囲んでいます。こういう形式では、埋葬場所もきちんと特定され、個別区画としての使用権をもちますが、一区画ごとの外柵がない。だから無縁墳墓として片づけられてしまうでしょう。しかし、「桜葬」では、埋葬者がいなくなれば、個別区画の上には個人を特定するような墓標ら見ると大きな一つの墓を成しています。しかも、個別区画は一切立てません。このように一人ひとりの埋葬ポイントを「標」で特定することはありません。が、近くには埋葬者の名前が何人かまとまって刻まれた共同の銘板があります。このように誰が埋葬されているかを全くわからなくする「匿名」ではなく、埋葬ポイントは特定しないが、墓の周辺に名前が彫られているといった「半匿名性」が桜葬の特徴なのです。全く「無に帰す」ことをよしとすれば、名前を彫らない選択もできます。また、大きな墓にアバウトに皆が合同で埋められるのではなく、墓の縁石には個別区画を特定するための印があり、そこの何点かを紐で結べばその区画がわかるようになっています。個別区画の中でも、埋葬の順番で位置が決まっており、

埋葬時の穴は直径15センチの円柱形に掘るので、既に埋葬している人の遺骨を掘り返すようなことはなく、ピンポイントで掘ることができるように工夫されています。もちろん埋葬者の記録を残した墓籍簿もあります。

家族機能を補完する画期的なシステム

「桜葬」の契約書には「証人」または「同意人」を書き込む欄があります。これまでの積み上げた知識から必要性を感じて設けたものです。その知識とは、継承を前提とした墓を契約した人が、その墓のことを周囲の人に話してなくて、結局、遺骨がその墓に届かない事態が発生していたということです。継承者を必要としない墓である以上、契約者が亡くなった時に責任をもって納骨をしてくれる人（証人、同意人）を、墓を契約した時点で決めておかなければいけないということです。もし、そういう人がいない場合は、エンディングセンターと契約して「証人」または「同意人」の役目をエンディングセンターに委任することもできます。

またエンディングセンターでは、葬儀の担い手を確保できない人々のために、自分のほか住とを第三者に委任する「生前契約」によって、「喪主の代行」も引き受けています。んでいた家の片づけ、ガス・電気・水道などの契約解除や死亡通知などさまざまなこ

ています。

エンディングセンターは経営者ではない

最近、事実誤認がよくあります。その一つである桜葬墓地の経営者の説明をしたいと思います。

墓地をつくるには、「墓地、埋葬に関する法律」に則って都道府県知事の許可が必要です。国、つまり厚生労働省は、墓地の経営主体は市町村等の地方公共性が求められることから、その経営主体は宗教法人、公益法人等に限られるとしています。市民団体では許可されないのであり、そのほかは宗教法人、公益法人等に限られるとしています。市民団体はごく限られています。国、つまり厚生労働省は、墓地の経営には、永続性と非営利性、公共性が求められることから、その経営主体は市町村等の地方公共団体が原則であり、そのほかは宗教法人、公益法人等に限られるとしています。市民団体では許可されないので、私たちの夢を実現させるには、その夢の受け皿が必要でした。

市民団体の声に耳を傾け、私たちを信頼し墓地をつくらせてくれたのが東京「町田いずみ浄苑」の管理業務を受託している日本墓園開発センター社長・大沼京三氏です。市民の会を通じた15年のおつきあいの中で得たご縁でした。また近年では、大阪府高槻市にあって１３００年以上の歴史をもつ神峯山寺の近藤眞道住職が受け入れてくださいました。長い歴史のある古刹の住職が、「時代の申し子」のような市民団体に託すこと、それはいろいろな意味で勇気ある決断だったと思います。

このように現在エンディングセンター「桜葬」墓地は、1つは大阪府高槻市の神峯山寺の所有地内にありますが、エンディングセンターは会員の墓を企画し、あくまでエンディングセンターの考えを伝える説明会を通じて契約業務を行っているだけで、経営者ではないし、経営者にはなり得ません。特定非営利活動法人としてこういった墓を社会に広める広報活動や、会員サポートを本務としています。そのほかフォーラムや語りあいの会、連続講座の開催、自主サークルのお手伝いなど様々な活動を行っています。

「商標登録」の意味

「桜葬」は、一般的なお墓ではなく一般的な販売方法でもないので、誤解を受けることがあります。エンディングセンターが「桜葬」を「商標登録」していることに対して「商業主義」だという人もいました。そうではなく、良いシステムを守るための方策であることをお伝えしたいと思います。

「桜葬」は、樹木葬の一種です。同じ自然志向でも「散骨」が、「墓地、埋葬等に関する法律」（「墓埋法」と略す）の範疇外であるとして（墓地をつくらず）「法の外」で行っているのに対し、「樹木葬」は墓埋法に則って墓地として許可を得た区域で行っています。だから遺骨を埋めること

とができます。

ところがこの2つが混同した「散骨樹木葬」が出現しました。「墓埋法」で、埋葬の埋蔵は都道府県知事の許可を受けた墓地以外の区域に行ってはならないとあります。木林を樹木葬墓地にして運営したいと考えた人が、事実上、宗教法人や行政、公益法人でない墓地の許可が下りないから、法規制がない「散骨」なら「可能」であろうと考えてつくり出した形態です。埋めないで撒きさえすれば樹木葬場の運営ができるとなると、日本中さまざまなところに霊園ができてしまって、これまで厳しい条件が科せられた墓地の認可制が崩れていくことになります。「墓石」を「樹木」に替え、遺骨を「埋めず」に「撒け」ば、どこでも墓地運営ができる。そのようなことが許されていいはずがありません。実際、北海道長沼町で散骨形式の樹木葬公園ができましたが、住民の反対にあいました。結局、条例で散骨が禁止され、撤退することになりました。問題は「散骨」それ自体ではなく、「墓地」と同じような形態・運営にあると思います。

このように、新しい形態が登場するときには法整備も間に合わず、いろいろなものが混在します。桜葬と思って申し込んだら、全く違った、という苦情を受けかねません。法的にもきちんとした桜葬を世に根づかせるため、良いものを守り、おかしいものを排除するため

の方策として商標登録をしています。

永続性と基金制度

永続性ということからいって市民団体が墓地経営者になるべきでないことは自覚しています。だから前にも書きましたように、桜葬には別途、許可を受けている宗教法人が存在しています。その上でエンディングセンターは、こういった継承者を必要としない墓を、その方法論も含めて社会に広めることに使命があると思っています。また家族機能に替わるサポートシステムを社会的に根付かせることに使命があると思っています。生前契約によってエンディングサポートを委任されている会員が埋葬されるまでは、エンディングセンターは存在しなければなりません。そのため、基金制度などを導入して存続のためのシステムも組み込んでいます。

第3章

設計者が語る各エリアの設計意図

桜葬墓地　En21　2005年4月
樹木墓地　宙（そら）　2007年7月
桜葬墓地　木立　2007年10月
桜葬・樹林墓地　2009年6月
桜葬墓地　文音　2011年4月

En 21

桜葬の始め ——開発にあたって

下村貢司［しもむらこうじ］
「En21」設計者

エンディングセンターも設立20年を迎え、そのランディングを思い起こすと、「桜葬」はエンディングセンターの初期自然葬に位置づけられます。

止めていったと考えられます。

現在の葬儀や墓地は以前に比べて大きく変化しています。この変化はエンディングセンターが始まった20年前頃から現れてきました。これは一般的なライフスタイルや慣習の変化によるところが大きいと言われていますが、より大きく変化させたのが「人々の心」、とりわけ人々の絆ではないかと考えていました。

「桜葬」の基本構想を構築しているとき、井上治代代表と人の縁起についてよく話し合い、コンセプトを構築していきました。

コンセプト

生あるとき、人々はさまざまな絆（つながり）をもっています。それは「コミュニケーション」というかたちとなって現れます。

人が亡くなったとき、「コミュニケーション」のかたちは大きく変化し、「実存をもたない想い」になり、「想いをつたえる対象物」を求めます。

葬送とは「想いをつたえるかたち」と考えました。

〈故人を偲ぶ。故人に想いをつたえる。故人を安置する〉

まずは墓所の基本的なことを加味し、このような基本コンセプトにしました。もちろんこの基本コンセプト以前にエンディングセンターの理念は考慮しました。

基本コンセプトを実現に結びつけるための、デザインコンセプトの展開を開始しました。

①こころ安らぐ環境をつくる

②故人との対話をつくる

③厳粛に葬るかたちをつくる

それは「葬送の変動期に安心できるものを提案する」ということです。

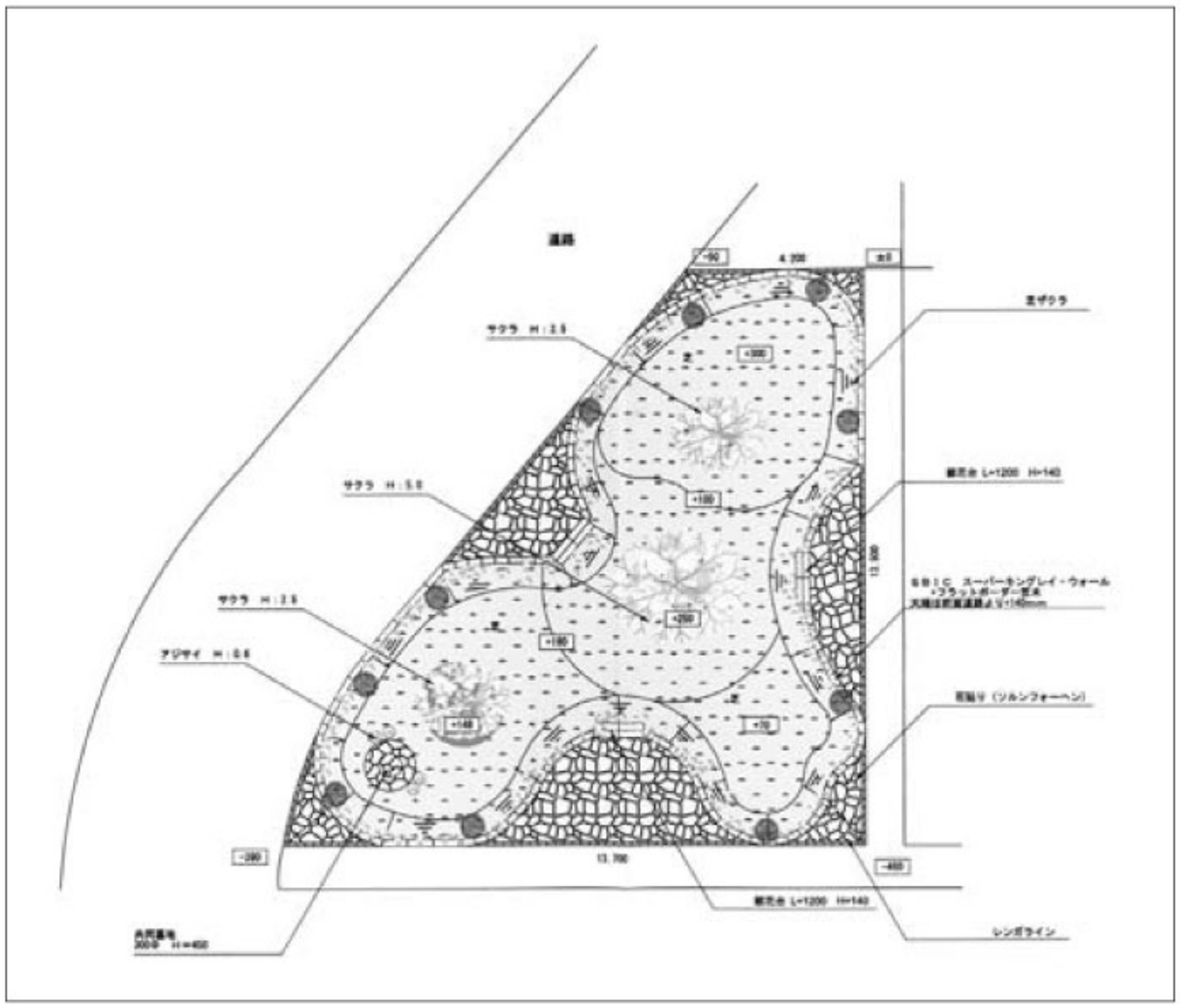
コンセプトからデザインへ

①こころ安らぐ環境をつくる

今までの墓地という埋葬装置は、近年においてはコストパフォーマンスだけを考え、「こころ安らぐ環境」を持ち合わせていないものが多かったと考えられます。

「こころ安らぐ環境」など必要がないと考えられ、墓参は「想い」と「慣習」「世間体」によって行われていたことが想像できました。

墓地の環境は、多くの寺院では、宗教の様式によってつくられ、安らぎは供養などによって与えられていました。反対に、公営霊園



桜葬墓地「En21」平面図

は宗教色を排することを目的に、苦情のこない設備の公園様式につくられていました。これは寺院にしても公営霊園にしても、「墓地」と「心」は別ということができます。

生活の質が向上したことで「想いや慣習、世間体」だけではなく、質の高い墓参が求められ、「墓参する側のこころの安らぎ」が求められるようになってきました。

日本人にとって屋外における、こころ安らぐ環境とは「自然がある環境」であることはほぼ間違いないと感じていました。そこで「自然」による「こころ」安らぐ環境のイメージをつくっていきました。

日本人の自然に対する考え方は繊細で感性豊かで、これは日本人の自然観です。日本人の自然観のポイントは「つくられた自然」であり、整ったものを好みます。大自然や未開の自然には、恐れや神秘を感じます。

日本人の心にあるのは本当の自然ではなく、「自然な感じ」です。

自然ではなく自然な感じであり、いわゆる「自然観」を取り上げ、日本人の心の中にある自然をモチーフにデザイン展開しました。

その「自然観」は日本庭園のような芸術作品であり、概念（理由）をもった樹種を必要とするものでした。

そこで整備された墓地の中に特別な「こころ安らぐ」領域をつくり、意味合いのある植栽を施すことを考えました。幸い「町田いずみ浄苑」は質の高い整備がなされ、特別なエリアを設けるには十分な環境でした。

小高い土盛りをつくり、その中心に桜を植栽、さらに土盛りの周りを石積し、聖域をつくり、その周囲に歩道を巡らせました。桜、石積み、小山そして小山を覆う緑は日本人の自然観に添うものと考えました。

遺骨を、桜を中心にした土盛りの中に直接埋葬することにより、管理された自然な小山に眠る自然葬とすることができました。歩道を含めた空間が霊園の周囲の緑地と調和し、「こころ安らぐ環境」になっています。そして何よりも霊園の中の自然な聖域として、安心感を与えるエリアとなっているのです。

②故人との対話をつくる

こころ安らぐ環境の中での故人との対話は、故人を偲び、故人に語りかける時間になります。また故人に語りかける方法もいろいろなかたちをもっており、それを助ける装置やソフトを考えていきました。

まず語りかけるにはその故人の「存在の証」を残す必要があります。故人の存在の証は聖域の周囲の石盤に、俗名を彫刻し、その方の眠っている場所をしるし、表しています。故人の名前に目を落とすことで、生前の人柄や生前の生い立ちを思い起こせるかたちをとっています。

そして故人との対話の主体になる対象物ですが、これは故人そのものまたは故人の心の表れとなるもので、一般の墓地でいうならば墓石です。故人そのものといっても過言ではありません。さらには故人の対象物だけではなく、こころ安らぐ精神性の高いものと考えました。そこにも日本人の自然観を追求したのです。

そこで考えたのが象徴的樹木でした、そこには昔から日本人に愛された「桜」がありました。日本人の自然観や季節感にも深く関わっているものでした。このときから「桜葬」が始まったのです。「桜」が故人としての対象物であり、その聖域のメモリアルとなりました。

次に故人への想いを伝達する方法を模索しました。これは従来からの方法を取り入れ、花を手向ける、線香を供える、墓前供養をする、ことにしました。ここで新しい所作を取り入れることは滑稽に感じたからです。さらには本当の想いの伝達は心の中にあるもので、それは所作に現れにくいものでした。心で伝える時間と空間を提供することが一番と考え、外周の歩道によりその

空間を確保し、滞在時間が苦にならないストリートファニチャー（ベンチなど）を設置しました。また「桜葬」の聖域を活用するすべての人の、心が一つになるような法要を行うことにしました。これには仏教行事もありますが、日本人の季節感に根ざすものとして、安らぎと安心をもたらすために行っています。

③厳粛に葬るかたちをつくる

桜の下に葬る、納骨以外は立ち入れない、土に還る、ということが基本的な葬るかたちになっていますが、これ以外の精神的な部分が非常に重要であると考えていました。

「厳粛に葬る」ためには多くの人たちが関係し、支える心が必要であることを重視しました。特にエンディングセンターは、葬送に対して同じ考えをもつ方を支援することを基本にしていますが、「桜葬」にはより多くの人のつながりが必要でした。物理的にも精神的にも同じ方向性を必要としたのでした。

霊園の管理、桜の聖域の管理、埋葬、彫刻、供養等など多くの人々が、「桜葬」を理解し大切に思い、同じ方向に進むことで「厳粛に葬るかたち」が実現できたのでした。さらには一番重要なのが、エンディングセンターの役割であることは間違いありませんでした。

またこのような葬送を大切に思う精神性の上にたった、物理的管理がなされていなければなりません。ここで初めて「心をかたちに」できると考えていました。

「桜葬」は新しいかたちの葬送が現れてくることでしょう。

ルに合致した葬送を提供することは、慣習、文化、宗教などに対する、マーケティングであり、次の世代へと心をつなぐための提案であり、安心のある新しい葬送のかたちを提供し続けることを求めてやみません。

新しいかたちの葬送を提供することは、慣習、文化、宗教などに対する、マーケティングであり、次の世代へと心をつなぐための提案であり、安心のある新しい葬送のかたちを提供し続けることを求めてやみません。

これからもエンディングセンターには、安心のある新しい役割」ではないでしょうか。

宙

拠り所を創出する

長田喜晃［おさだ よしあき］
「宙」設計者

「宙（そら）」は、町田いずみ浄苑入り口近くの和型墓地区画内にひっそりと佇む樹木葬墓地です。

我々、東京大学景観研究室は、３００基収容の共同葬形式という設計与件に十分に配慮しつつ、墓地を訪れる方々と故人の対話がどのような形で行われるべきであるかを主題に、計画および設計を進めていきました。

緩やかな傾斜地に沿って設けられた１００平方メートルほどの敷地の中央には、常緑樹のソヨゴが鎮座し、晴れた日には軽やかな木陰を落としています。故人の遺骨は敷地外周3面に設けられた芝生部に埋葬されており、ソヨゴを中心とした礼拝空間が形成されています。また、ソヨゴのそばには自然石を切り出した献花台が設置されており、色鮮やかな花が献花台に張られた水面に映り込むようになっています。

まず我々が最初に考えたのは、この場所に眠る故人のさまざまな思いを一つにまとめ上げるよりも、それぞれの思いを受け入れる場所を創出することでした。「宙」に入られる方は生前契約が基

本であること、共同葬という性質上、生前のセレモニーなどでさまざまな交流が生まれの場所に眠る」という思いが強まっていくことが予想できたからです。

そこで、常に緑を携え、故人の囁きのようにするシンボルツリーとして相応しいと考え、故り所」としての役割を託しました。

故人の眠る芝生面は敷地中央に佇むソヨゴに向かって軽い傾斜がつけられています。はここで眠る方々からソヨゴがよく見えるようにという配慮と、訪れた人々がソヨゴの傾斜下で祈り「皆とこ



樹木墓地「宙」



「宙」の献花台



を捧げる際、故人にやさしく包まれるような感覚をもっていただけるようにという設計意図によるものです。

また、「宙」は他の樹木葬墓地とは違った空間特性をもっています。一般の樹木葬墓地が開放的で見通しのよい空間が広がっているのに対し、「宙」は敷地境界に沿って立ち上がった杉板型枠コンクリート壁に取り囲まれた、「閉じた」樹木葬墓地なのです。我々は、敷地条件と設計与件についての十分な検討を行ったうえで、敷地境界部に結界となる壁を設け、周辺との空間の連続性を意図的に切り離すことで、祈りの純度や礼拝空間がもつ荘厳性を集中的に高めることを目指しました。

縮めた一敷地の狭さを逆手に取り、故人との距離感を新しい樹体的な礼拝空間を創出したことで、と我々は木葬墓地のあり方を提案できたのではないか考えています。

木立

人と樹木が対話する場所

関野らん［せきの らん］
「木立」設計者

「樹木葬」という言葉を初めて知ったのは、東京大学で墓地に関する研究会に参加していたときでした。そこで井上治代先生の、社会学の視点からの墓地のお話の中で、樹木葬の一つである「桜葬」を初めて聞きました。そのとき、初めて聞いた言葉にもかかわらず、違和感なく自然と受け入れられたことを覚えています。

そして、墓地に関する研究から始まり、縁あって桜葬墓地の計画の一つである「木立（こだち）」を担当することになりました。大学院生という立場で、人にとって最も大事な場所とも言える墓地の設計に関わるということに、最初はとまどいもありました。長年の伝統様式ではなく、「新たに創り出す形」が人の死を受け止めることができるのか。まだ経験も少ない私は、毎日自問自答していました。

墓は時を超えて後世にまで残るものです。想像のつかない遠い未来へつながることを考えると、昨今の建築家が追求している個々の作家性は、その長い時間に耐えうるものではないだろうし、

少なからず時代背景に影響を受けているであろう自分の価値観は何とも頼りないものに思えました。

その一方で、初めて「樹木葬」という言葉を聞いたときにすんなり受け入れられたことを思い出すと、樹木葬が全く新しい形式ではないことに気づきました。樹木葬の設計は「新たな形を創り出す」ことではなく、「自然に還る」という思想は古くからの山岳信仰などにつながるものであり、だからこそ特に日本人には違和感なく受け入れられる気がします。

つまり、桜葬は「環境を活かし、自然を感じながら故人を想い佇む場所。何度来ても落ち着く場所」ことだと気づきました。

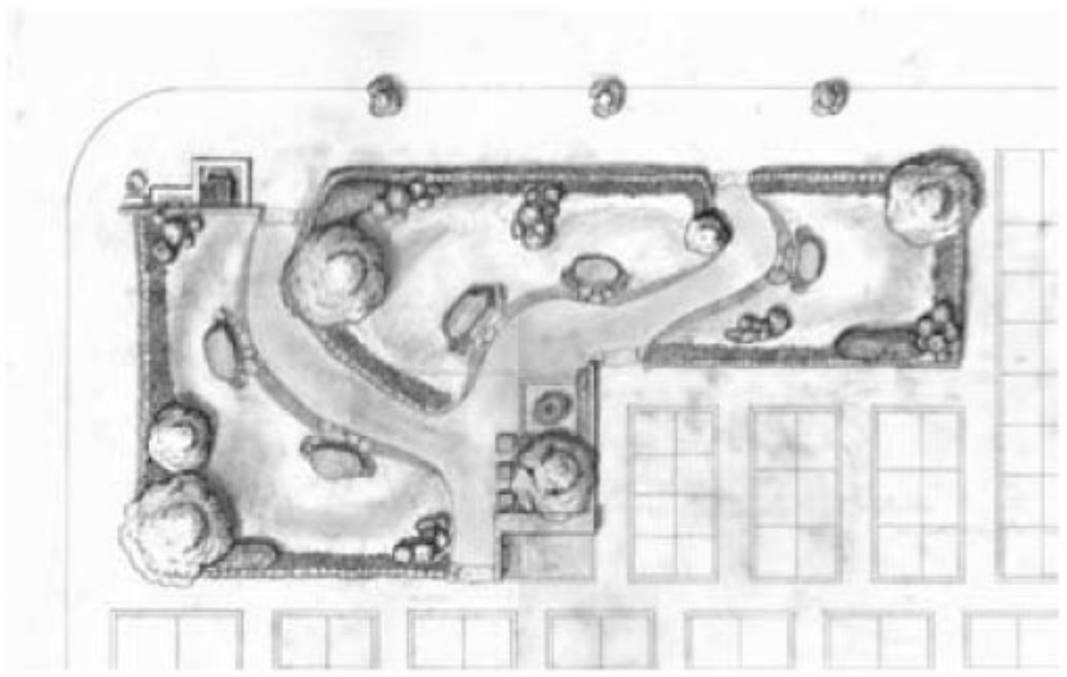
自然を感じながら故人を想い佇む場所。何度来ても落ち着く場所。

ここに来た人たちが、樹木に囲まれて違和感なくくつろげる場所をつくることが、樹木葬の設計としてなによりも重要だと考えました。その中でも特に重視したのは、故人と対話する場所です。そこに立ったとき、樹木や地形が故人と向き合う時間を心地よく受け止める銘板を置く場所です。そこに立ったとき、樹木や地形が故人と向き合う時間を心地よく受け止めてくれるよう、樹木の配置や地形の形状を検討し、設計を進めました。

感覚を変化させるのは、樹や土のとても些細な配置や形状の違いです。建築の設計とは違い、土や植物を取り入れる墓地の設計は、樹形や土質など、それぞれ個々の性質によって印象が大き



桜葬墓地「木立」



桜葬墓地「木立」プラン

く変わり、現場で何度も調整が必要でした。園路の位置や客土の傾斜など、工事のそれぞれの段階で何度も銘板を置く場所に立ち、現場で微調整しました。ときには職人さんが帰った後、自分で土を動かして調整しました。現場に立ったときの感覚を重視し、樹木は設計図にあったものをなくしたり、なかった場所に増やしたりしました。このような面倒な作業を、㈱ニワバンの佐藤友義さんはじめ現場の職人の方々が設計の意図に賛同して、協力してくれたことで、竣工した今、「木立」は設計図以上のものになりました。

それから数年経った「木立」に行くたびに育っている樹木の力に驚かされます。

設計図から工事段階、そして竣工後、樹木や土は時間が経てばまな表情を見せるパワーを与えてくれます。四季折々のさまざまな表情を見せる木々を見ながら、ここに来る人たちの想いを受け止め時間の流れを積み重ねていく桜葬のよさを、時間を経るほど実感しています。

樹林墓地

「樹林墓地」の設計

西村祐人［にしむらゆうと］
「樹林墓地」設計者

「樹林墓地」は、一つの墓石ごとに死者とその家族が眠る従来型のお墓とは異なり、のように明確な墓標がなく、たちまち自然の中に還っていくというような供養のかたる、ちょうどその中間にあたるようなお墓として設計しました。

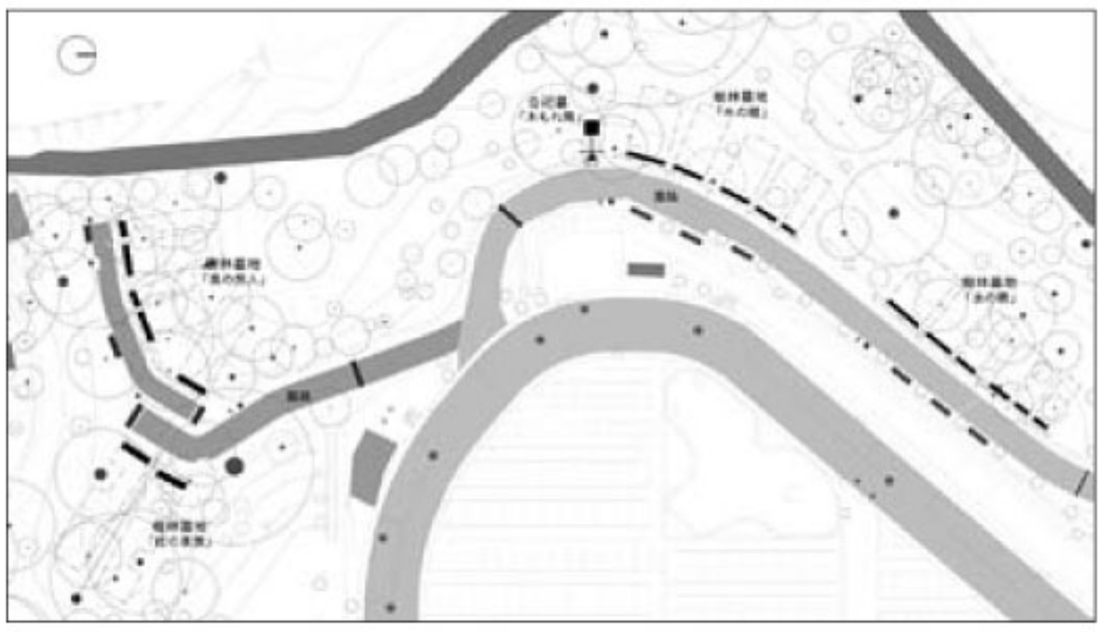
すなわちそれは、自然の中に還りたいと願う「故人」の想いと、故人を偲び訪れるの、ある意味では矛盾した想いを同時に受け止めることのできるお墓のかたちを模索することでもありました。そして、それに見合った「自然」との距離感や、死者との別れに必要な時間をいかにデザインできるかが、設計の大きなテーマとなりました。

また、「樹林墓地」の設計以前に竣工していた町田いずみ浄苑内の桜葬・樹木葬が花を抱き囲むように設えられているのに対し、逆に今回は、自然の内側にある墓地として、既存の雑木林の中に配置することが求められました。

「樹林墓地」は全部で5つの区画からなり、それぞれに性格は異なりますが、設計をするうえ



「樹林墓地」



「樹林墓地」平面図

で心がけた点はいずれにおいても共通しています。①自然の地形や樹木にできるだけ手を加えないこと。②周囲に臨む里山の風景を大事にすることと。この2点だけは何としても守り、大きな価値にできるだけ寄り添ったお墓を設計することを目指しました。

墓域は木々をよけて区画を取り、そこに至る園路は斜面の地形に沿って這わせることになりました。

その一方で、死者の名を刻む石板だけは、お参りに訪れた人が、「確かにこの場所に眠っている」という実感をもつ最後の手がかりとなるように、自然に対して自立的な四角い形とし、半分を大地にうずめて配置しました。

また、細部のデザインとしては、いかに「境界」を作るかということに苦心しました。一つは法律上求められる「墓域」という境界線をどのように引くかという問題でした。本来として在ることが重要な「樹林墓地」においては、なるべくならその隔たりとなるようなきたくありません。そこで、境界線上に穴の空いたブロックを敷き並べて仮の境界を作り、その穴に植生が入り込むことで、徐々に自然にのみ込まれて境界線が消失していくようなものを考えました。

もう一つは、「死者」と「生者」との2つの世界をつなぐ（あるいは隔てる）「境界」についてです。ここでは、水を用いてその「境界」を表現しました。水は木々や草花・生き物を生かしている最も根源的な要素です。園路と銘板との間に水を湛えた石の器を連ね、献花台を作りました。訪れた人が流れる水に花を手向けるという行為を通じて、大地に眠る「死者」へと想いを馳せることができる場所になればいいなという想いで設計しました。

こうして竣工した「樹林墓地」は、数年を経て、ようやく周囲の植栽も徐々になじみ始めています。使い勝手の面では、設計の至らなさを感じるところもありますが、一年を通して刻々と移り変わる木々や草花に囲まれ、ゆっくりと大地に還っていくことのできる、そんなお墓が設計できたのではないかと思っています。

文音

時間と空間のつながり

関野らん［せきのらん］
「文音」設計者

設計を担当した「木立」が竣工してから、私はたびたび「木立」を訪れていました。行くたびに成長している木々は、「木立」を周囲の山となじませ、心地よい安らぎを与えてくれるものになっていました。

その「木立」と通路を挟んですぐ隣の敷地に、「文音（あやね）」が計画されることになりました。「木立」の設計に関わった私が「文音」の設計にも携わることになったのは、とても幸運であり光栄なことでした。

「文音」は、「木立」に比べると敷地が小規模で、植栽もあまり多くは配置できない厳しい条件でした。けれど、隣には「木立」、そして西側には「樹林墓地」のある山が広がっており、周りの環境はとてもよいものでした。さまざまな桜葬がすでにある今だからこそ、フォレストパークに点在する桜葬をつなげる核となる、「文音」独自の空間をつくることができると思いました。

そこで何より重要だったのは、「文音」を取り囲む杉板型枠のコンクリート壁です。小さな敷

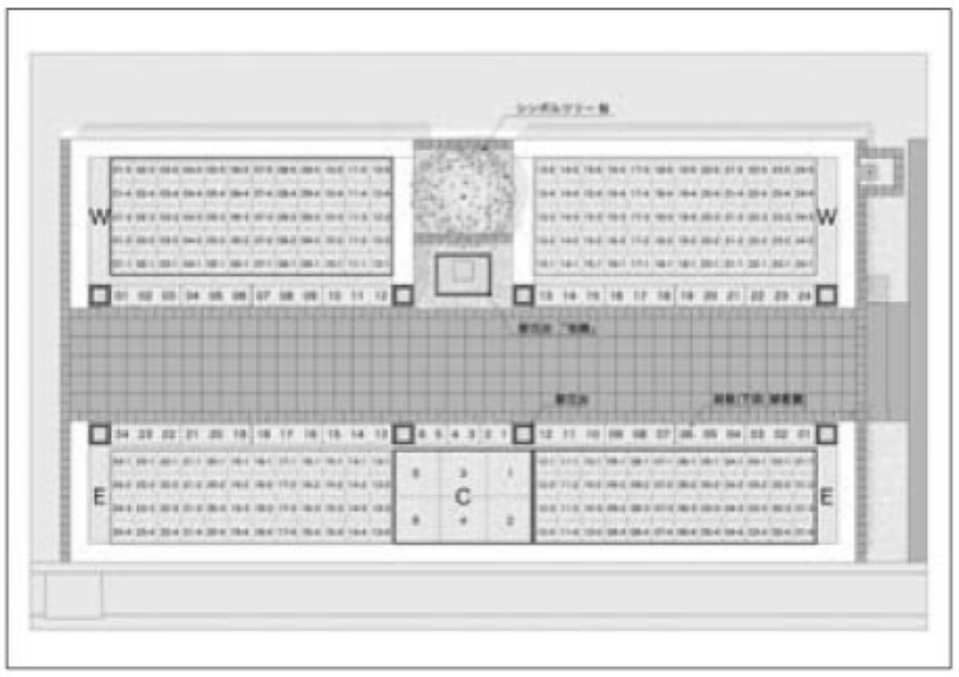
地だからこそ、少しの寸法の違いが空間に大きな影響を与えるので、細かい部分まで注意を払い、高いクオリティのものを作り出すことが必要でした。傾斜のある敷地、周囲との関係、さまざまな要素を考慮して細かく銘板や周囲の壁の高さを決定しました。そして、「樹林墓地」を背景に桜を置き、それに対面する「木立」側の壁には切り込みを作ることで、「木立」から「文音」、そして「樹林墓地」へとつながる流れをつくることを意図しました。

図面を見た現場の職人たちは、これがお墓だとはわからず、初めて見る用途のわからない構造に、最初は戸惑いながら作業を始めていました。そこで模型を現場に持ち込み、「木立」から「樹林墓地」へとつなげる空間のコンセプトと、埋葬される場所や、献花台・線香台の位置を説明しました。初めて見るお墓の形式に驚きながらも、場所の意味を理解した職人たちは、指示をする前にシンボルとなる桜の場所や、銘板や献花台が配置される部分など重要な場所を自分たちで認識し、丁寧に取り組んでくれました。普段は関わらない自分の担当でない工程のときにも、手伝いに来てくれる職人の方もいました。「自分たちが今までにない墓地を造る」という想いが、強い責任感と誇りを生み出していたように思います。

このような想いをもって取り組んでくれたことで、複雑なコンクリートの構造を丁寧に作り上げることができ、設計時のコンセプトを実現することができました。職人さんの想いは、コンク



桜葬墓地「文音」



桜葬墓地「文音」区画図

リートに綺麗に浮き上がった杉の模様にもしっかりと表れていま す。

極小な敷地の中で、エンディングセンターや町田いずみ浄苑の方々、そして設計者と職人、すべての人たちの想いが一つになったからこそ実現した桜葬でした。そして、竣工が間近に迫り、井上治代先生がこの場所に名前をつけました。

生者から死者へ、死者から生者へ 想いを伝える「文」エンディングセンター桜葬墓地「文音（あやね）」

設計者として空間のつながりを特に意識して設計を進めてきましたが、名前の意味を聞き、桜葬はその場所だけで完結するものでなく、周囲を取り巻く環境とつながり、さらに空間のもつ力に人々の故人への想いが合わさることで、時空を超えるつながりをもっていくことを感じました。

新しい場所と空間の力

空間の原点

空間の力は、人の死を受け入れることができるのだろうか。建築家として東京大学で教鞭をとるかたわら、私はこのことを常に自問し続けていました。東京大学で墓地に関する研究会を主宰していた縁もあって、新たな墓地のあり方に取り組む井上治代先生を知ることになりました。井上先生は社会学の立場から、現代の家族のあり方を真摯に見つめ、それにふさわしい墓地のかたちを模索されていました。一方で、私はむしろ、空間としてのあり方を思考していたといえるでしょう。

ピラミッドを築き上げた古代文明を振り返るまでもなく、人の死を受け入れるための空間は、人類の文明の原点であり、歴史です。死を受け止め、想像する力こそが、文化の豊かさを示す指標に違いありません。建築家は常にその事実に向き合い、貢献してきたともいえるでしょう。翻

川添善行［かわぞえ よしゆき］
「宙」「木立」「樹林墓地」「文音」
設計責任者

って今日、建築家は自己の作品性のみを追い求め、想像力の彼方にあるものに対して止してしまいました。ある種の欲望を形にすることのみを営みだと勘違いし、人の死力で昇華させようという取り組みを放棄してしまったのです。

今回、縁あって墓地空間の設計をするにあたり、私はもう一度原点に返った取り組べきだと感じていました。

3つの墓地

07年の樹木墓地「宙」を皮切りに、桜葬墓地「木立」、そして「桜葬・樹林墓地」立て続けに、種類の異なる樹木葬の誕生のお手伝いをすることができました。それぞエピソードは、それぞれの担当が解説してくれると思うので、ここでは概略のみ説明とどめたいと思います。

「宙」において、はじめて私は墓地という空間を設計しました。従来の墓地のよう家族に一つの墓石という形式に盲従するのではなく、樹木の下に人がいかに集まるかの空間を追求したいと考えました。樹木の下に集まる人々は大きな家族のようなもの に眠る人々、故人を訪れる家族、彼らがふと集まり包み込まれるような、大きくて柔

ような空間を作り出すことを心がけました。それが好評を得、同年、「木立」も手がけることになりました。

「木立」の敷地は、さらにゆとりのある場所でした。「宙」で得た、人が集まり眠る空間を構成した経験を、「木立」でさらに展開し、周囲の環境さえも向上させるような「木立」となり得たようです。

続く「樹林墓地」の敷地はさらに広く、さらに自然に抱かれた場所でした。桜葬の一つである人が集まり眠る空間は、次第に成熟されつつあります。それだけでなく、自然の中に眠ることの意味、自然の中に人間が入り込むことの意志、そうしたことが、この「樹林墓地」では実現されたように思います。

その後

この3つの墓地の実績からか、その後もいくつかの空間を実際に作り出し、いくつもの新しいプロジェクトのお手伝いをすることになりました。

それらも、大きくは前記の3つの空間の類型に分けることができます。つまり、「宙」のように内側だけでなく外側の環境すらも向上させるもの、「木立」のように内側だけでなく外側の環境すらも向上さ

せるような安らぎのある空間を供するもの、「樹林墓地」のように自然環境の中に最小限の手を加えて場所の力を引き出すもの、の3種類です。

とはいえ、建築の設計と同様に、樹木葬のあり方は、敷地環境や想定される使い方によって全く異なる設計となります。設計に取りかかる前には、敷地を丹念に歩き、樹木の1本をどう活かすかを考えます。完成後の使い方や埋葬のされ方については、企画される方や管理される方と入念な議論を重ねて使用勝手を検証します。一つとして同じものがない樹木葬は、それだけ作り出すために多くのエネルギーが必要になるのです。だからこそ、一つひとつの場所に、空間の力を付与できるのでしょうし、多くの方々の気持ちに応える場所を創出してこれたのだろうと思っています。

新しい場所

新しい墓地の空間が生まれた背景には、ただの先取りの気持ちではなく、現代に暮らす人々のそこはかとない希求の気持ちがあるのだと感じています。核家族化や人間関係の希薄化が叫ばれて久しく、コンクリートの中で暮らす生活があたかも当然の都市生活であるかのように勘違いされていますが、だからこそ、人が集まること、そして、自然と一緒に過ごすことの価値と

必要性を、意識的にせよ、無意識的にせよ、人々は心の底から渇望しているのだと思います。

そうした潜在的な希求と、故人への想い、明日への希望。これらの言葉にならない人の想いを同じにしたとき、人の死を受け入れ、昇華させる空間を作り出すことができるのです。これが、今回、一連の墓地を設計するにあたり、私の目指したことです。

空間だけでは何もできない。気持ちだけでも何も生まれない。人々の心からの願いと空間のもつ力とが合わさった時、そこにいまだかつてない新しい場所が生まれようとしているのだと思います。

第4章

桜葬を求めた人々の想い

En 21

桜葬墓地への想い

和田知子
［わだ ともこ］
70代



今から5年余り前の、２００６年4月27日の朝日新聞のある記事に私は釘づけになりました。

そこには、この4月2日満開の桜の下、東京都町田市の霊園の一角で桜葬墓地の初めての合同慰霊祭が開かれた。民団体「エンディングセンター」の発案で、昨春完成し、宗教不問、継承者不要……等々のことが記されていました。

かねて私が無意識のうちに心の底で願っていたものが、ありありと実現していて、と驚きました。すぐ連絡先に電話をしましたが、いくらかけてもつながらない。町田市役所に問い合わせてみると、それは真光寺町の「いずみ浄苑」内にある、とのことでした。翌日、さっそく行ってみました。

鶴川駅からタクシーで13分あまり。着いたところは、低い山地を拓いてきれいい霊園で、その奥の一角に3本の桜の苗木が植えられ、記事にあったとおり、それらを共同の墓標として、こんもりと芝生に覆われた、高からず低からずの感じのよい墓所が設えてありました。

しばらくそこに佇みながら、私の胸の奥から静かな喜びのようなものが湧き上がってきました。樹木葬はいいなぁ、それも桜ならなおさら、と思っていてもどうしていいのかわからず、のこんもり芝生に覆われた土葬塚、あれこそ自然に帰れる美しい姿、とあこがれつつ、しかも長年住む同じ町のこんな近くに、なかった。それがすでに目の前に実現されている。と思うとぜひ夫の遺骨をここに移したい、やがて私も一緒に眠りたい、と切に思いました。

それというのも、今から30年前、夫（49歳）が亡くなった時、私はほとんど迷いなく、跡を継ぐ義弟夫婦には女の子が3人いるので、漫然と誰かが引き継房総の地に墓所を定めました。

私たちには子どもがなく、いずれは私もそこへ眠るつもりで墓碑にも名を彫りました。しかし3人いでくれるものと思い、跡継ぎがいなくなりました。その上、私自はやがてそれぞれ良縁を得て他家へ嫁ぎ、夫の家の墓参うえ、身が加齢のため片道3、4時間かかる墓参がだんだんきつくなりました。

しかし、墓を移そうとはまったく考えていなかったのですが、近くにこのような桜葬墓地ができているのを知って、私は急遽決心をしました。

ある日義弟に宛て、この先加齢が進むと遠い地への墓参が難しくなるかもしれないもしれない、また私が死去した際には遠路、大変な迷惑・面倒をかけるかも以上のような事情・心境を縷々

つづって、夫の遺骨を改葬する許しを乞いました。
多少、淋しい気持ちはあったとは思いますが、義弟も快く承知してくれたので、その年（06年）の秋、夫は26年ぶりにかつて住んだ町田市に戻り、地中深く新しい眠りにつきました。
埋葬の際の霊園の係りの方の丁寧なさり方もありがたく、自分の時のこともまざまざ見た思いがしました。
さらにまた、翌07年の年賀状で、夫の大学時代の親しい友人で、多摩市在住のMご夫妻に桜葬墓地への改葬をお知らせするとすぐに電話があって、そこは私たちも新聞を見て、いいなぁと思っていたところ、これからすぐに見に行きたい、とのこと。そして帰宅をされてからの話で、もう3区画しか残っていなかったのですぐ契約してきた、と言われるのに驚きました。そして後日、改めてご一緒した時に、ご主人様が墓前であの〝さくらさくら〟をお得意のハーモニカで心をこめて吹奏してくださいました。その沁み入る音色を地下の夫もどんなに嬉しく聴いたことでしょう。Mご夫妻には、夫の追悼集の作成にもたいへんお世話になりました。
思いがけず、かの世でもご一緒できるようになったとは、ほんとうに不思議な、うれしいご縁と思います。
また、3年前からは自主サークルの一つとして「さくら句会」が発足しました。いつかご一緒

するはずの方たちと、生きているうちに俳句を通して親しく、楽しいひとときを過ごせるのを感謝しております。

さらに死後のサポートをしてくださる生前契約の制度があることを知り、2年ほど前に正式に契約いたしました。このシステムは弟妹はおりますが、さぞ戸惑うことも多いと思いますので、ありがたいことと思います。

NPO法人エンディングセンターは昨年創立20周年を迎えたとのこと、桜葬墓地をはじめとして次々に新しい樹木葬墓地が生まれています。私はここに至るまでの理事長井上治代様のご尽力に改めて御礼申し上げたいと思配慮を知るにつけ、いまいます。

（2011年6月記）

En 21

一冊の本

古川不盡子
［ふるかわ ふじこ］
70代



2006年の春で神奈川県秦野市の施設で暮らしている、47歳の二男が悪性リンパ腫で余命2重度の知的障害でした。

年ぐらいとの知らせを受けたのです。
当時、76歳の夫は糖尿病の末期で、入退院を繰り返していました。毎日、病院での面会や施設の職員との打ち合わせ等で、あわただしい時間を過ごすばかりです。主治医からは夫はあまり長くないと告げられていました。
まず夫を二男の近くの鶴巻温泉病院へ移しました。
その頃に癒されたのは、小田急線の車窓から見える景色で、桜の頃の眺めは美しいものです。
二人に大切なことは、と考えた末、とにかく残りの時間は楽しく過ごさせたい、そして安らかに終わりを迎えることを望みました。
そののちに必然的に来るのはお墓のことです。夫はクリスチャンで教会の共同墓地に入ることは不可能です。
用意はしていました。二男は信者ではないので一緒に入るべく本屋に立ち寄りました。
ある日、電車の中で読む本を求めるべく本屋に立ち寄りました。そこで目に飛び込んだのが井上治代先生の『子の世話にならずに死にたい』です。その日のうちに一気に読みました。
「これだった」
さっそく、町田のエンディングセンターに電話を入れました。見学を申し込み、6月の二男の面会の帰りに寄りました。

鶴川の駅から多摩丘陵に向かい、いずみ浄苑墓地の若木の桜が2本植えられた一角に案内されたのです。そこに立ち、視界の向こうに広がった景色は、長男・長女が幼かった頃より、一家で二男の施設へ面会のために毎月通いながら見た街並みです。とっさに「ここへ」と心は決まりました。

当時の日記を読み返してみると、6月26日に事務所から説明書・申込書を取り寄せ、7月3日に書類を整えて送り、入金を済ませて7月18日には葬儀社と打ち合わせとなっているのです。

一連の手続きを済ませたのちは、夫の病院、二男の施設の帰りに事務所を訪れ、話を聴いていただき、そこで新しい友人とも知り合いました。

もう一つの問題は経済的なことです。二人に残された時間を楽しくとはいえ、先立つものはお金です。お葬式とお墓の費用が決まれば、限られた経済の中、精いっぱいのことはできます。たとえば、二男は施設の職員にお願いして仲間たちと一流ホテルでの昼食会や海辺へのドライブ。入院の時は職員と一緒にくつろげる特別室をとりました。これで夫の看病にも専念できます。

病いに勝てなかった二男は、2006年のクリスマスの朝、長女と施設職員に看取られながら旅立っていきました。

入院中の父親には知らせず、施設の園長、かかわった職員、長男一家4人と長女と私の30人ば

かりで野辺の送りです。彼の生前から葬儀の打ち合
教の式です。音楽を流し、彼とかかわりのあった職
のことで、幼い時から過ごした学園で大切にされ、
たされたのです。

新しい年になり、2月25日に鶴巻温泉病院に入院
であったので、本来ならば所属の教会で前夜祭、葬
男と同じ斎場で執り行うことにしたのです。エンデ
学名誉教授の柴田千頭男先生に式をお願いしました
親族のみの集まりでしたが、一同で賛美歌を歌い
に夫の生前の願いどおりになったと思います。
桜のつぼみも膨らんだお墓には、2カ月前に逝っ
が、誰からということもなく口にしたのは、
「ほら聞こえる、二人で話しているよ」
「ひろし、ここに居たんだね」
「パパ来たんだね。この先ずっと一緒だね」

こんなこと、きっと話しているのではなかろうか、と。
ロマンチックな気分にもなり、新しい土を盛られたお墓の上に花束をいっぱい置きました。し
めやかさと安堵の気持ちを胸にして、お墓と別れました。
その後のお墓参りは、なつかしさと桜の木の四季の移ろいをめでる喜びになりました。
一冊の本との出会いは、なんと大きな出会いにつながっていったことでしょう。

En 21 桜葬に寄せて

畑仲紀子
［はたなかのりこ］
60代



母が逝って5年、現在私と妹裕子がこのように心安らかに両親のことを想い、日々を過ごせますのは、エンディングセンターの桜葬に出会えたからこそと、そのご縁に感謝しております。
思い起こせば、代表の井上治代様が20年の長きに亘り開拓してくださった「葬送の自由への道」その真摯な訴えは、ついに社会を動かしていったのでした。
そのおかげで母を、望むとおりの自然葬で送ることができました。ほんとうにありがとうござ
いました。

１９７７年、父が癌で亡くなりました。58歳でした。母は3年間一生懸命看病をし、最後は自宅で看とりました。その時は母54歳。１年間は放心状態でしたが、徐々に元気を取り戻し、やがて母の第２の青春が始まりました。元来、好奇心・向学心の強い母ですので、茶道・書道・墨絵・中国語は母のライフワークとなり、中国への旅もたびたびでした。住居も横浜の一戸建てから私たち娘の近くのマンションに移り、まだ小さかった孫２人の世話と愛犬との楽しい ひとり暮らしが20年続きました。

そんな母も80歳近くになり、そろそろひとり暮らしも限界を迎え、私たちは母がお世話になる老人ホームを探し始めました。それは長年自立して自由に生きてきた母の希望でもありました。母を一人の人間として尊重していただけるのがホームを選ぶ一番大切な条件です。そして、母と仲良しの鎌倉のいとこの節子様のご紹介で理想のホームに出会うことができました。その鎌倉のホームのスタッフの皆様の温かくて手厚いお世話をいただき、母はたおやかに幸せな晩年の２年半を過ごしました。私と妹も毎週交代で鎌倉の母に会いに行くのが楽しみでした。

２００６年４月、ホームのスタッフの皆様と母を見送りました。眠るような静かな最後でした。

次はお墓の問題です。

生前お墓に入りたくないと言っていた母。１９９４年11月15日付の母の手帳には、「山の土か

海に流してほしい」と願う」と書いてありました。
私たちは母の遺志を尊重して埋葬を思案しておりました。
新聞の記事を知り、とうとうエンディングセンターの
うち、桜葬こそ私たちが探し求めていた葬送であると思い、すぐ入会させていただきました。
父の遺骨もお寺様の許可をいただき改葬手続きのうえ、母と一緒に埋葬することにいたしました。
そしてこの年の11月の晴れた美しい日、鎌倉のいとこや叔母（母の妹）と姪、親しい友人に出会うことができました。
だいていた方々と共に両親を桜葬で送ることができました。この桜の木の下に父と母が眠っている
翌年も4月、母の命日に妹と母に会いにまいりました。
と思うと、私たちもほんとうに心の平安を覚え、改めて両親に感謝の念でいっぱいになります。
木の下に眠りたいという母の望みを叶えることができました。
長い間、葬送の自由の環境を整えてくださった井上様はじめエンディングセンターのスタッフ
の皆様に心より感謝を申し上げます。
これからもさらなるご発展を祈っております。ありがとうございました。

En 21

「桜葬」との出会い

山根千代
［やまねちよ］
60代

２００７年３月、エンディングセンター町田の「桜葬の説明会場」にいました。ちょっと見学にと、軽い気持ちで参加したのに、周囲の大勢の参加者からは熱気というか、切迫したオーラが湧き上がっている……何故だろう？

やがてわかってきたことは「桜葬墓地Ｅｎ21」の個人エリアは残りが5区画しかない。そのうえ今後新たな桜葬墓地の開発ができるかどうかの予定が立っていないため、購入希望者が殺到しており、今日はそのための抽選会がある、ということでした。

説明された内容をしっかりと理解できたわけではないけれど、とにかくチャンスには乗り遅れないようにと希望の区画にエントリーして抽選に参加したところ、ただ1人だけ当選！　残り4区は次回の説明会用として残ることになったのでした。

会員登録・墓地購入手続きの説明・参考書籍の購入・月末に予定された「桜葬メモリアル」へのお誘い……とふらっと訪れた早春の一日ですべて完了といい、なんとも盛りだくさんな内容が、あっという間にトントンと決まってしまったようですが、私自身は至極平



父の書碑の前にて

静。予定されていた道のりを辿るような清々しい思いで、何の迷いもなくその後の手続きを淡々と進めていきました。

思えば、家制度に縛られ、石で固められたお墓に閉じ込められたくないという思いは、物心ついた頃から心のどこかにあったような気がします。

東京生まれの私が15歳の時、父が病死。菩提寺（曹洞宗）の僧侶が上京してくださって葬儀が執り行われ、郷里（諏訪）の家墓に眠りましたが、家の事情が複雑であったこともあり、盛大な儀式・大勢の参列者・広大な墓所・大きな石碑等々は少しも私の悲しみを和らげてくれるものではありませんでした。

少しずつ傷心を癒してくれたのは、血縁関係のない身近な方々でした。中学から通っていた学校のご縁でプロテスタントの教会につながっており、その学校・教会の方々からの思いやり・慰めが、長い時間をかけて少しずつ凍った心を溶かしてくれました。

やがて洗礼を受けて教会に属し、クリスチャンの夫と結婚し、2人の子どもにも恵まれて、転居により家族で移籍した教会には墓地がありました。教会員全員で喧々諤々と討議して静かな山の中に作った共同墓地で、大きなカロートが土中深く埋め込まれており、お骨はそのいつか土に還っていく。ちょうどサラサラと納められて、「Ｅｎ21」の共同墓を大きくしたような形の

ものでした。母が脳梗塞で、夫が癌で、闘病の末に相次いでこの墓地のお世話になりました。もちろん私も将来ここに眠ることを疑ったこともなかったのですが……人生には何があるかわからない、将来の確実性などないのだ、と改めて思わされる事態に出会い、この教会とはご縁が切れました。

所属する場所がなくなってから、死後還る所を考えるたびに浮かぶ思いは、人知れず静かな場所で眠りたいなと……後に残る人に面倒をかけないためには散骨より、メディアで取り上げられるようになった樹木葬がよいのかなと。資料を取り寄せても遠隔地の情報ばかりで、半ばあきらめて過ごしていた06年春、朝日新聞で「町田に桜葬ができた」という記事を見つけました。「これだ！」と喜んだものの、こんなに身近な所にできるならいつでも見に行けるから、と記事を切り取ってファイルをして安心し、いつの間にか日常の中に埋没していきました。しかし健康診断で赤信号がつき、外来で検査を続けたあげく検査入院となり、これはいけないと気がついて、退院した日にファイルを取り出し、インターネットで「桜葬」にアクセスして、一番早い「説明会」に申し込んだという次第です。

「桜葬」への入会直後の「春のフォーラム」の講師は上野千鶴子さん。まだ出版前の『おひとりさまの老後』の内容をお聞きすることができましたし、「古道ウォーク」では歴史のお話をう

かがいながら仲間と歩く楽しみをいただきました。また、一年を通して企画される催しにチョコチョコと参加することで、思いがけない癒しを受け取ることも多々あります。井上治代先生の社会学のお話の際に「苦しみ・悲しみを抱えて生きている人が、その方の人生で一番幸せだった頃（たとえば幼かった頃）暮らしていた家の見取り図を描くことで、癒される」とうかがった時、たまたま自分で昔の自宅の見取り図と庭の草木を思い出しながら描いていて、今感じている安らぎは何だろうと感じていた時で、深く共感できました。その後、「自分史を書くための講座」の募集もあって申し込んだのですが、参加希望者が少なかったのか流会となりました。残念でしたが、今後の企画に期待をしています。

継続的に「墓友の方々」とお目にかかれる場としては「さくら句会」も与えられました。会報誌「E-net」での呼びかけに誘われて、俳句を作った経験もないのに飛び込んでしまったのですが、月に1回、町田の「泉心庵」に集まり、「貴重な時の共有と生きる力」をいただいています。

以上、振り返ってみると、「桜葬」に出会えたことは、単に「死後の眠りの場の確保」にとどまらず、生きている「今」に彩りを与え、生きる力をいただく結果となりました。心から感謝しています。

En 21

希望どおりの桜葬墓地

塚本忠昭［つかもと ただあき］
60代

私が「自分のお墓」について考えるようになったのは60歳を過ぎた頃からでした。会社の仲間や学校時代の友人との話題が、年齢を重ねるに従い健康や病気の話題も当然出るようになりました。それに伴いお墓の話題も当然出るようになりました。そこでは漫然と「私はお墓なんかいらないよ！　骨を山か海にでも撒いてくれれば充分だ！」と言っていたのですが、いざ撒く場所や方法を調べていくと「なかなか難しい」ことがわかってきました。

ほとんどの友人は先祖のお墓に入るのが決まっている話し振りでしたが、私は学校に上京、結婚し、それ以来町田に住んでいたので、生まれ故郷は懐かしいのですがへ戻ってお墓に入る気持ちにはなれなくて悩み始めていました。

お墓や葬式についてのテレビ番組や雑誌の記事が多くなり、そのうえ、当時、今は亡くなった両親とは不仲になっていて、故郷に戻って両親と一緒のお墓に入ることなど考えもしませんでした。

妻も生まれ故郷にある実家のお墓に両親やきょうだいと一緒に入る気がしないので、こちらで



お墓に入りたいと希望していました。ただ、お墓の探し方も知らなかったのです。

そこで名前だけは知っていた「樹木葬」（中身はまったく理解していなかった）がないかをインターネット検索しているうちに、樹木葬のエンディングセンターが見つかり、場所も現住所に近いこともあり……、まずどんなところなのか？　と説明会に参加してみようと申し込みました。

06年7月2日の説明会に参加し、説明を聞いて、現場を見て、説明会の帰りには入会を申し込んでいました。

選んだ理由は①〝さくらんぼ〟が取れる桜の木、②10数年生活した場所が目の前に見える、③遠くの景色が素晴らしい高台、④墓石がない芝生の墓地、⑤希望すれば家族5人まで入れる、⑥購入費用も安く永代供養も、⑦墓参りにも近くて便利な場所、など迷う理由がないほど希望どおりで、さっそく、桜の木に近く歩道から手が届く（購入した時点では現在ある墓標もなかった）ので、手を伸ばして「会いに来たよ」と触れられる）区画を申し込みました。

入会した秋に、エンディングセンターはＮＰＯ法人として設立されました。

入会してお墓が得られたことで、老後の大きな心配の一つがなくなり、気持ちに余裕が生まれた気がします。

というのは、それまでお墓がずいぶん大きな気がかりだったことが後でわかりました。友人との

話題の中でも①先祖と一緒には入りたくない、②故郷から分骨したがビックリするほど費用がかかった、③購入する費用が高すぎる、④買った場所が遠くて車でしか行けなく、運転できなくなったらお参りにも行けない、⑤子どもがお参りに来てくれるか不安だなど、お墓についての不安をもっている友人も多く、これらの不安をほとんど解消している「桜葬」の話をしました。興味深く内容を聞かれたので紹介して、入会した友人もいます。

　翌07年春から「桜葬メモリアル」には必ず出席させていただいています。元気なうちに先に亡くなった方々を偲び、そのうち同じように私も偲んでいただける、この桜の開花時期に合わせた桜葬メモリアルは素晴らしいセレモニーだと思っています。私の死後、家族がお参りに来てくれるのです。仏教の読経と散華・キリスト教の説教や賛美歌・フルートの演奏等を聴きながら喪服を着ないで参加できるセレモニーは素晴らしく、それと同時に開催されるフォーラムでは、上野千鶴子先生の「おひとりさまの老後」、樋口恵子先生の「ピンピンコロリ」、佐藤伸彦先生のお話など、普段では接することの難しい、著名な先生からのお話も楽しみです。桜葬メモリアルの参加者も増え、２０１１年は会場の都合でしょうがフォーラムは中止になり残念でしたが、大震災の後で交通機関も完全復旧してないうえ、寒くて風の強く吹くなか、想像以上に人が集まり参加してよかったと思いました。参加した皆さ

んの思いは同じなのだと感じました。
いつも「桜葬メモリアル」に参加し思うことは、
ことです。できるならばこの世でもお付き合いさせ
と思っています。そう考えていたなか、エンディン
結成に参加しました。この会の活動をきっかけにお友達を増やせればきっと楽しい桜葬に
あの世の同窓会もきっと楽しく迎えることができると考えています。

En 21

樹木葬墓地に眠る私

鈴木和子
［すずき かずこ］
60代

「樹木葬」という言葉を最初に知ったのは１９９０年頃かあるいは
もっと後であったのか、私の40代後半頃です。
「樹木葬のすすめ」というタイトルの本に出会いました。私がどういうことでその本を手にと
ったのかも記憶にないのですが、確かに読んだという覚えがあるのです。その時「こんな方法も
あるのだ、いいかもしれない」というような感想をもったのでした。またどこかの章の中で関東



圏に住んでおられる方の記述を読み、遠からず10年くらい先には東京近辺にもこうした墓地が造られるのではないかしらと感じたことを覚えています。

その頃、私は中学時代にはほとんどなかったのですが、校になると2年生くらいの親ごさんの訃報を目にするようになりました。PTA仲間の子どもの持ち帰るPTA広報誌に、小学の親の訃報も増えるにつけ、いろいろ考えさせられました。告別式にうかがう機会が理の母も送り、夫の長兄がとり行う葬儀式も体験しました。

その時々の私は葬式とか費用とかではありませんでした。縁ある方と死別したり親しい方が遺族の主たる関心は葬式とか費用とかではただくだけで、どうも自分の心がしっくりとおさまらない、死が無念であるという想いはあるもの、しっかりとお別れができたり、あるいは遺族の方に心を寄せてお悔やみの気持ちを表せたのか……という点で、どこか腑に落ちずに帰路に就くということが強く印象に残っているのです。

め」という本に出会ったのでした。とにかく、そんな折に「樹木葬のすすやがて私の50代半ばの2002年、夫が病没し、突然喪主の立場になり、また遺骨を埋葬するほどすぐに納骨しなくては、ということもありました。その頃の社会現象として、昔著名人も手元に長く遺骨を置いて手元供養している例も少なくありませんでした。

私は何事も世間常識に照らして行動することには抵抗感があり、「自分としてはこうしたい」という自意識の強い性格のようです。いったん世間の常識的判断を了解できればとても素直に行動に移れるのですが……。

2年ほど、墓地探しをしているうちに、ふとかつて読んだ「樹木葬のすすめ」の本を思い出しました。

そうした折、地元で死と葬送に関する講座が開かれて、そこに出席してみました。数日後開催というフォーラムという催しを知りました。エンディングセンター主催の春のフォーラムで井上治代さんの名前を、あの本の中で知った関東圏の人はこの方かも知りませんでした。会場で井上治代さんの名前を、あの本の中で知った関東圏の人はこの方なのだと一致したのです。その時は驚きました。私が直感したとおり、東京近辺で樹木葬は開かれる運びになっていたのです。フォーラムの翌月、町田での「桜葬」墓地の見学会に出席し、その場で会員となり墓地使用を願い出ました。

夫をこんなに早くあちらへ送ろうとは思っていませんでしたが、私自身の生き方として考えていたことが結果的に私たちの眠る場所をまよいなく定めることができたのは幸いでした。不思議ですね、明日がわからないから今日を精一杯生きようと日々暮らしていることの中で、将来の準

備をしているようでもあります。

私はこの頃とても強く思います、生きていくうえで大切なのは、自分の直感と縁ではないかと。人間に備わっている一人ひとりの直感が自分をよりよい方向に導いてくれるように思います。その時、日々自分を見守ってくれる人々への感謝は大切ですね。自分自身で考えて生きているつもりでも実は生かされているのかもしれないとも思います。他界した4人の両親と夫には、日々「おかげさまでつつがなく暮らせております」と対峙、感謝しています。

En 21

あの秋の日に

渡辺美佐子
［わたなべ みさこ］
50代



どこまでも高く青い空で、キラキラとした陽射しが眩しく、爽やかな秋風が柔らかく吹いている日でした。検査結果の出るまでの3時間をどう過ごしていよう、同伴の夫と思いあぐねていました。「そうだ！　あそこへ行ってみたい……」。いつのことだったか新聞記事に載った桜葬墓地を思い出した私は、迷わずタクシーに乗り込んでいました。

「あのぉ、場所がよくわからないのですが」

その時の運転手さんのお顔を今でもはっきり覚えています。たいそう困り顔でした。しかし、こちらはもっと困っていました。所在地もわからぬ墓地を往復し、3時間で向ヶ丘遊園駅からバスの大学病院へ戻ってくることができるだろうかと。

その日の私は、たぶん相当についていたのでしょう。運転手さんがまず、優しく、親切な方でした。私の真剣な訴えを聴き止めてくださり、「ナビで検索しながら行ってみましょう」と、車を発進してくださったのです。

確かなことは桜葬の共同墓地ということだけで、東京都下の、町田市だったような。お寺はあったような。それだけの情報で、運転手さんは車内に差し込む秋の陽に汗をかきながら、カーナビと外の標識を見ながら探してくださいました。

「こちらではありませんかね」

道路から見上げる所に大きな墓苑が広がっている場所に車が止まりました。運転手さんは私を桜葬墓地へ届けてくる旨を伝え、タクシーを降りました。外の風がたいへん心地よく、がんの告知が待ち受けていることなどすっかり忘れ、私は案内を乞いました。

お昼の休憩時間帯に突然お邪魔をしたわけですが、ここでも、私はついていました。職員の

方々が中にいらっしゃったのです。ご不在でしたらアウトでした。

「どうぞ、こちらです」と、桜葬墓地に通してくださいました。季節は秋でしたから、芝も枯れていました。これから訪れる冬の支度に取りかかっている、そんな風情も葉を落とした母をここへ案内してあげよう！

でした。

その墓地を見て、「なんだか寂しいねえ。墓石もないの？」と、夫が一言。私は秋の風に吹かれながら、一人ほくそ笑んでいました。死んだら、この丘を風と共に吹き抜けて、桜の木の下で眠りたい。

今日の今、ここを買っておきたい。購入手続きをして指定時刻に病院へ戻れるだろうか。大丈夫！　今日の私はついている！　当たって砕けろ、よし！

事務所で入会金を納め、私の誕生日と同じ区画番号の墓地を予約しました。待っていただいているタクシーへ急いで戻り、「運転手さんのおかげでいいお墓が買えました」と、報告をしました。これから病院へ戻る私が墓を買ったというので、恐らく、憐れんでくださったのでしょう。運転手さんは、「メーターを止めておいたから、料金の心配は要りませんよ」と、おっしゃってくださいました。高い買物をしてきたわけで、タクシー代の数千円など笑えることでした。が、お金では買えない何か温かいものを手に入れた思いでした。

その日の私はやはりついており、病院の診察室に定刻どおり入れました。私自身の死後の、とりあえず一つを片づけてきたからでしょうか。不思議なくらい冷静に医師の話を聞いていました。

手術後は何かと体が不自由になると聞き、入院前は家中の整理整頓の日々でした。ラジオを聞きながら、食器棚、押し入れ、クローゼット、洗面台、靴箱、それらの収納棚を、扉を開けたらすぐ目に見渡せるよう片づけていきました。

一日で見渡せる日、そのラジオから初めて聞く歌が流れてきました。胸に迫るものを感じながら、じっと聞き入りました。「千の風になって」という歌でした。桜葬墓地を訪れた時に感じたままの歌でした。丘の上から風に乗って会いたい人の所へいつでも行けると感じた、私の心情そのまま。驚きと、嬉しさと、そして、切なさで、誰も居ない家の中で声を上げて泣きました。

自分に降りかかるこの世のできごとはすべて必然のことである。がんを患ってしみじみそう思う私です。桜葬との出会いも然り。あの秋の日から5年、桜葬は常に私の後ろ盾であり、いつ千の風になっても構わないという心持ちでいられました。桜葬墓地に眠った暁には、桜の花の開花を待ち焦がれていた両親と、心行くまで散策を楽しもうと思っています。

NO.2
わらぶきやね



さくら、さくら、さくら

冬のこごえる寒さの中、夫の手をにぎると氷のように冷たかった。
秋に八ヶ岳の天女山で、スケッチをした。くれない色の紅葉が空いっぱいに広がり、彼の顔も燃えていた。
初夏、新緑の八ヶ岳、山々が私たちをよんでいた。山つつじの控え目なオレンジばなが野原に咲いていた。
春、夫の病室から見える景色は建物だけだった。満開のさくらがさくなか夫は、花びらが風にふかれるように、散ってしまった。

『小野威·和子 詩画集　命のメモリー 2008』より
画·小野たけし／詩·小野和子

En21合記

桜葬の思い出

中原葉子
［なかはらようこ］
50代

私は3人姉妹の末っ子です。8歳年上の長姉は病弱な母の代わりに、もう孫もいる私のことをいつまでも見守り、手助けをしてくれていました。

2006年12月、出産以外は入院したこともない健康な姉が、突然身体の不調を訴え、検査の結果末期がんの診断、そして「何もしなければ、春の花が咲くまで」と医師から告知を受けたのです。姉の傍らには、姉の夫と娘、私、私の夫（医師）、私の息子（放射線技師）が囲むなか、「先生、春の花といっても梅？　桜？　限りある命なら、それまで心の準備やしなければいけないことがたくさんあるので、花によって時間が変わってきますから……」と主治医に迫る姉。

唖然とする家族の前で、どうすれば1日でも逝く日を遅らせることができるかと自ら医師の判断を冷静にたずねている凛とした姉の姿はたくましく、勇気をもらったのは私のほうでした。その後、抗がん剤治療を淡々とやりとげていく姿に感動しました。

自分の葬儀を行う場所を決め、頼まれて私も同行しましたが、会場の隅々まで見学し控室まで



姉妹3人で出かけた伊豆旅行にて。右から筆者、長姉俊子さん、茂子さん

確認して納得し、私に当日のいろいろな指示もしました。

ある日、姉から人のことばかり考えてきた姉は晩年、海のない所で育った姉は晩年、海の見えるのが好きでした。墓をもたずきれいな青い海に散骨してほしいと思っていると埋葬の相談を受けました。

た姉の家族は「話をしに行きたい時、はっきりしている場所がないのは嫌だ」と言行きたい時、はっきりしている場所がないのは嫌だ」と言より人のことばかり考えてきた姉は散骨をすぐ撤回しましたが、行く末承継者として迷惑をかけることを好みませんでした。何子どもや孫たちに墓地を買い、してほしいと頼まれました。早く探す手伝いをか別の方法をそして、2007年2月、町田いずみ浄苑・エンディングセンター桜葬墓地の説明会の記事が目にとまり、姉本人ともう一人の姉と3人で参加したのです。井上治代さんのお話の要旨に感銘した姉は、すぐその場で申し込みをしました。残念ながら残り少なかった個別区画は抽選ではずれましたが、次を待てない姉は共同区画でもよしとし、残される母の分まで申し込みをしたのです。これも妹二人が母を見送る時に困らないようにという姉の思いやりでした。

手続きを済ませ、泉心庵で遺言ノートを購入し、家路に着いた時の姉の顔は安堵そのもので、末期がんを忘れさせるほど生き生きと輝いていました。

春の花が咲くまでと告知された姉でしたが、梅の香りを感じ、自宅近くの満開の桜も仰ぎ、義兄

との旅、娘との温泉巡り、母と三姉妹での親子旅行、孫や姪、甥たち主催の励ます会など、たくさんの思い出づくりに、治療を続けながら必死で生き抜いた1年間でした。

２００７年11月より体調の著しい変化に、終末期医療を受けるべく入院生活が始まりました。ベッドにいながら忙しい医療従事者の皆さまへの心遣い、見舞いに来る親族のそれぞれの生活や立場に気を配り、私がいつまでも部屋にいると「主婦は仕事がいろいろあるでしょうから、もう帰りなさい」と言う姉でした。

そんな気丈な姉が精神的に辛そうな日々が……。主治医の先生から「私たちは患者さんの辛いことをできるかぎり取り除くことを心がけています。お姉さんはどこも疼痛はないとおっしゃるのですが、寝ている時でも眉間にしわを寄せ辛そうなのがとても気になるのです。妹さんに何かお話があった時は教えてください」と言われました。妹さんに何かはありますが、ある日病院内にいらっしゃる神父様とお話ししてみたいと言いました。姉が無宗教の姉ですが、ある日病院内にいらっしゃる神父様とお話ししてみたいと言いました。すぐ主治医の先生が段取りをつけてくださり、神父様が病室に来てくださいました。姉が望んだので私たち妹二人も部屋を出ず同席しました。

神父様といろいろなお話をし、最後に姉が「神父様とても辛いのです。でもいけないことでしょうか」と覚悟したような面持ちで言いました。お見舞いに来るたびに、娘は「ママ頑張って」、

姪、甥たちも「もう少し頑張って」、年老いた母も「もう頑張らなくていいよ、おばちゃん、頑張って」と言いました。皆にこう言われても、自分はもう頑張りたくない、もうお迎えに来てほしいのです。これが姉が初めて私たちに言った本音でした。その頃はもう食事も取れず、ほんの少しの水分とたまにアイスクリームを口にするくらいでした。

そこで私は、家族、親族の皆さんに集まってもらいこの話をしたのです。「もうお姉さんは十分に頑張ったし、自分なりにやりたいことは残すことなくやりとげたのでしょう。だからこれからはみんなで、『もう頑張らなくて大丈夫だよ』『皆それぞれ心配しなくてもちゃんと生きていけるからね』とお姉さんを安心させて、いつでも心おきなく逝けるようにしてあげましょう」と、思い切って言ったのでした。そこにいた全員が泣きながらも「そうだね」と賛成してくれました。

その日以来、私は「神様、姉が望むように早くお迎えに来てください」と祈るようになりました。

2008年の1月、親族13人の見守るなか、静かに安らかに旅立ちました。姉から知らされていた葬儀社へ連絡した際、担当者の方から「長年この仕事をしていますが、本人自らご自分で葬儀の相談を受けたのは初めてだったのでよく覚えています」と言われました。しかも通夜、葬儀の後のお清めの料理やお酒の数まで考え、見積もりまでとってありました。姉の遺志を尊び、親

族だけの家族葬を執り行い、いずみ浄苑の桜が咲くのを待ち、納骨はまさに桜葬とさせていただいたのです。

姉の桜葬を通じて親族の皆が多くのことを学び、それぞれが自分の最後の時を真剣に考えるようになりました。すべてエンディングセンターの皆さまとの出会いが始まりでした。姉の死を静かな心持ちで受け止められ、本人の遺志を大切にすることができた喜びが親族の皆にありました。

この場をお借りして心から皆さまに御礼申し上げます。

En21会記

桜葬への想い

五月女雪子

［さおとめ ゆきこ］

60代

桜葬を知ったきっかけは、２００５年５月９日の神奈川新聞「いきいきすこやか」陽だまり喫茶店の、井上治代代表のエッセイでした。見出しの「木の下で眠る『桜葬』死と向き合った家族」が目に止まり、なんとなく読み進むうちに、あっこれだ、これだわ、と一人納得し、心に留めておくことにしたのです。

私ども家族は、１９８９年５月に転勤先の石川県加賀市で主人を病気で亡くしていたのです。

2011年9月、トルコ巡礼の旅にて

娘2人と加賀市に残るか故郷に戻るか迷っていました。小学4年生と2年生になっていは「また転校、いやだなー」と言いました。せっかく学校にも、夏の海、冬の雪にも慣れてスキー、スケートと楽しんでいました。特に順応性の高い長女はわずか2年余りの間に言葉も加賀弁になっており、友達もたくさんできていたのです。次女は加賀弁にはとうとう馴染みませたが、それなりに楽しんでいました。この地で親戚もなく、兄・姉たちからも遠くにいてていけるのだろうかと、不安でいっぱいでした。また、経済的にもやっていけるのだろうか……。幸いにもまだバブル期で、私にも仕事があり会社の理解もあり、持ち前の楽観主義という加減さも加わり、健康でいさえすれば大丈夫、この地に残り娘たちをのびのび育てていこう、のです。そして18年間加賀市で暮らしたのでした。その間、あと先も考えず、墓地を求め主人を埋葬したのです。

娘たちも事故、怪我、大病もせずにのびのびと育ちました。もともと東京生まれの娘たち職を迎える時期になり、長女から「東京で就職してもいい？」と聞かれ、本人の選んだ道に気持ちよく送り出しました。その数年後、次女も「私もやっぱりお姉ちゃんと同じく東京に就職する」と。大学を決めた時には加賀に残るのかと思っていましたが、そうか、二人とも東京の水が合うのかと思いながら、これでいいのだと思いました。娘たちも何ごともなく成長した、嬉

しく思ったものです。寂しさもありましたが、生来のケセラセラ的人生。私も一人冬の雪にもめげず楽しみながら、その後数年は加賀市に留まりました。

それまで雪も比較的に少なかったので助かったものの、その後2年続きの大雪（地元の方は大雪ではないと申しますが）、これにはほんとうにまいりました。朝晩の駐車場の雪かきを毎日繰り返しました。そんな折、娘たちから横浜に出てきて一緒に暮らさないか、との話がありました。これから先、年老いてこのような生活が続けられるかどうか迷っていたところでしたので、まだ60歳前だから仕事も何かあるだろう、今なら働ける、との思いに転居を決めました。加賀では友人知人にも恵まれていましたので離れがたかったのですが、最終的には娘たちに世話にならなくてはいけないのだと思い、２００５年3月に横浜に転居してきました。

そこで一番たいへんだったのが主人の眠っているお墓でした。このまま横浜での生活が安定するまで加賀に残しておくか、お骨だけ持っていくか、いずれにしろ最後は此方に移動しなくてはいけないのだと考え、横浜に移ってから何度も加賀に足を運ぶのも旅費等もたいへんな金額になるし、また墓石、墓地を整理、返納しなければいけないことになっていましたので、いろいろ考えた挙句、お骨は一時教会に預かっていただき、墓地は整理し返納してしまいましょうと、結論を出しました。

お金をかけて処分するなんて、なんてもったいないことでしょう。そして、今度墓地を求めるときは何も残らない（残さない）ような形にしたいと思っていました。その数日後、次女が突然「お父さんどうするの？」との問いかけに、忘れていたわけではないのですが、のんきな私は1、2年はお骨を教会に預かっていただいてもいいかと思っていたので、「えっ？」という感じでした。幼くして父親を亡くしてあまり思い出もないと言っていた娘からのうれしい言葉でした。

それからがたいへんでした。娘に「9日の新聞知らない？　探しているの」「私ちょっと使って捨てたけど、まだゴミ箱にあるよ」。クチャクチャになった新聞を広げ、「これ連絡して行ってみない？　この桜葬に」。

そして5月だったと思いますが、桜葬ミニ講座に参加しました。「自然が残っていていいわね。お父さんもきっと喜ぶよ」と、早々に共同区画を求めてからお骨を引き取りに加賀へ。そしてずみ浄苑の職員さんの手によって、親切、丁寧に納骨していただきました。

私もいつの日か入ることを約束し、その後も毎年桜葬メモリアルに参加、今年は東日本大震災のため欠席してしまいましたが、それでもきちんと慰霊祭を行っていただき感謝です。また、い

ろいろなサークル活動を通して墓友などと申しながら、鎌倉古道を歩く会、陶芸教室、なかなか話を聞く機会のない方の講演会等、楽しく参加させていただいております。そしてE-net」、ありがとうございます。心よりお礼申し上げます。会報誌「E-net」、ありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

En21合記
来しかた 行くすえ

桜葬に決めるまで

山脇洋子［やまわきようこ］
60代



私には子どもが3人います。長男・長女・次男で、真ん中の長女は95年に病気で亡くなりました。そのあと、いろいろな経緯があって離婚しました。長女は夫の家の墓に納骨したのですが、私は入れない。私の遺骨は行き場がなく宙に浮いてしまう。そうなると長男・次男が困るだろうと思っていました。

エンディングセンターには、活動を支援したいという想いから2002年に入会しました。その後、新聞に樹木葬の記事が出て、代表の井上治代先生と1時間くらい電話で話したことを覚えています。いろいろな話をしてくださって、そのとき樹木葬がいいなあと思いました。一関の樹

木葬に決めようともしましたが、子どもたちが東北まで行くのは大変だろうと迷っていたところ、町田に桜葬墓地ができたという情報があり、すぐに契約しました。

私が桜葬を選んだのは、長女の学校が桜陰学園でしたので、桜を見ると娘を思い出しますし、満開の桜の下で子どもたちと入学を喜んだとか、桜に思い出があったからです。

桜葬に決めたことで、安心しました。人間死んだらゴミになるかもしれないけれど、遺された子どもたちに迷惑をかけないですみますから。立派なお墓を建てたとして、維持が大変ですし、それに思い出される人がいなくなれば、お墓は必要ありません。桜葬は後継ぎが要らないので、安心です。

死ぬことを忘れている今の私

私の今年の目標は遺言書を作ることです。現在元気なので「死ぬこと」を忘れています。死ぬことを忘れていると、ふと突然その日が来たとき、どうしようと思いますよね。だからお墓を契約しただけでは終わらない。家の処分など、きちんとしておかないと、息子たちが大変かなと思います。あとは、お葬式用の貯金通帳を別口で用意して、この範囲でやってちょうだいと遺言しておけばいいですね。私は、「私が死んだら（そこを）見なさい」と言って、自室のある場所に、

エンディングノート、連絡すべき人、尊厳死協会契約書、遺影用の写真も用意していました。

あとは友だちがいっぱいいるうちに死ぬかどうか。最後の一人というのも絶対にいやだし、死ぬのも楽しみです。人生初の経験だから。だから死んだ後のことは考えないですね。

桜の下に眠るまで、私のやるべきこと

私は大学を卒業後、製薬会社に就職し、その後医療機関にて63歳まで働いていましたが、いま地域に、自宅前で小さな漢方薬局を始めました。7年になりますが、この間に思うことは社会が壊れているということです。長屋の井戸端会議のようなものがなくなり、家庭内の問題をちょっと相談したり、話を聴いてもらって癒されるということがなくなってしまいました。知らずの人が話をしにみえます。アドバイスを求めることよりもただ聴いてもらいたいという方です。夫を亡くした方、家族に精神疾患を抱えている方、特殊なケースでは店を閉めようとしている時、家に帰りたくないから泊まる所はないかという年配の方もいらっしゃいました。

「薬剤師」ではなく「傾聴師」になりつつあります。

エンディングセンターの援助で始めたサークル「気功ゆいの会」も細々ながら満7年になりましたが、今では1カ月に1回会える仲間という

親近感が深くなりました。飯能の「お灸ツアー」も発展しています。

お墓は決まった。でもお墓に行くまでに、まだやるべきことがある。それには足腰を鍛えることです。墓までではまだ簡単に行けそうもないですから、足腰は大事です。それには気功が一番です。気功は、自分の中の「気」をめぐらせることもできます。養生法の一つです。ヨガでも太極拳でもいい。東洋に残された先人の遺産は、誰でもいいです。私はそれをある程度身につけましたから、お裾分けする義務があるような気がします。いいものだから広めたい。これからも一人でも多くの人にお教えしたいと思っています。

宙

夫とふたり、歩き親しんだ場所が終の棲家に

荻原節子［おぎはらせつこ］ 70代

私の母は老衰で、施設に入っていました。08年4月に主人が亡くなり、この際父の墓をこちらにもってこようと思いました。といっても父は戦死して遺骨もなく、本家のお墓に小さな石碑が建っているだけです。福島県伊達市にありますが、親族も今はいとこの子どもの世代になり、ほ

とんどお付き合いがありませんし、いずれそこに母を埋葬しても、お参りに行くのもたいへんでしょうし、跡継ぎもいません。前からわかってはいたことですが、お墓ってきっかけがないとなかなか考えられないものです。

主人は献体登録をしていました。大腸がんで大学病院に入退院を繰り返し、お世話になった医師への恩返しのつもりでした。それに、自分は「散骨でいい」と言っていましたから、最初はお墓をつくる予定などありませんでした。たまたま、鶴川の駅で「桜葬はこちらです」という案内を何回か見かけて、「桜葬」って何だろうと、いろいろ調べるうちに、エンディングセンターの墓地があることを知りました。そして、これもたまたま、お墓のことを考える合同フォーラムが多摩センターであり、桜葬のことや、散骨・手元供養など、今まで全然知らなかったようなことがわかってきました。

桜葬のある墓苑の辺りは、家から近かったので、開発される前はよく散歩していました。すごく好きな場所で、そこから黒川に抜けるコースは年中歩いていたものでした。あそこだったら、一番理想の場所だと思いました。

主人の遺骨が献体から帰ってくるのはまだ先のことでしたので、考える時間がありました。ふ



関東·中部地方の低山や丘陵地に見られる、ヤブザクラ。2004年16年3月29日黒川にて撮影

つうですと、亡くなるとすぐに葬儀をして四十九日をして、お墓を探して埋葬、というこ心身ともにくたくたで何もわからないまま業者の手で運ばれることが多いようです。でもが戻るまで1年半ありましたので、遺品の整理をしながら、主人が何を思い何をしてほしか、考えることができました。桜葬の見学にも行きました。

そうしたら、桜葬の墓地がこれから募集というときでしたのお墓はあそこが一番いいなと思い、「風の旅人」に決めました。「風の旅人」の最初の契なったのです。09年の6月でした。

それで、たまたま「宙」がいくつか残っていますと言われて、その場に行くと、引き込ようにに「宙」の中に立ちつくしました。眺めが素晴らしく、開放的ですごくよかったのです。

主人が日頃言っていたことを思い出し、「ここが主人の居場所」と確信しました。

主人は、昔から、墓石がだーっと並んで、山がどんどん削られているのを見ては、「こんなところに入りたくない」と言っていました。「自然破壊につながる墓地はいらない」と、海への散骨を希望し旅立って1年余り。でも、私は心のよりどころに何かがほしかったのです。樹木型墓地「宙」の素晴らしい空間、その地は黒川に隣接し、2人でバードウォッチングに、植物散策によく歩いていた所でした。横浜を見渡す高台で、風に吹かれてたたずんでいると、心が落ち着き

ます。このような墓地に出会えたことに感謝しております。

09年の秋、主人が献体実習に入っていると心がざわつきました。そのとき、一リアルに参列しました。ちょうどあの日は十五夜でお月さまがものすごくきれいで、幻景のなか、オカリナの献奏と献灯。周囲ではコオロギの鳴き声が聞こえ、私の心も落ち着きを取り戻すことができました。

その年の暮れも押し詰まった頃に主人の遺骨は帰ってきました。年が明けて、2月に埋葬して、4月中頃の天気のよい日に、半分残しておいた遺骨を東京湾に撒きました。主人は海釣りが好きでしたので、よく行っていた三浦半島の観音崎で散骨をしました。

11年4月に母が亡くなって、5月の連休に「風の旅人」に埋葬しました。ですから、今度の桜葬メモリアルが初参加となります。

後々の負担を心配せず、自然の中で眠れる心のよりどころとして、またメモリアルに参加することで、自分の気持ちも楽になりますし、周りの方にも声をかけて一緒に来てもらえばいいし、いいことだと思っています。

宙

お墓への想い

中村憲弘
［なかむらのりひろ］
70代



お墓とは誰のためのものでしょうか？　ご先祖様・両親・家族・子ども・孫・建立した人のため等、いろいろな考え方があると思いますが、正直なところ答えが見つかりません。

信心（信仰心）の希薄な私の為せる業なのかもしれません。

私は4人姉妹の男1人で東京生まれの九州育ち。上京してから50余年の歳月が過ぎましたが、父親の実家が九州にあるため、先祖代々のお墓も遠い九州にあります。父母の葬儀を東京で行い、九州に埋葬したため、いろいろな法事・春秋のお彼岸・お盆等のお墓参りのため、今でも毎年5～6回の里帰りも余儀なくされ、年々負担も大きくなりストレスの温床となってきました。

1998年頃、当時ベストセラーになっていましたエンディングノートを入手し、その中でエンディングセンターの活動を知り、精査した結果、価値観の共有が図られ、終の棲家である自然への帰属に共感を覚え、樹木墓地「宙」を購入いたしました。

その後、私の代で墓地としての形も変わり、位牌も仏壇もなくすことに対する周囲（親戚筋等）の了解を得ることの難しさは筆舌につくしがたく、約3カ年の歳月を要しました。

最大のネックは、親戚長老の了解を取ることでした。先祖代々の霊を何と心得ているのか？両親の墓を捨てるつもりか、……罵詈雑言を浴び、時代の変遷と思想のギャップの大きさと難しさを痛感いたしました。

私が40代で両親の葬儀を行った当時は、葬儀社と菩提寺の指示のままお金と時間を充分にかけて執り行いましたが、月日の経過と共に何かが変で、変えるべきで、変わらなければならない、と思うようになりました。

特に墓地の維持管理について、墓参の都度、墓地全体が年々その姿が著しく変貌し、無縁仏のような荒涼としたエリアが増えてきています。これも少子化と過疎化が進み後継者が大幅に減ってきている現状なのです。

雑草に埋もれコケに被われ文字も読めなくなっている墓石を見る時、この先、どのようになってゆくのか考えさせられます。遠方に住んでいるのでとの言い訳は通用いたしません。

これらを踏まえて、私は後世（子や孫）に余計な責任や負担を強いてはならないと考えます。

生前に自分たちのことは自分たちで対策を講ずる必要があるとの思いから、樹木葬墓地を選定し、エンディングノート（遺言書）と共に準備しております。

木立

夫と決めた終の棲家は桜のもと

昆カズコ［こんかずこ］
60代

とても大切なことなのに、何の迷いもなく導かれるように物ごとを決めてしまう時があると思います。

私と桜葬との出会いの時もそうでした。

私は看護師として、社員の健康管理のお手伝いをする仕事を30年余り続けてきました。健康に関わる仕事だからこそ、誰にも必ず訪れる死を考えさせられる機会もあり、死の話を「縁起でもない」とタブーにするのではなく、自分の人生の最後はどうしたいのか、経済的なこと、医療のこと、葬儀やお墓のことまでも考えておくべきではないかと思っていました。

私は、数年前子どものいない叔母を見送りました。叔父も高齢だったため、姪である姉と私に、葬儀やお墓などのほとんどのことが任されました。

日頃からしっかり者の叔母でしたから、自分が亡くなった時はどうしてほしいのか手紙を残してくれていて、私は叔母の希望どおりに事を進めていくことができました。

叔母は入退院を繰り返していましたので死を覚悟しての手紙だったと思いますが、感謝の気持

ちと自分らしく人生を終わりたいという気持ちが伝わってきました。

夫も私も、両親や身近な人々を見送る年齢になり、自分に何かあったらどうなるのされた家族は困るだろうな……漠然とした不安な気持ちがずっとありました。

夫と私は宗教が違います。結婚後もお互いの宗教は尊重して過ごしてきましたが、ては一緒に入れるよう宗教が自由であること、子どもに負担をかけないよう継承者ができれば明るい環境のお墓がいい、と希望がありました。

でも、そんな都合のいいお墓はなかなかありません。

ある時、ＮＨＫの番組で偶然目にした桜葬に共感できるものを感じました。

見学当日は雨でした。傘をさしながらでしたが井上先生にゆっくりと現地を案内していただいた時、「あなたが生きていたこと　桜は忘れない」という言葉を聴き、胸が熱くなっていたことを思い出します。

事前に下調べをしていたので気持ちはほぼ固まっていましたが、井上先生から直接お話をうかがい、もう私たちの終の棲家はここしかないと確信しました。

「お墓は、あなたがよければ僕はどこでもいいよ」と言っていた夫が、いざ区画を決める時には、「高い位置で東南の角がいいよ」と言うし、井上先生も「横浜が見える方向がいいかもしれ

ませんね」とおっしゃいました。
死んでから、景色と陽当たりは関係あるのかなぁーとちょっと笑ってしまいました。
希望どおりの棲家が決まった安心感は想像以上でした。
年を取るといろな不安が出てきますが、今自分にできることを一つひとつやっそんな気持ちにさせてくれました。
を取っていこう、
桜葬墓地の近くにJA川崎の農産物直売所があります、ときどき新鮮な野菜を買いが、帰りに桜葬墓地に立ち寄ります。いずれ私たちがお世話になる所ですから、気軽分で四季折々の景色を楽しんでいます。
先日、高校時代のクラスメート数人が集まりました。皆、地方出身で実に約40年ぶす。思い出話に花が咲きましたが、しだいに老後のこと、健康のことが話題になってその時、S君が数年前に大病をして肺の一部を切除し、今も治療を続けていると話しほら、昔から墓ば作ったら長生きすると言うやろ。オレは絶対に行きます「墓も作ったよ、けん！」と笑いながらふる里の言葉で話します。
S君は地方で会社を興し、最近東京に支店を出したバリバリの実業家です。家族を事も充実した日々を送っています。死を意識することにより、今を一生懸命生きていにはS君がとても輝いて見えました。

木立

桜が大好きだった主人と眠る

木名瀬沙代子（きなせ さよこ）
60代

主人は次男です。本家のお墓には入れません。「どこか探さないといけないね」と日頃から二人で話していました。

主人はなにしろ桜が大好きな人でした。毎年お花見の時季になると、まず千鳥ヶ淵に下見に何度も出かけ、「○日頃がよさそうだ」と言うのですが、私も仕事をしていましたから、いつでも行けるわけではありません。「じゃあ、お昼頃から行きましょう」と言うと、「いや、桜を見るのは午前中だ」と、こだわりがあるんです。午前の桜のみずみずしさをめでていました。主人のお供で、毎年のように花見に出かけていました。

住まいのある所沢市にも、東川（あずまがわ）という川があって、そこの桜は必ず見に行き、思い出がたくさんあります。子どもが成長してからは、三春の滝桜から弘前、角館、吉野の千本桜、淡墨（うすずみ）桜などを二人で見に行きました。お友達を誘っても行きましたから、3月、4月は落ち着かない日々を送っていました。

主人は20年ほど、がんを抱えながらも元気でおりました。その時私は、すでにある雑誌（「い

きいき」）で「桜葬」の記事を見ていました。主人のがんは転移し、「もうそれは切らない、がんと共存する」と決めた時、私はその記事を見てもらうことにしました。「体調のいい時に見に行こうよ」と主人は言っていましたが、それは叶いませんでした。

２００７年４月、満開の桜の下を新しい家に越し、孫４人２家族の楽しい笑い声のなか亡くなりました。主人の望む（家族、きょうだいだけの）葬儀をし、その年の６月、私が「桜葬」の見学に行きました。でも、最初の「Ｅｎ－21」のエリアは合祀墓しか空いていませんでした。その時の案内の方が、「秋になったらもう一区画できますから、お待ちになったらいかがですか」と言ってくださいました。

いつまでもお骨を埋葬しないでおくのは、私には精神的に負担でしたが、でも秋までならと、家族と一緒に暮らしました。それが結果的にはとてもよかったのです。

二世帯住宅で同居した孫たちが、毎朝２階から降りてきて、「じいじ、もう大きくなったかなぁ」と声をかけるのです。私たちの世代は、そこにお骨があると、なにか畏敬の念をもって接するという気持ちがあります。でも、子どもにはまったくないのです。その年に幼稚園に入った孫は、骨箱の覆いをとって、コンコンと叩くんです。そこにじいじが居るということをイメージできるのでしょう。この時間の経緯が、孫たちの成長にきっと役に立つこととなるのでしょう。

桜のもとに埋葬してからは、桜と主人と私の関係が変化しました。「桜のもとがいい」と思ってきた私が、皆さんのすすめているお墓の意味を勉強したり、桜葬メモリアルではいろいろな方とご縁をいただいて、支えていただいています。それは今までの私の生活のなかになかった部分として、これから大きな意味をもっていくと思います。ありがたいことです。

「木立」の区画を選ぶ時、ちょうど桜の木の根元が空いていました。「あ、これは主人のために約束されていた」と思い、その場所に決めました。孫たちもお参りに行くと、「じいじい」と言ったりして、なでなでしています。

後年、一緒に住んでいる息子の嫁のお母さんも、樹林墓地に入れていただいており良いご縁をお母さんにも会えるので、とてもよかったと思います。主人が桜が好きでよかった。

主人を亡くして「寂しいでしょう?」と心配してくださいますが、主人とはいつも一緒にいると思えて、気持ちがすごく楽です。ですから、日々楽しいのです。

主人の想いをかたちにし、次は私の番です。生き方を整え、桜のもとに行ける日まで、私らしく、毎年の桜をめでていきたいと思います。

木立

桜葬に癒されて

岩淵修身
［いわぶち おさみ］
60代

いつ頃からだったろうか。枝先まで満開になった桜を待ち焦がれるようになったのは……。それは冬の寒さが身にしみて感じられる年頃だったような気がします。しっかり者だった母が認知症を患い、まるで気力をなくしてしまったように見えていた頃でした。

大切な母にはもっと長生きをしてもらいたい！　そんな一心から気分転換による精神療法を試みることになりました。春を待ち兼ねたように、可愛らしくなった母を伴い、趣味の写真を撮りながら各地の桜を見に行き始めたのです。

福島地方へ行った時でした。ちょうど満開になった、地蔵桜といわれる紅枝垂桜に出会った途端、母は何かに取り憑かれたようにカメラのシャッターを切り始めたのです。

関東では見られない力強い枝ぶり、それに合わせるようなやや濃い紅色の花、長い冬を越えて一気に春が来たと思わせるような光景が、母の脳に刺激を与えたのではないでしょうか。顔色か



京都·南禅寺山門にて

ら目の輝きまでが以前の母を見ているようで、驚きと共に私自身も幸せを強く感じることができたのでした。それが桜巡りを10年も続けるきっかけにもなり、桜への思い入れが一段と強くなっていくのを実感したのでした。

咲き誇る桜花に思わず手を合わせてしまう自分に、初めの頃は戸惑いもありました。でも、多くの方も、桜には特別な思いを抱いておられるのではないでしょうか。それはおそらく目の前に見えている、枯れて華やいだ色などない世界から、鮮やかな薄紅色の花が生まれるという現象が、寒さなどあまり感じなかった年頃に抱いていた夢や希望に結びつき、精神的に華やいで高揚した気分にさせてくれるからではないかと思います。それが、日本独特の風土が生み出す宗教観へとつながるのではないでしょうか。

葬儀を無事に済ませた後のことは、今思い出そうとしても数日間が空白で、ただ呆然として食事もきちんと摂ったのかさえおぼろげな生活が続いたのでした。やがて四十九日が近づき、改めて死後の世界を考えながら納骨先を決める時がやってまいりました。

私の宗教観は「死」を終点としない「輪廻転生」にあります。

今ある形はすべて「仮の姿」であり、すべての生物とは共に生き、謙虚・努力・感謝することにより輪廻を楽しみ、転生が軽やかにできるような生き方を生活理念とします。

自己満足と自己主張の象徴でもある先祖代々の墓石の下に、壺に入ったままでの安置は考えられません。「目立たぬ所で土に還る」ことが次の「生」へ輪廻するには最良の段取りと考えます。

そこに大好きだった「桜」があれば、もう言うべき言葉は見つかりません。

そうだ、もう迷わず桜のもとに還れる場所を探そう。

電話の向こうから聞こえてくる丁寧な応対、そして私の心情を察しているかのような言葉遣いに、心はもう決まったも同然でした。

『小さなお葬式』（小学館刊、北村香織編）の中で「桜葬」という文字を見つけた時は、まさに満開の桜に出会ったような感覚を覚えました。さっそく電話をかけたのは言うまでもありません。

NPO法人エンディングセンター桜葬の説明会では、久しぶりに胸が高まる思いでした。自分のもつ宗教観と近い方々との出会いが、こんなにも早く訪れるとは、夢にも思わなかったからでしょう。それだけではなく、自分自身がこの数年間味わうことができなかった、「安堵感」というものに包まれたかったのだと思います。

まるで高原を思わせるような眺めのよい環境や、井上治代理事長のご自分の体験から生まれたエンディングセンターの主旨が、私の心を癒してくれるのを感じていました。

桜はまだ蕾でしたが、穏やかな晴天のもと、白砂を入れた土中に母のお骨は納められました。思わず「よかったね！　オフクロ」、泣き笑いで呟いてしまいました。想像以上の安堵感に包まれました。

最後に丸く切り取った芝草を、自分で被せた時は満足感に満ち溢れて、この素晴らしい企画を編み出したスタッフに感謝でした。

この気持ちをもっと多くの方に味わってもらいたい！　そんな想いがお参りに来てくれた親族や友人に伝わり、お付き合いの幅がより一層深く、広くなっていくことに驚きを覚えたのもたびたびでした。そのことからさらに、墓地を見学している方とも深みのある会話を楽しませていただくのが楽しみでもあり、エンディングセンターへの感謝にもつながると思っております。

「桜葬」との出会いが、今後の人生に向かう「指針」と、常に心穏やかでいられるための「癒し」を与えてくれたのでした。

「桜葬」ありがとう……合掌

桜葬メモリアルに参加した折に詠ったものです。

初雪月花今花ころの忌に参じ
桜葬に集ひていづれ墓近所
さくらさくら偲ぶに軽く目を閉ぢぬ
想定の死後を語らふ花の下
石の聖書開かれしままさくら散る
山門へ花を盛りの坂だら
人想ふさくらしだれの宇の昏み

樹林墓地・木の精

自然の中で父母と一緒に眠りたい

深田桃代［ふかだ ももよ］
50代

エンディングセンターと桜葬のことを知ったのは、4年前にベストセラーになった上野千鶴子さん著『おひとりさまの老後』の中で紹介されていたからです。31年前に思いがけず早くに父を亡くして以来、母と二人三脚で暮らしてきましたが、その母も逝き、いよいよほんとうのおひとりさまになって3年目の頃でした。

二男だった父が急逝した時、母は一人っ子の私の将来の負担を考えてお墓を造らず、ご縁のできたお寺の敷地内にある、一家4体まで入れる小さな納骨堂を購入しました。母を看取った後はなかなか遺骨を手放す気になれず、三回忌を迎えてようやく父の傍に納骨しました。次は自分の番と思った時、急に広々した自然の中で父母と一緒に眠りたいという気持ちが湧き上がってきました。お墓の形態というより、遺骨が骨壺に入ったままこの世に残り続けることに、人間有機体の終わり方として、何か違和感を覚えるようになったのです。そんな時タイミングよく、「継承者を必要とせず」、「桜の木の下で土に還る」という、私が理想とするイメージを具体化したエン



子どもの頃、母と（1954年）

ディングセンターの桜葬に出会いました。場所が遠距離であり、仕事も非常に忙しかったため、まずは準会員になって情報を得ることから始めました。

入会した当初は、そのうち愛知県にもこんな墓地ができればいいなと呑気なことを考えていましたが、送られてくるニューズレターや井上治代さんの著書を読むなかで、自然志向の散骨や樹木葬といっても、日本社会の墓地や埋葬に関する法的な問題や根強い慣習など、具体的に実現するのは並大抵のことではないこともだんだんわかってきました。そんな折り、入会少し前に手術した悪性腫瘍の再発がわかり、いよいよ自分自身の人生の店じまい準備を急ぐ必要に迫られました。

２度目の手術日を10日後に控えた２０１０年1月、新しく売りに出される「樹林墓地」の説明会に出かけました。名古屋から新幹線に乗り新横浜で下車、在来線に乗り換え町田へ、鶴川駅より直通バスもあって、予想よりはるかに順調に、短時間で現地に到着できました。

晴れた日には横浜方面も一望できる見晴らしのいい多摩丘陵に広がる明るい公園墓地。鎌倉古道を背にした木立の中の傾斜地。銘板の下には苑内の地下水が流れ、墓地の前にはしだれ桜の若木。一目で気に入りました。花や自然が好きだった父母もきっと喜んでくれる。この世での生を終え、再び父母と同居するには最高の所です。その場で購入を決め、事務局の方に事情を話して、

大急ぎで入院前に契約を終えました。
その年の4月、術後の回復が思ったより早く、初めて合同慰霊祭「桜葬メモリアル」に参加することができました。穏やかな春の日差しと満開の桜の下で、サックスとピアノの献奏が流れるなか、初対面の参列者の方々と共に祈り死者を偲んだ時間は、とても静かで温かな空気に満たされていました。「ここなら全然寂しくないね。早く引っ越したいね」。そっと父母に語りかけました。
その年の夏、銘板への彫刻を済ませ、私自身の遺骨の移送と埋葬の生前契約をエンディングセンターに依頼しました。緑が一段と濃くなった真夏の「樹林墓地」には明るい陽光が降り注ぎ、爽やかな風が吹きわたっていました。そして2011年3月、母の七回忌と少し早い父の三十三回忌を同時に行って、ようやく父母の遺骨を念願の「樹林墓地」に埋葬することができました。震災の影響で予定が遅れ、遺骨を運んだのは、合同慰霊祭の直前でした。埋葬のお世話をしてくださったいずみ浄苑の職員の方々の心のこもった丁寧な仕事に、墓地の管理もこうした信頼できる方たちのお世話になるのだと思うと、ほんとうに安心しました。
2度目の慰霊祭には、震災の影響のため公式行事としては行われませんでしたが、参加者の数は前年とあまり変わらない印象で、すぐに隣の「水の精」を契約された2組の素敵なご夫婦と親し

くなり、話がはずみました。エンディングセンターの会員の方々とは、人生の終わり方を真剣に考えて生きるという志を共有しているからでしょうか、まさにセンターの理念である「地縁・血縁から結縁へ」を実感できすぐにつながることができています。

核家族社会が必要とする新しいお墓の実現だけでなく、喪主をたてられない人へトも請け負うエンディングセンターの活動は、介護の社会化に続いて葬送の社会化的な市民運動だと思います。そうした困難だけれども建設と新たな絆は、人生の最終章を生き生きと最後まで感動の地球上の最後の住所が、「町田いずみ浄苑内樹林墓地・桜葬」になった幸運に心います。

樹林墓地・水の精

あこがれの桜葬

宮川美智
［みやがわ みち］
60代



私が25歳の時父が亡くなり、長姉の世話で横浜にお墓をつくり、今は母と2人で年間使用料・管理料を納め、法事の時はこちらの納める金額でお経を上げてもらっています。婚

家の墓は上野の谷中の寺の中にあり、先祖代々が入っています。中元・歳暮の付け届け法事や行事ごとにお寺からの請求金額を納めています。葬儀の時は長男である夫の会社の人たちが関わり、お世話になりました。

姑の葬儀の時、日頃思っていたことを夫に頼みました。「私が先に死んだ時は、葬式はいらない。谷中の墓でなく横浜の墓に入れてもらいたい」ということです。

姑の葬儀の慌しいなかで夫の了解をとりました。どうしても自分の先祖ではない所に入りたくないと切実に思いました。

２００８年に59歳の夫が末期膵臓がんで余命半年という宣告を受けてしまいました。人は自立して、これから二人でゆったり人生を楽しむつもりでしたが……。

闘病生活は１年以上続き、その間に戒名をつけ、葬儀等の話もすることができました。私に「やっぱり一緒の墓に入ろうよ」と言ったことがありました。

若い時は墓などいらないと思うことがありました。死んだら無になるのだとも……。まったくない私ですが、魂は存在するのか、心残りがあったらどうなるのかということを考える信仰心のことがあります。

た人の人生の一コマ、いえ大きな存在として続いています。お墓というのはその証のようなものではないでしょうか。

以前から桜葬という記事等を目にして、私もこうしてほしいという想いはもっていましたが、具体的にどうすればよいのかわかりませんでした。本当にたまたまラジオで井上治代さんの桜葬の話を聞けたのは、縁があったとしか思えないラッキーなことでした。

「これだ！」と思いました。子どもたちには私の墓守の負担はかけたくないのです。

変な団体に騙されるのでは、と心配する娘を連れて桜葬の説明会に参加し、念願だった最後の行き着く場所を決めることができました。これで自由になれた気がしてほんとうに嬉しいです。

娘も納得して安心したようです。墓には姓は入れずに下の名前だけを彫ってもらうつもりでいます。

子どもたちに「よかったネ」と送ってもらうその日まで、人生を重ねていこうと日々思っています。

樹林墓地・水の精

桜葬に出会い改葬へ

吉田睦枝
［よしだ あつえ］
60代

２００９年5月に主人の先妻の33回忌の法要を済ませた私たち夫婦は、「これで弔いどめ」と考えたのですが、お寺さんにお聞きすると、「いえいえ、百回忌もありますよ」とおっしゃいました。

主人の転勤に伴い、あちこちに移動しながら、３年前にここ川崎市に移り住んだ私たち。転勤になるまでは、山口県で、春秋のお彼岸、盆・暮には草取り、お掃除などお墓のお世話をしてきました。しかし、転勤後は初めのうちこそ１年に１度の帰省でしたが、のまにか何年かに１度となっていきました。お墓も気になりながらも、本家である主人の兄夫婦にすっかりおんぶに抱っこで、20年以上も過ごしてきました。

主人の定年後、これまでと違って時間に余裕ができたため、年に１度の帰省でお墓参りをするようになりました。しかし、お墓参りは年に１度で済まされるほど楽ではなく、主人の実家に多大な面倒をかけていたことを気づかされました。また、百回忌もあるとなると、私たちの子どもたちにその務めが回ってきます。



私たちには、男女2人の子どもがいますが、長男は結婚の際、養子に行き、長女は結婚して姓が変わったので、いわゆるお墓の跡継ぎはいないことになります。

また、主人のどちらかが亡くなった時、どういうことになるのだろう。こちらで葬儀を済ませ、お骨を抱えてあちらまで行き、その後の法要とかは……などと想像までしてしまい、いろいろな心配が出てきました。これまでもお墓を移すという考えが脳裏に浮かんだことがあっても、手続きが大変、費用がすごくかかる等で二の足を踏んでいました。

しかし2010年に入ってから、お墓の移転、この周辺のお墓事情などをネットで調べたり、資料請求をし始めました。

お墓は、マンションの機械式駐車場と同じように、その維持管理が問題になる、永代供養墓、個別のお墓、さまざまなお墓があることに驚きました。また知り合いから「最近お墓を建てたのよ。2人のうち残った者が亡くなったら、7年経過した後、お寺にお墓をお返しする約束になっているの」という話も聞き、「あら寂しい」と思いました。

お墓の跡継ぎがいないとなると、立派な墓を建てたとて、お世話してくれる人がいないのでそうなるのね、と思った「桜葬」が私たちが利用している小田

また、以前、納得はしましたけれど。

テレビで見て、美しくていいな、と

急線沿いにあることに気づきました。近くて便利かに予約しました。

見学会での井上治代先生のお話、跡継ぎのいらないお墓を求め、探し、ようやくどり着いた、というお話に深く共鳴しました。しか蔵する際には、地面の穴に入れるだけで、ここのお抗があり、この日は会員となる手続きだけして帰りました。

このあと急に主人の体調が悪くなり、10月7日の検ました。たまたま手術のキャンセルがあったため、手術をしてみないと、ただの腫瘍かがんかはわからない、ということでした。

このことが、桜葬を決める大きな要因だったと思いたりするかもしれない、と心配で、早くしなくてはと焦りました。

10月8日、いずみ浄苑に行き、お墓をどこに決めるか再度確認し、場所の予約をしました。

日の手術の結果、膀胱がんでしたが「悪性度は中くらいで、余命は長そうですよ」ということでした。

一安心でした。あとは3カ月ごとの検査となりました。

改葬までの手続きは大変でしたが、12月8日に無事終えることができ、お寺さんにお勤めをし

ていただいて安堵しました。また、お墓参りのためのご帰省をしなくては、という負担がなくなったので、気が楽になりました。

今後は、お墓の心配はなくなったので、葬儀はどんなものであればいいのだろうか、なども考えていきます。また、エンディングセンターでの勉強会に参加したりして、考えをまとめていきたいと思っております。

樹林墓地・水の精
庭の桜と桜葬

小林昭昌
［こばやし あきまさ］
60代



もともと私は無宗教であり、５人きょうだいの末っ子です。実家は小田原にある寺の檀家になっていますが、両親は市営霊園に埋葬されていました。

まだ60代ですので、私自身の将来の埋葬方法は、あまり真剣に考えていませんでした。

若い頃より身体の弱かった妻が、４年前より１千万人に１人がかかるという「眼窩内腺様のう胞がん」から転移し「多発性骨髄腫」となり、療養生活で入退院を繰り返し、２０１０年４月に57歳で永眠しました。

妻は他宗教を一切排除するキリスト教系の頑固な教えを受けており、生前より葬儀・埋葬に関し「質素に行ってほしい」旨の希望を話しておりました。

葬儀・火葬をあわただしく済ませ、妻のきょうだいはもとより、親類の「墓はどうするんだ」の声もあり、急遽宗教色のない埋葬方法をどうするか、遺骨を手元に置き数カ月考えておりました。いずれにしても新しい埋葬方法を求めなければならなかったのですが、手元供養・散骨・樹木葬等いろいろ調べていたところ、雑誌『ダイヤモンド』の「葬儀と墓特集」が目に止まり、「死後の自律システム・無縁社会における家族の代替等」を取り上げたエンディングセンターに興味をもち、「樹林墓地・桜葬」の資料を取り寄せました。

埋葬に関する経済性は従前より不満をもっておりましたし、自然との共生を追求する、葬送の普及活動、「脱継承」・「自然志向」・「個人化」の考え方に賛同しました。また桜葬墓地のある町田いずみ浄苑を見学したところ、素晴らしい公園墓地と言っても過言でない、管理の素晴らしさで「桜葬」に決め、親類の承諾を得て会員となりました。

さっそく、２０１０年7月に「水の精」の家族用を申し込み、10月に妻を埋葬いたしました。

4月13日が命日ですが、一周忌では桜葬の名称どおりの桜がいっぱいの墓参りとなっています。

また、亡き妻が生前、自宅の庭の一角に桜の苗木を植え、年々少しずつ大きくなって花を咲かせ

ているのは〝何かの縁かな〟と感じております。
月命日には必ず桜葬に足を運んでいますが、日本墓苑開発センターさんの生き届いたタッフの方々の一生懸命な姿、植栽、雑草の手入れの熱心さには頭が下がる思いですしい樹木の配置を考え、次々に増えていくのは毎月の墓参の楽しみになっています。親類の皆が、美しい町田いずみ浄苑内にある桜葬に興人たちにも桜葬の存在が広く伝わってほしいものです。
私自身と娘の墓として、すでに名前が刻んであり、後を迎えることができます。
先日のフォーラムで井上治代代表からスウェーデン似た形式が出てきたという話があり、非常に興味をもち、ていただきたい心境です。
エンディングセンターのスタッフの方々のやさしい等に感心しております。
私は在職中であり、時間もあまりありませんが、いア等に少しずつでも参加したいと思っております。

樹林墓地・風の旅人

素敵なポエム——樹木葬との出会い

武内勇子
［たけうちゆうこ］
80代

しみじみと〝亡き人のことを偲ぶ〟いろいろな行事はありますが、お彼岸にしろお盆にしろ、あらゆることに世間の〝しきたり〟が私たちを不自由にしております。

塩山一法（かずのり）の父親が77歳で死去した後、落ち着いてはきましたが、淋しい空気が絶えず襲ってくるのにはどうすることもできません。

塩山の2歳下の弟も一緒でしたので、ある程度は心強かったのですが、悲しみがまだ癒えやらぬ2002年の9月、突然、その弟が住んでおりました横浜の警察から電話があり、弟が不慮の事故死を遂げた旨の知らせに、塩山も私も気が動転してしまいました。弟は我が家にも会社にも大きな存在でした。

内輪のみで葬式を済ませ、納骨ということで祖先が眠る熊本の墓所に直行しましたが、こんな時、東京近郊にでも墓所をもっていたらどんの大きな骨壺を抱いて飛行機に乗りました。



塩山一法さんと

なにか便利だったでしょう。搭乗員さんが気を利かせて、中央の列から窓際の席へ移してくれました。塩山は終始、弟が愛した東京の街をずっと見続けていました。すでに骨と化した弟の心は如何ばかりであったでしょうか。

納骨の後、２０１０年7月1日に本屋さんの店頭であの愛らしい表紙の本を見つけました。その本こそ井上治代理事長の『より良く死ぬ日のために』でした。なぜもっと早く刊行なさらなかったのかと口惜しく思いながら読みふけりました。

旅立ちの日をどうしたたばたせずに納得のゆくままに皆に別れを告げられたら……そして死んだ後、いったい私たちはどうなるのでしょうか？　祖先たちの霊に囲まれて、それは各個の骨壺であって、薄暗い穴倉の中でずっと日を重ねていくのでしょうか。

その時、天の声のごとく「樹木葬（桜葬）」の存在を知りました。そして、私にその著書を渡してくれました。

海洋での散骨は以前から耳にし、少しばかりの羨望さえ感じたものです。

二男の死は〝より良き死〟とはほど遠いものであったでしょう。そのように感じる親の身の私は、震えるほどの罪悪感を覚えたものでした。

樹木葬（桜葬）とはなんと素敵なポエムでしょうか！　四季折々花を咲かせ、時に花も舞を見

せるその下で眠るのです。

２０１０年1月14日、私と塩山は何のためらいもなくエンディングセンターに入会いたしました。

やはり、人が死ぬとはこれほど悲しいもの。でも、マンチックな気分になりますし、お弁当でも持って、ら、思い出話もできます。きっとこれまでの墓のありましょう。

9月19日、場所の確認とロケーションの類を頭に入れたくて、塩山と二人で現地へ出かけました。だらだら坂を登りながら、墓石群の広さにびっくり。角型の墓石やら丸型の墓石やら、それらは亡くした人への思いやりでもあり、同時に個性的ですが、如何にも他の墓石と何となく比較をしているようでもありました。その墓石群を抜けて行くと、小高い、山とは言えないほどの坂が現れました。その墓石群を「樹林墓地」と呼ばれる、ここから納骨をする場所です。

桜の古木や苗木が周囲には幾本も植えられ、その落ち葉が墓所を敷きつめていました。銘板の前を小さな川が流れていて、それが一人ひとりの埋蔵者に手向けられる供花の水差しとなるので しょう。すでに納骨をされた墓所近くには小さな花が手向けられ、お墓ともども9月の陽を温か

く迎えていました。水流に手をかざしてみて、これもまた温かく、下方の墓所へ向かって流れていました。

その落ち葉たちの腐葉土がまた落ち葉を誘い、墓所はよみがえってゆくような感じのだと今さらながら感銘を覚えたものでした。

これが「樹木葬」なに眠るんですよ」

「一法さんも私もここ

声をかけました。塩山も感慨深げに桜の木々を眺め、ふーっと一息つきました。

二人とも納得のいく思いでした。

「誰にも気がねなく、おだやかに眠ることのできる場所」（井上理事長のお言葉）を安心感をいただき、ほんとうに幸せです。お導きくださった井上理事長をはじめご関感謝申しあげます。

樹林墓地・風の旅人

「風の旅人」の造成に携わって

横尾直子［よこお なおこ］
50代

友野隆（私たちは夫婦別姓でした）は60歳で定年退職し、3年間嘱託勤務後は再就職できずに家にいました。書斎で新聞を読むこと以外、何もすることがない日々。そんなときに現在の住居であるコーポラティブハウス（一緒に土地の購入から建築を行う方式の共同住宅）のご縁で知り合った彫刻家のKさんに誘っていただいて、Kさんの仕事の手伝いを始めました。

Kさんは町田いずみ浄苑内の樹木葬墓地の石積みにも関わっていて、友野は樹林墓地の現場で、石を積んだりする作業を手伝ううちに、その場所をとても気に入ったようでした。て見に行った時も「自然の感じがいいね」「還るべき場所に還れるかな」と言って、まだ工事途中の「風の旅人」のほうに歩の時「もう一度現場を見てくるから先に帰ってて」と、いて行った後姿を覚えています。

そのあと、彼はいろいろなことに目覚めていったのです。WOOFER（ウーファー、有機農法をしている農家にボランティアで行って、食住は提供してもらう）に行くようになったときは



中国·九寨溝にて

驚きました。有機農法など目もくれなかった人が、ほんとうに変わっていきました。に行って草むしりをしたり苗を植えたりと、農作業に関わるなかでサラリーマンの時く違った価値観を見出したのです。それまでは季節感もなく働いてきた。それが季節るようになり、お金をもらわなくてもできることがある、肩書きがなくても生きていることを彼は知ったのだと思います。

その彼が長野のウーファー先で事故死しました。突然でした。福井に住む息子は電東京から車で駆けつけ、友野と対面したのは警察署でした。２０１０年の7月26日、猛暑でした。長野で荼毘に付し、さてお骨をどうしようかということに……。彼の兄妹弟は早く友納骨しようとするも会も終わり、息子が福井に帰る日、たまたまKさんから電話がかかってきました。友野のお別れの葬がいい」と話していたことを私以外にKさんも聞いていたのです。それを息子はKさんから埋葬方法などの説明も受けた。友野が「樹木旅人」にも案内してくれました。息子に伝えて「風のようと決断しました。友野が導いてくれたと感じています。

友野の兄妹弟に樹木葬の話をしたところ大反対されました。「犬猫じゃあるまいしとしました。我が家には犬がいます。家族の大事な一員です。われた時にはムッ

その年の11月に埋葬しました。

彼は生前「俺に万が一のことがあっても、兄妹弟に知らせなくていい。喪中はがきくらいでいい」と言っていました。息子の結婚式の招待状を出さなくていいの？と尋ねた時のことでした。兄妹弟とは一切関わらなくていいと。友野の兄妹弟には埋葬日のお知らせと、地図やバスの時刻表も送りましたが、結局来てはもらえませんでした。疎遠なきょうだいって、こんなものなのかと思いました。

埋葬時、穴を掘った所に遺骨をザーっと入れるのを孫も見ました。憶えているかは別にして、いい経験をしたと思います。埋葬後、土を盛って、それがだんだん沈んでいくのですよと説明されました。

亡くなった後はしなければならないことに追われ、毎日息せき切って、何が何だかわからない日々を過ごしていた私ですが、埋葬し、土が盛られ、それがだんだん沈んでいく……。ああ、ゆっくりでいいのだ、私の気持ちもゆっくりでいいのだよと教えてもらっているようで、心が安らぎました。ほっとしました。

いずみ浄苑は家の近くです。月に1回はお参りに行っています。そしてうれしいのは、あそこはお花が絶えないのです。水の流れる音、鳥のさえずりが聞こえます。落ち着きます。「杜の家

族」のバードバスの石積みは、Kさんと友野が運んだそうです。
もう一つ、お参りに来た人と「うちはここですよ」って会話ができる。同じ思いをもつ家族のお骨をああいうるということが心強いです。
この埋葬の仕方はとてもいいと思います。もっともっと広まってほしいです。

樹林墓地・風の旅人

いつも光の中に風と共に

伊佐和代［いさ かずよ］ 60代

主人が亡くなって丸2年、三回忌に親族が集まり、家族でお寺の法要を済ませ、命日に一人で樹木葬墓地の「風の旅人」の主人に会いに行きました。
いつものように主人が眠っているあたりを見つめ、声をかけて手を合わせ木々の葉がすぐ音、小鳥のさえずりに耳をすませると、穏やかな時が流れます。月日がたち、雑事にふと思い出し、涙することに変わりはありません。
いても何かにつけて
がんがわかってからの3年間は、なるべく気持ちを明るくと思っていたので、いずれ最後のことを考えておかねばと思いつつ、本人も私も話題にしませんでした。元気な頃、お墓についての

主人の考えは、「とにかく、将来娘たちに面倒をかけないように、死んだら田舎のお寺の納骨堂に……」と決めていました。そこのご住職は柔道部の先輩でしたので、帰省してお参りの際は、いずれはと笑って話していました。納骨堂には、30年あまり一緒に暮らした私の母もいるので、同じところだったら娘たちに負担をかけずにすむからと決めていたのです。葬儀後、そのことを義兄・姉たちに話しましたが、その後、承諾してもらえないことがわかり、振り出しに戻って考えることになりました。

主人の実家のお墓を守っている次兄夫婦は、「皆一緒に入ればよいし、ゆっくり考えたら」と言ってくれましたが、主人はその場合のことも「先々甥に迷惑をかけるから」と言っていました。

それからはいろいろと友人にも聞いてみました。

「一度、ご主人の実家のお墓に入れて、貴方が亡くなった時、娘さんがお参りしやすいところに移せば」とか、「40年一緒にいた家族が決めたことが一番」とか、墓石にお母様が一人娘だったために表と裏に違う苗字が刻まれているとか、いろいろでした。皆、無縁仏になったり、お墓を粗末にしたくないとの思いだと感じました。

以前に訪れたニュージーランドのバラ園に、「ここに灰をまかないで」と看板がありました。墓をもたない人が、故人の好きだった花の根元に散骨することがあると聞き、驚きました。

それからは霊園を8カ所ほど見に行きました。今ならお買い得とか、郊外で見晴らしのいい所、便利な都心、昔ハワイで見た広い芝生の墓地に似た所。それらは年間の管理費も高くと、将来のことを考えました。

いずれも決めかねているときに友人から都内の霊園で町田市の分を募集しているとの話があり、締め切り間際で応募したところ、運よく当選しました。亡くなって1年後のことです。見に行ったところ、手入れも行き届き、先々には合祀もできるということで安心でした。ただ一つ、区画面積が広いので、その分、石代がかかります。心配してくれた友人が墓石屋さんを紹介してくれるというので、一緒に行く日を決めていました。

ところがその直前に義姉から電話があり、「NHKで樹木葬のことをやっていて共感した。そのうえ、町田にあるらしい……」と、概要を調べてFAXしてくれました。見ると、樹木葬の始まりは、私が10年近く前に新聞で読んだ岩手のお寺でした。その時は、「あぁ、こんなよい考えのお墓があればいいな。でも東北は遠い」と思ったことがよみ返りました。それからすぐにエンディングセンターに電話をして義姉と一緒にお話を聞く予約をしました。係の方に私の迷っていることや、現地を案内していただきました。穏やかで詳しい説明に二人で安心しました。

等を聞いてもらい、現地を案内していただきました。穏やかで詳しい説明に二人で安心しました。

木々の間にいろいろな区画があり、お花を供える所には少しずつ水が流れていて、お骨は土に還

る方式です。
子どもが娘3人で、かねてからお墓のことを考えていた義姉も気に入り、自分たちのも決めるというので、「一応家族にも見てもらいましょう」ということになり、再度訪れました。娘たちも、「お父さんは、植木が好きで庭の手入れもよくやっていたから、きっと気に入るんじゃない？　鹿児島は遠いけれど、ここなら私たちも来られるし、何よりお母さんの気持ちが一番」と賛成してくれました。長兄夫婦も「一緒の所が何より」と決めました。兄想い、姉想いの夫はきっと喜んでいることでしょう。相談にのってくれた友人2人も見に行き、やはり樹林墓地を求めました。

「きっとご主人が笑っていらっしゃるわね。あ・ち・らでもよろしくね」とメールが届きました。また、車椅子生活になった友人をご主人が「あそこはスロープですから」と押して、命日等、たびたびお花を供えに行ってくださるのです。なんとありがたいことでしょう。迷って、命日に上京した従姉が霊園を一緒に廻り、生前お世話になったからと力になってくれ、先祖のお墓も心配しないように考えてくれました。いろいろな人々のおかげでここまで辿り着きました。

各々に亡くなった人を思う気持ちが何よりの供養だと言います。

主人と私の名前が刻まれたプレートを、濡らしたタオルで拭うと、昔お墓の掃除の最後に上か

らお水をかけた時の清々しさを思い出します。
庭に主人が植えていたユリの蕾が膨らんできました。
先日お会いした方は、ご主人がお好きだったおはぎを供えて、ベンチでお茶をしていらっしゃいました。やはり上下式（2段2人）の所で「主人が私のことを受け止めてくれると思いまして」と微笑まれました。そうですね、私も太らないようにしましょう。

樹林墓地・風の旅人

人もまた自然にかえる

江刺公子
［えさしきみこ］
60代

広島から遠く離れた東京・町田市が、私たち夫婦の墓所になろうとは、つい先ごろまで思いもしないことでした。夫が亡くなってから、迷い迷い考えぬいた末に決めた東京・町田市の「桜葬」。今、埋葬し終えてホッとしているのと同時に、ここに決めてほんとうによかったと思っています。


松山城にて　最後の夏

夫は36年間勤めた大学を定年退職した4月、突然、末期の肺がんと告げられ、言葉もありませ

んでした。抗がん剤治療を受けながら入退院を繰り返した10カ月。夫は「死は生まれてきたことを選択しながら日々精いっぱい生きることが大事なのだ」と言って、最後まで食事も排泄も自分でできることは自分でしながら闘病生活を送っていました。痛いとも辛いとも言わず、みんなに感謝して眠るように逝ってしまいました。

66歳になったばかりの２０１０年2月14日のことでした。

葬儀は「お別れ会」という形で、みなさんに心をこめて見送っていただきました。しみの癒えないまま、諸々の名義変更の手続きなどと合わせて、仏壇はどうするのか、お墓はどうするのか決めなければなりません。四十九日を終えても、夫の遺骨はどこにも持って行きたくない、私の手元にずっと置いておきたい、という思いはどうしようもありません。幸兄たちも私を気遣って「気が済むようにしたらよい」と言ってくれました。

私たち夫婦は、大学時代に知り合って結婚しました。学生時代を含めて10年近く東京で暮らしました。兄弟姉妹は、ほとんど鳥取県内に住んでいます。長女が1歳の時、夫が広島大学に勤務することになり、広島県福山市に移り住みました。それから40年近く、ここ福山で過ごしてきました。福山では、２人の子育てをしながら友人がたくさ

んできました。２人の娘は、現在、東京と川崎に住み、それぞれ家庭をもって子育てと仕事に励んでいます。

夫が元気な時には、「わしは葬式も墓もいらんぞ。焼いた灰は庭の木の根元にでも撒いておけばよい。のど仏はお前の首にかけといてくれ」と笑いながら言っていましたが、そうもいきません。福山の墓所も何カ所も見に行きました。郷里である鳥取のお墓を考えたり、東京の子どもたちの近くのお墓にも行ってみました。

そうしながらも、墓を新しく設けることや「墓を守る」ということになんとなく疑問をもちました。ちょうどタイムリーに、友人が新聞の切り抜きを見せてくれました。「変わるお墓事情。あなたはどうしますか」と大きな見出しに次いで、「お墓のあり方が90年代から大きく変わっています。背景には、家族のありよう、人びと、特に女性の意識に変化が……。あなたはお墓についてどう考えますか」と書かれていました。東京・町田市の霊園の一角にあるＮＰＯ法人エンディングセンター企画の樹木葬「桜葬」を中心に、２ページにわたって特集されていました。「生き方が多様化し、核家族が主流になるなか、埋葬方法も墓石も新しい形が広がりつつある。どう生きてきたか。しめくくりをどうするか。その人らしい葬送のあり方を選択すればよい。どんな葬送を望むかは人それぞれです」と。

さっそく、東京・町田市の「桜葬」を見に行くことにしました。山桜の満開が過ぎて、花吹雪になって散り始めた頃でした。エンディングセンターの担当の方が、丁寧に説明しながら案内してくださいました。環境のとてもよい所でしたが、こんな遠い縁もゆかりもない所でいいのかしらとふと思ったりしました。その時は準会員になり、エンディングセンターの考え方や活動を綴ったニュースを送ってもらうことにしました。送られてくるニュースは隅から隅まで読んで気持ちの整理をしました。

「人もまた自然にかえる」という葬送の考え方に共感し、樹木葬にしたいという気持ちが次第に強くなりました。樹木葬をしている所は全国で10カ所くらいあり、だんだん広がっていることも知りました。エンディングセンターには、上京して娘の所に行くたびに、夏にも冬にも行って見ました。他県にも行ってみましたが、埋葬するなら、町田の「桜葬」しかないと思うようになりました。

主な理由は次のような点です。

①緑に囲まれ、春夏秋冬の自然が感じられる。高台で見晴らしがよい。　②明るい、きれい、管理が行き届いている。　③一人1本の木でもなく、1本の木に合葬するのでもなく、一人ずつ区画はされてはいるが、みんなで樹木を育て自然を守っている。（「風の旅人」というコーナーを

選択しました。④お参りに行くたびに誰かがお花を供えていて、花の絶えることがない。
たちの所から比較的近く、上京する楽しみが増える。
こうして、2011年かかって、ようやく埋葬する気持ちになりました。
2011年2月10日～14日、一周忌に、夫の絵や水石を中心に、盆栽、篆刻の遺作展をして多くの人に見ていただきました。そのことが、気持ちの区切りとなり、遺作展を終えた翌週の2月26日、子どもや孫たち、親戚の方と町田に集い、みんなが見守るなか、丁寧に埋葬していただきました。のどぼとけは分骨手続きをして、自宅で手元供養をしております。
埋葬後、毎月上京し、「お父さんの所へ行ってくる」と町田にせっせと足を運んでお参りしています。
桜葬の「風の旅人」で一休みして近況報告をしたり、スケッチをして帰ります。子どもたちも「よかったね」と喜んでくれています。お参りするたびに気持ちが落ち着いて、⑤娘
一日一日大事に生きようと思えるようになりました。

樹林墓地・杜の家族

さくら さくら

品田ケイ［しなだ けい］
60代

太平洋に、そそぐ、坂東太郎の河口にある港町で、生まれた、わたし。

家の小さな庭に小ぶりの桜の木があり、幼心に、温暖な土地柄でも、春に咲く桜花がまちどおしく、また、赤く熟した小さな、さくらんぼを大切に大切に採って食べ、そして、香り高く甘い実を堪能する。

幼稚園の入口に大きな、桜の木が1本あり。小中学校の広い校庭には、数十本の大木の桜が、春爛漫と咲きみだれ……。

東京に出て、通った専門学校の庭にも桜が数本。

そして、武蔵野に住んで、約35年、井の頭恩賜公園を控えて、毎年の春には、桜の下を愛犬を連れて、散歩し、ある日から、夫と私と愛犬で散歩する。



旅の途上にて。
愛犬りんごと

この60と数年の年月、日々の暮らしの、穏やかな時も、嵐の時も、春が近づくと毎年、堅い小さな蕾が、少しずつふくらんで濃い目の桜色が見えてくると、嬉しく、春の息吹を感じ、喜びを謡う。

華やかな満開の桜に歓喜し、やがて、はらはらと散りゆく、花に、美しさと、ものの悲しさにうたれ、我を忘れて酔いしれる……。

私の生きてきた道は、少なからずも、桜と共に日々を過ごした、一生のような気がします。

そして、この30年一緒に暮らした夫が亡くなり、夫も桜が、とても好きな人でしたから、夫も私も愛犬も、命はてた後には、桜の下で眠る。

やがて、土になり、養分となり。

まさしく、再び桜と共に生きてゆくとの思いが、何とも、嬉しく、また穏やかな終焉。

桜の花の化身となって……。

はらはらと、花びらを散らして。

ロマンの世界に入ってゆくのです。

樹林墓地・杜の家族

桜の下で眠りたい

山嵜清子
［やまざき きよこ］
50代

私はバツイチで58歳、今年16歳になるシーズーのアイと二人暮らしです。

「桜葬」を知ったのは、数年前に新聞の合同慰霊祭を紹介した記事でした。桜の遺骨が土に還るというのは、自然と共存する新しい考え方の墓地という印象を受けの時はもちろんお墓の購入など考えてもいませんでした。

ある時から両親の介護をする生活が始まりました。両親の老いをきっかけに、自墓について初めて考えるようになりました。

私は離婚した時に、新しくつくる戸籍は結婚時の名前を選択しました。旧姓に戻名前変更、その他契約などの変更手続きが面倒だからという単純な理由からでした字が違ってしまったので、いつかは自分のお墓を用意しようと漠然と思っていましそして両親との別れが近いことを感じ始めた時、何故か急に「自分の人生のゴー


愛犬アイ

備しておきたいという思いが強くなりました。

その時、「桜葬」の新聞記事を思い出しました。インターネットで「桜葬」を検索し、「エンディングセンター」のホームページにたどりつきました。いろいろと読み進めていくうちに、「桜葬の見学とミニ講座」の開催を知りました。そこで軽い気持ちで参加してみました。まずビックリしたのは、幅広い年齢層の方々が興味をもって集まっていることでした。お墓の講座なのに皆さんとても和やかな雰囲気です。その後、墓地内を散策するように案内していただきました。墓地は明るく開放的で、遠くには横浜ランドマークタワーまで見え、自然の豊かな場所にありました。

お墓というと高額なものと思っていましたが、説明を受けると私でも手が届きそうな金額でした。

また、「死後サポート」の生前契約に心を惹かれました。私は単身で子どももいないため、人生最後の後始末をどうしようかと思っていました。なるべく周りの人に迷惑をかけたくない気持ちがあります。この生前契約をすると、死後に発生する、たとえば、公共料金の支払い停止手続き、お部屋の片づけ処分、死亡届、納骨などいろいろと事前に相談をして私の希望をお願いできるようです。まだ身内も元気ですのでこの契約はしていませんが、自分が最後に望む姿を今から

イメージすることができました。

ペットと入れる墓地「杜の家族」があることもこの日に知りました。

墓など考えたこともなかったので、将来アイと一緒に自然に抱かれて眠りにつくことができるというのはとても嬉しいことでした。

見学した当日にもう私は「杜の家族」の区画を決めました。お墓の契約をして人生のゴール地点が決まったら、みんなに「まだお墓なんて早いでしょう！」などと言われましたが、とても気持ちが落ち着きました。家に帰ってアイに、「お母さんとずっちゃにいられることで、これからの人生を安心して前向きに生きていけるような気がしましたよ！」と報告しました。まわりの友人に、「アイと入れるお墓買ったよ！」と言うと「素敵でしょう！」などと言われましたが、「桜葬」は、同じ自然の中に眠るとはいうと何となく淋しい場所という感じがしますが、との連帯感がある方々ような気がします。まだ誰も入っていないお墓なのに、桜の季節に行われる合同慰霊祭に参加したくなる気持ちは不思議な感覚です。自然に抱かれるように土に還るならではの絆なのかもしれません。

昨年と今年にかけて、両親を見送りました。父が亡くなる前に、アイと一緒に入れるお墓を購入したことを伝えると、父は「今は犬と一緒に入れる墓があるのか？」と驚きながらも、「それ

はよかった。アイちゃんもこれで安心だね」と喜んでくれました。

余談ですが、私の誕生日は4月3日です。「桜葬」の合同慰霊祭は、ここ数年偶然に私の誕生日に行われています。これも何かのご縁だと思います。この地に眠る日がきたら、桜の季節をアイと一緒に楽しみたいと思っています。

樹林墓地・杜の家族

愛犬と共に

岡本富美子［おかもと ふみこ］60代

原和子［はら かずこ］60代

私たちアラ還（「アラウンド還暦」の略）姉妹は、それぞれ犬を飼っています。愛犬が10才を迎えようという時、お墓のことを考え始めました。先祖代々のお墓は浄土真宗であるため、犬は一緒に入れません。私たちにとって、「愛犬と一緒に入ることのできるお墓」、というのは絶対条件でした。ネットなどでいろいろ調べているうちに「桜葬」の存在を知りました。

もともと、自分が亡くなった後の遺骨は海にまいてくれてもよいと思っていたくらいで、いわゆる墓石のあるオーソドックスな形のお墓へのこだわりはありませんでした。むしろ桜の下で

愛犬クマと姉·岡本富美子さん

愛犬マロンと妹·原和子さん

「最終的に大地に還る」というのがとても素敵なことに思えました。ただ、お墓という問題ではなく、残される人にとっても意味をもつものです。娘たちのるかという点が気がかりでしたが、桜葬について説明をしたところ「ママたちが一ようにすればいい」と、私たちの意思を尊重してくれました。

愛犬と一緒に入れるうえに、姉妹同士、垣根のない場所に入れるということで、むことをほぼ決めていた私たちですが、実際に場所を訪れてみて、さらに気に入ったのです。また何度か足を運ぶたび、スタッフの方々が親身に相談にのってくださに信頼がもてたことも決め手となりました。

こうして私たちは晴れて抽選にも通り、希望の区画を申し込むことができました。に納得のいく場所を決めることができた今、終の棲家を見つけたという安心感があります。それに、美しい桜の花に見守られ、大好きな愛犬と仲のよい姉妹で一緒の場所に眠ることができる。そう考えると、死後を想像することがちょっと楽しみにさえなるのです。「桜葬」にご縁があったことを幸せに感じています。

文音

市民運動から学ぶ死後の自立

角竹美好子
［すみたけ みよこ］
70代



桜の咲く頃とはいえ、この時期は花冷えもあり、満開の桜の下でと好条件が整うのですが、「桜葬メモリアル」という合同祭祀と交流会には、毎年多くの人がこう姿が印象的です。開催に向けて、ほんの少しの手伝いをし、スタッフの一員としもってきました。

苑内に点在する墓は、大きさやスタイルが少しずつ違っていても、時間とともにあって当然」「そこが一番納まりのよい場所」という姿を現して、「桜葬墓地」としがあります。私は、墓を求める前に片づけなければならないことがあるので、と言ら、桜葬に惹かれる思いを抑えて、毎年桜葬メモリアルの様子を横目に見ながら時した。

あの記事を週刊誌で目にしたのは、20数年前のことになるでしょうか。

京都・常寂光寺の「志縁廟」についてでした。ここに至るまでの「女の碑の会」知る機会もあり関心をもっていました。女一人生きてきて、最後はどこに行くのだの活動などはろう。ここに、

すっくと現れたのが「志縁廟」でした。もちろん、家にしばられることなどない墓、他人同士で一つの墓に納まるのも、こんな墓に入りたい。できれば墓石などなくてもよい。土に還ることができたらもう最高、というのが墓に対する想いでした。

こんなささやかな私の想いを打ち消すように、時代はバブル期に入っていきました。どうしたわけか煽りを受けて墓地まで高騰です。一挙に郊外の山や雑木林が切り崩されて、霊園の開発が進みました。

「自然を壊してこんなに墓を造り続けてどうするの」と私は憤っていました。早くにご主人を亡くした友人が、あちこちの造成された墓地を探し歩いていたのもこんな時代でした。

問題をはらみながらも、自分たちに相応しいお墓や葬送とは何かを模索し、大きく動き始めたのが90年代と言われています。

この時期、井上治代代表の著作や新聞の連載のコラム等々を目にする機会が増えてきました。新しい波が押し寄せてきたなかで、学問として追究され、その実践と分析から的確に方向をとらえた井上さんの提言が、時代の要請に適うものであったと思います。

何よりも市民運動の中で行動されていることに共感できましたし、そこで私もエンディングセンターの会員としていろいろと学ぶことができたのです。その中で、一関市祥雲寺での第1回樹

木葬メモリアルに参加した時は、目を開かされました。山そのものが墓地であり、墓石を建てずに樹木が墓標になるなんて、これぞ樹木葬、との思いでした。

その後も新潟県巻町妙光寺の、継承者を必要としない永代供養墓「安穏廟」のフェスティバル、大分市の妙瑞寺の永代供養墓の見学、個人的には「里山墓苑」を提唱している千葉・真光寺などの見学などを経て感慨を新たにいたしました。

多様な形態の墓であっても、それを求める理由はさまざまであっても、みんな死後の自立を考えて、誰に言われるのでもなく、自らの意思でお墓を選んでいるのだと思います。

さて私はこれまでに学習し、そして得たささやかな知識をもって私の「墓を求める作業」に取りかかりました。地方都市にある先祖代々の墓が、シングルでいることがハッキリし、継承困難となります。ここで跡継ぎのない墓の自立を考えて、菩提寺のご住職に話をしたのは8年ほど前のことになります。

この前に難関がありました。先祖供養を大切にしている親戚に「改葬」などと大それた話を切り出すことにためらいがあり、重たい気持ちで1、2年が過ぎたでしょうか。ご住職と話し合う直前に親戚とも対話をし、結果は「跡継ぎがいないのだから仕方ないこと。思うようにしたらい」と思わぬ言葉に肩の力が抜け、安堵と同時にしばし茫然としておりました。

文音

終の棲家は小彼岸桜の下に

佐々木淑子［ささき としこ］
80代

願はくは花の下にて春死なむ　その如月の望月の頃　西行



西行庵にて

ご住職には「無縁墓になることだけは避けたい。私の元気なうちに先祖の墓を改葬して、できれば永代供養墓に納めさせてほしい。ついては永代供養墓をつくってほしいのです」と、なんと厚かましい申し出をしたことか。長い年月のなか、ご住職との話も紆余曲折がありましたが、すでに墓地の改葬は済ませており、遺骨はお寺にお預けしているので、建立近い永代供養墓に納めることができそうです。大仕事を果たしてもすぐ桜葬墓地を求める行動には移ることもなく、まだこまごまと身辺整理もあるし……とまた美しい桜の季節をやり過ごしていました。

ところが２０１１年には後期高齢者となり、きびしい現実に直面することになりました。

「よくここまで生きたね。でも先は長くないよ」と納得して自分で背中を押したのです。５月に桜葬墓地を求めて皆様の仲間入りができました。

次の桜葬メモリアルがたのしみです。

20年ほど前になりますが、桜の季節、山の仲間と吉野の山を裏から登り、頂上に達したあと奥千本から中千本へとお花見をしながら山道を下ると、人々のあまり入らない山峡の谷間に、１００坪ほどの平地にある小さな庵に行き当たりました。そこは山桜の咲く静かなたたずまいの西行庵でした。

西行庵の脇に「願はくば」の歌碑があり、西行翁の晩年の修行の場とされた質素な生活と山桜を愛した西行の思いが偲ばれ、しばし息をのむほどでした。

太平洋戦争中の女学生の頃、父母の故郷――信州へ疎開し、自然の中で青春を過ごしました。病弱なため、目の前にそびえる浅間山・八ヶ岳に登ることができず、季節の山々を眺めつつ青春を過ごしました。

大人になり信州の自然が私の故郷になり、30年間、朝のウォーキングを1時間とテレビ体操を日課として続けているうちに、いつの間にか喘息持ちの体質が治りました。そして子育て後には、日本の百名山を目指して登山するなかで四季の美しい自然に魅了され、友達と高山植物や木々の美しさを眺めつつ、次はこの山、来月はあの山と日本の自然の虜になりました。

美しい花をめでつつ、その清らかで鮮やかな木々の美しさにどっぷりつかる日々でした。

５年ほど前に大病をしてからは、山をあきらめましたが、日本の四季の自然に触れたくて秘境のツァーに参加して、昔登った山を山麓から眺めて、楽しむ日々を送っております。花の季節、

特に山桜の小粒で清楚な姿に何時とはなしに桜の木のもとで眠れたらいいな……と自りたい夢がふつふつと湧いてきました。

そんな私の夢を娘に打ち明けたところ、パソコンで検索して町田にある樹木葬（桜葬）の会のことを教えられ、さっそく入会の手続きをして1年ほど経ちました。八十路の坂を越らしをしていますと、病気のこと、最後の始末、落ち着き先が悩みの種となります。早々に眠所を決めて、安心して老いを過ごしたいと思うようになりました。

そんな折り、「文音」の墓地の募集を知りました。この区切りの年にきっと私の落決まりそうと期待もふくらみ、待ち、3月下旬、希望の時がやってきました。

まず見学の時に、「文音」の墓地の中ほどに山桜の一種の小彼岸桜の若木が可憐ないて、まるで迎えてくれているようでした。抽選では希望の場所が当たり、桜の木に決まりました。

夢みたいに花のもとで自然に還れる幸せを感じます。

同行した娘も「私もこんなによい所だったら、お母さんと一緒に入ろうかな」と、とを言ってくれました。「文音」の小彼岸桜の木が古木となり花をたくさん咲かせ、む姿を地下から眺めるのもいいものでしょう。

まだまだ人生設計はこれからですが、人生は一度きり。振り返らず、くじけず、前を見て多くの人々のおかげをいただき、一歩一歩ゆっくり歩みながら感謝の心をもって過ごしていきたいと思います。

「文音」にご一緒する方々とも楽しいご縁があったら、「語りあいの会」でも出会いを重ねて、より充実した老後を歩みたいと念じています。一人の力は小さなものですが、思いやりの心、聞く心をもって重ねていきたいと思います。

今後とも皆様に教えていただきながら、進んでまいりたいと思います。

第5章

桜葬ネットワーク会員

里山再生活動と樹木葬

岡本和幸［おかもと わこう］
千葉県・真光寺住職

真光寺は２００６年より樹木葬墓地「森の苑（にわ）」型の樹木葬墓地、「桜の苑」は合葬型の墓地です。「桜の苑」には大きな桜の木が全体では２５０本の桜の木をはじめ、地元の里山の木を中心にしながらも、こぶしや夏椿や山椿、さまざまな花木、実のなる木やもみじなど紅葉する木が年間を通して楽しめるように植えてあります。

私が真光寺に入山したのは１９９４年でした。このお寺は長く住む人がなく、荒れていました。入山祝いにもらったご厚志と貯金をたよりに、お寺の改修を始めました。まずはお住めるようにしなければなりません。業者に依頼すると高くつきますから、材木やU字溝などの資材を買い、中古のユンボやダンプまで買って、自分で直していく方法で整備していきました。

１９９６年に住職となり、その前から勤務していた東京・四谷の東長寺で行っていた坐禅会の方々に来ていただき、一泊坐禅会をしたり、同じく東長寺の寺子屋教室の生徒や関係者の紹介

で学生の合宿を受け入れたりする活動を始めました。その際には裏山の竹林で竹の子り、みんなで畑を開墾して野菜の苗を植えたり、山芋を掘ったり、山の整備をしたりの活動をしましたが、それが今日へとつながっています。

自分でできるひとことおりの補修を終えたとはいえ、本堂の老朽化は著しく、付け焼事は応急措置にすぎません。さらなるお寺の再生を模索するなかで、２０００年頃から東長寺の協力を得て、学者や環境設計の専門家も加わり、山域環境の分析や環境の調査を継続的に行っていくなど、当地の自然の寺としての真光寺の魅力を見出すべく、地形態である谷津田（やつだ）の再生へ向けた検討を始めました。くために、環境に配慮した墓地を整備する必要性を感じました。散骨や樹木葬という耳にするようになっていました。

環境調査に訪れた大学の先生のゼミの合宿に参加した学生たちの要望もあり、２荒れ果てた谷津田の再生に取り組むこととなりました。まったくの素人が荒れた田を家さんからあまった苗をもらって始めた田圃作りでしたが、現在では農業者の資格もの谷に沿ってひろがる３千坪の田を耕作しています。この谷津田の再生を手伝ってもらおうとい

う発想から、同時期より「川原井の里山を守る会」と発展していきました。当初は研究者や関係者、学生などが中心でしたが、親子での参加が圧倒的になっています。イベント開催日は境内で子どもたちが走り回り、大きな声がこだましています。

これまでの道のりは、行き当たりばったりに目の前の壁を乗り越え、さらに乗り越えしながら、汗と泥にまみれたものでした。蛇が大嫌いで夏場は里山に入ることさえ避けていた私でしたが、幸い地元の檀信徒や協力者のご助力を得て、現在の形ができ上がってきました。苦労もありましたが、その過程はなかなか経験できない貴重なものでした。

真光寺の樹木葬墓地は、個別に記念樹を植える形式ではありません。地元の樹木を中心に、専門家の助言を受けながら、あらかじめ植樹してありますので、真光寺に眠りたいとお考えの方々は、ぜひ生前に会員となってお寺に足を運び、木々が成長してゆく過程を実際に見ていただければと思います。そのためにも、お寺で行う一般的な行事や、縁の会総会、植樹祭などの催しを通し、会員相互が交流を深め、楽しい寺づくりをしていきたいと考えています。

里山再生も、新しい伽藍の真光寺も道半ばです。私はお寺を誰もが気楽に泊まれ、「禅センター」などを聞きながら、農作業や里山散策、禅や写経、講話などを通して学んだり樹木葬墓地の里山で、自然学校の子どもたちが虫や鳥に親しんだり散策や農作業に汗を流し、その中で世代を超えた交流が生まれ、先に旅立った方々がそれを見守っていてお寺にしていきたいと願っています。境内で遊んだりしている傍らで、禅センターに参加できる場所をつくり上げたいのです。誰でもがゆっくりとした時間を過ごすことのできる樹木につ

【墓地の概要】

◆名称　森の苑（もりのにわ、区画型）、桜の苑（さくらのにわ、合葬型）

◆特徴

真光寺では里山景観を再生する試みをもって境内地や近隣を植樹、管理しています。そうした土地の一角を樹木葬墓地として整備していますので、将来は墓地全体が里山の森へと育っていきます。

森の苑：伽藍を見おろす山全体が森の苑で、1区画ごとに区切られています。1区画にはご家族何人でも埋葬できます。

桜の苑：森の苑の一画に位置する総墓で、大きな石とたくさんの桜がシンボルです。季節になると満開の桜に包まれます。里山の桜の木の下に、縁ある方々と共に眠るという墓苑です。

［縁の会］継承しないお墓である樹木葬を通じて、真光寺と縁を結ばせていただいた方々は「檀家」にあたりません。真光寺信徒である「真光寺縁の会」の会員となります。真光寺は、会員の没後、樹木葬墓地に埋葬し、永代にわたるご供養をすることをお約束します。

◆区画数　全767区画

◆埋葬方法

故人を「森の苑」に埋葬する際は、土を深く掘り、そこにご遺骨を納めます。骨壺のままか、または壺からご遺骨を出し、白い布に包んで埋葬するかのどちらかを選んでいただきます。

◆期限の有無

永代供養墓。同じ区画を使う家族全員の三十三回忌が終了すると総墓に合葬します。

◆費用

森の苑：区画を使用する1人目：70万円、2人目以降:40万円

桜の苑：1人につき50万円（戒名、位牌、墓地の使用、墓碑、納骨式、永代供養、管理費含む一式）。

生前の方は1区画につき、5,000円／年の年会費が必要です（没後、ご遺族にはかかりません）。

桜の苑

瓦谷山　真光寺［しんこうじ］

◆宗派　　曹洞宗

◆所在地　〒299-0201 千葉県袖ケ浦市川原井634

◆連絡先　電話 0438-75-7414（真光寺、上総自然学校）
0438-75-7365（縁の会事務局直通）
FAX 0438-75-7630
Eメール ennokai@shinko-ji.jp

◆ホームページ

http://www.shinko-ji.jp/index.html
http://www.shinko-ji.jp/satoyama/index.html（上総自然学校）

◆交通アクセス

［電車の場合］ 東京駅、千葉駅方面からJR総武線・内房線直通、快速君津行きで袖ケ浦駅（または姉ケ崎駅）。
［車の場合］ 姉崎袖ケ浦インターチェンジから約10分。
［高速バスの場合］ 横浜、川崎、品川、新宿から木更津駅行きで袖ケ浦バスターミナル降車。
※電車と高速バスご利用の方は降車駅より送迎あり（事前申込）

◆沿革

室町時代の弘治2年（1556年）、現在の木更津市真里谷にある、上総の高野山といわれていました真如寺の八世、鷹山厳召大和尚により開かれました。

◆主な活動

坐禅会や宿泊行事などのさまざまな活動を通じて、人が集い活動し、心を休めることのできる、開かれた寺院「里山の禅センター」とするよう精進しております。また、樹木葬、里山再生活動、上総自然学校を通じて、近隣の里山景観の回復、保全に努めています。



森の苑

天徳寺における樹木葬の意味

二神成尊
［ふたがみ せいそん］
千葉県・天徳寺住職



天徳寺で樹木葬を始めたのは２００４年6月28日。それからすでに7年が経ちました。始めた契機としては、天徳寺の従来の墓石墓所のうち、毎年1件が無縁になって荒れ果てていく一方で、新しく墓石墓所を確保する方には葬儀代・墓石代を併せての大きな負担を強いることが忍びなく、個人的にも寺の緑が墓石で埋め尽くされていく不満もありました。

そのため当初は、クローバーやたんぽぽを茂らせた土地を区画して、骨壺を埋めるという方法での墓所申請を計画していたのですが、その矢先に岩手県の祥雲寺で始められた樹木葬の新聞記事を目にして「これは」と思い、この新しいアイデアに取り組むことになったのですが、当初、墓地の法律が厳しい関東で許可は下りないのではと危惧されたのですが、自体も知らなかった地元の役所と共に勉強と協議を重ね、１年後に許可を得ることができました。

樹木葬墓地は、現在第３区画までが開かれ、２０１２年には第４区画を開く予定です。７年前の予想では、今後は首都圏にも樹木葬墓地が増えて、房総の太平洋岸まで樹木葬を求めに来る人

は少ないだろうから、わずかな利用者のために樹木を長期に管理することが負担になるのではと危惧していました。しかし予想外に樹木葬を採用する墓地は増えず、現在でも関東では7カ所程度です。

樹木葬が増えなかった理由としては、①もうけが少ない、②樹木の管理は負担が大きい、③墓石業者からの収入がない、④許可の申請等が困難に思える、⑤樹木葬の場所が確保できない、⑥「供養＝墓石への埋葬」という思い込み、などがあげられるでしょう。

樹木葬が増えなかったことは、天徳寺の運営には有難いことなのですが、樹木葬の意義の一つである自然環境の保全・再生のためには、全国の多くの寺が樹木葬を採用しないのは残念です。また同時に、樹木葬を選びたいが近くに樹木葬墓地がないという人もいるでしょう。

樹木葬の意義は他にもあります。前述のものと重複しますが、①自然環境の保全・再生、②墓石代がかからない、③檀家にならなくても寺院内の墓所を取得できる安心感、④縁者が途絶えても墓所は撤去されず供養は永代に継続される、⑤大地に還るという安心感、⑥墓石とは違う、温かなイメージ。これだけ魅力がある樹木葬が社会に広まらないのは、何とも残念で仕方ありません。

私にとっての樹木葬の魅力は、さらにあります。もともと樹木葬を選ぶ人は、いわゆる無宗教

を明言して、お寺との縁をもちたがらない方が多いのです。そうした最も寺から縁遠い人たちと、墓参や樹木葬会員の「集い」等を契機に縁が結べることは有難いかぎりなのです。

というのも、本来のお寺は、人生をいかに生きるか、そこにどのような意味があるか、という問題を共に考える舞台であるはずです。亡き愛すべき両親や伴侶の存在の意味に関心があり、それは人生の送り方に関心があり、お寺と相通じるものなのです。

天徳寺では現在のかたに売られる人身売買をなくす活動に、アジアの貧しい家の子どもが借金のかたに売られる人身売買をなくす活動に力を入れています。最も温かく保護されるべき家庭から棄てられ、性的虐待や強制労働の犠牲にされる子どもたちの悲劇を、どうしても傍観していられないという住職個人の思いから始まった活動なのですが、樹木葬会員からの協力で大きな力に成長しました。樹木を植えて自然を守るのは、未来を生きる子どもたちのためでもあると考えると、樹木葬会員に人身売買をなくす活動の協力を求めることは、的を外れてはいないのでしょう。この活動は人生の送り方の一つの提案なのです。

そして遺族にとって、愛する故人への最大の供養となるのではないでしょうか。というのも供養とは、遺族が故人の愛情に感謝して故人の願いに応えること

です。そうであるなら、遺族が故人の愛情を引き継いでこの世に希望を生み出すことではないか、と私には思えるからです。

【墓地の概要】

◆名称　桜葬、樹木葬

◆特徴

約5町歩の境内地に、3本の大山桜の周囲が墓域となっている「桜葬」と、半径1mの円内が墓域の「樹木葬」があります。

◆区画数　100区画

◆埋葬方法

ご遺骨は桜の木の周りの指定された区画（直径0.38mの円）に、骨壺から出して埋葬します。

◆期限の有無

埋骨を執行した後、33年間は管理されます。その後は自然のままにします。

◆契約の条件

里山保全とアジアの子ども支援への協力

◆費用

お1人1区画30万円の永代使用料をお納めください。なお、生前予約される場合、桜葬会員費年間5,000円が必要となります。この会費は事務通信、寺院施設使用等の費用に当てられます。



天徳寺全景。本堂後方が樹木葬·桜葬地

天徳寺［てんとくじ］

◆宗派　　曹洞宗

◆所在地　〒298-0025

千葉県いすみ市山田1886

◆連絡先

電話 0470-66-1258

FAX 0470-66-1258

Eメール

cbbqp906@yahoo.co.jp



初夏の桜葬地

◆ホームページ　http://www5f.biglobe.ne.jp/~tentokuji/

◆交通アクセス

［電車の場合］東京駅より外房線（特急で1時間10分）、大原駅よりタクシーで13分。

タクシーは片道2,500円程度かかります。3カ月に1度の見学会の日は無料送迎します。

いすみ鉄道上総東駅より徒歩15分。大原駅よりシャトルバスで徒歩10分。

［車の場合］京葉道路市原インターチェンジより、国道297号線で40分、大多喜町で国道465号線に入り20分、山田交差点手前の天徳寺看板より曲がって1分ほど。

◆沿革

永平寺と總持寺をご本山（開祖·道元禅師）とする曹洞宗のお寺です。957年の創設以来、1048年の歴史があり、ご本尊は智恵の仏様といわれます虚空蔵菩薩をおまつりしています

◆主な活動

天徳寺の里山作り、アジアの子どもの支援

「家墓」からの自由

渡辺大修
［わたなべ だいしゅう］
鳥取県・正福寺東堂
樹木葬運営責任者



家墓のはじまり

墓碑には、「○○家之墓」と刻銘されたものが多くあります。これは、現在では墓地の広さや墓石の価格上から、個人墓ではなく「家墓」として建立されるようになったからです。しかし、「家墓」が建立されるようになったのは明治時代からです。１８９８年施行の旧民法「系譜、祭具及ビ墳墓ノ所有権ハ家督相続ノ特権ニ属ス」として、明治政府は「家の墓」を国民に強制しました。これによって、「○○家先祖代々之墓」が建立されるようになりました。

墳墓等の承継に残る「家制度」と迷信

民法８９７条は、系譜・祭具及び墳墓の承継は、「慣習に従う。または、被相続人の指定。そうでない場合は家庭裁判所が決める」（要約）と定めています。この「慣習」には、明治憲法下における家制度を色濃く残しています。

「家墓に氏の違う者、一旦家を出た者等を埋蔵すると不幸になる」と、今でも本気でそう思っている人がありますが、全くの迷信です。しかし、この迷信から、独身者や離婚者等、「父母と一緒に眠りたい」「子と一緒に眠りたい」との願いが拒否されている現実も、今なお存在します。

A男さんは、次男で独立しましたが独身でした。「両親の許に眠らせて」との願いは残念ながら実現しませんでした。B子さんは、離婚し幼子を連れ婚家を去りました。ところが、成人したばかりの子は悲しいことに病気で逝去され、遺骨は「家の子」として婚家の家墓に埋蔵されました。B子さんは、愛し子と一緒に眠ることを切望しましたが、頑なに拒否されてしまいました。

家墓からの自由

私は、「先祖代々」の家墓を軽んじているのではありません。代々の家墓を守ることはとても尊いことだと思っています。ただ、明治憲法下に強制された「家の墓」から来る因習や迷信を取り払ってほしいのです。葬送の自由と自己決定権の確立は、生きている現世での自由と重なるのです。

また、「家墓」と「自然葬」が対比されることがありますが、単に「遺骨を自然に帰す」ということで見れば、当地方には古くから、家墓にカロート（遺骨を納めるための納骨棺）を作らず、

墓地内に骨壺から焼骨を出して「自然に帰す」として埋蔵している所もあります。また、山や河原を棄て墓（埋め墓）とし、墓碑は揚げ墓（詣り墓）に建立する「両墓制」の村もあり、棄て墓は村の共同墓地で、家ごとの区画はなく、空いている場所に焼骨を壺から出して埋蔵しています。

いま拡がっている、散骨、桜葬、樹木葬、永代供養墓、共同墓や、洋墓を主流とするものではなく、さまざまな文言を彫ったもの、彫刻墓碑等への志向は、「家墓からの自由」としての、葬送の自由と自己決定権への奔流と見て取れるのです。

樹木葬、樹木の癒し

A男さんやB子さんが新しい仲間と眠る、正福寺樹木葬墓苑は、（経営者側と相談の上）契約者の希望する樹木を植樹する墓地、桜の周りに埋蔵する桜葬墓苑、アンネの薔薇の周りに埋蔵する薔薇墓苑、聖観音菩薩像の永代供養合同墓、桜墓苑合同墓、薔薇墓苑合同墓と6種類があり、契約者の幅を広げています。

春から夏にかけては、桜をはじめたくさんの植樹された花が、秋にはさまざまな紅葉が、そして冬には静かな冬樹たち、アンネの薔薇は四季咲きのため、四季を通じての表情を見せています。また、墓苑には蝶や蜻蛉が舞い、蝉時雨、虫時雨と続きます。そして、墓苑を取り巻く欅（けやき）、椎（しい）、

楢（たぶ）などの樹齢４～５百年の大樹は悠久の時へ誘いま
こうした、樹木たちに抱かれて、植樹された花木や桜、薔薇などに、故人との対話と癒し見学に来られた人たちが、一様に満ち足りた優しい表情をお見せになります。ここに訪れた人、のセラピー、癒しの効果があるのだと思います。
今後も、「家墓からの自由」「葬送の自由と自己決定権」の確立を求めて、樹々たちの充実の方向をしっかりと見据え、樹木葬墓苑の運営に心を砕いていこうと思います。

れます。永代供養及び樹木·お墓の管理は正福寺が責任をもって行います。

◆区画数

観音樹木葬墓苑（150×140cm）40区画

樹木葬墓苑（150×150cm）330区画

桜葬墓苑（50×50cm）120区画、ばら墓苑（40×40cm）170区画

◆埋葬方法

観音永代供養墓、桜葬·ばら墓苑合同墓は、遺骨を合同で納骨します。

観音樹木葬·樹木葬墓苑は、自分の好きな花木を植え周りに納骨します。

桜葬·ばら墓苑（個別区画）は、桜の木やアンネのばらの周りに納骨します。

◆期限の有無

①生前契約の場合　死亡時より32年間（三十三回忌）

②既死亡者の場合　契約日より32年間

使用期限の終了した者は住職が改葬します。ただし、32年間の使用期間が過ぎるまでに、子どもさんが引き続き同区画を使用したい場合は、墓地使用継続の申し込みが必要です。この場合の費用は、継続申し込み時の供養料です。

◆費用

観音永代供養墓·桜葬墓苑合同墓·ばら墓苑合同墓: 1霊10万円（生活保護受給者は5万円）

観音樹木葬および樹木葬墓苑の個別区画:50万円（2人まで）

桜葬墓苑およびばら墓苑の個別区画:30万円（2人まで）

◆その他

植樹した花木が枯れた場合は、当寺が同種の苗木を植樹します。花木·樹木の剪定、肥料、消毒等すべての管理は専門の造園業者に委任しています。

金華山　正福寺［しょうふくじ］

◆宗派　　曹洞宗

◆所在地　〒689-3223 鳥取県西伯郡大山町茶畑238

◆連絡先　電話　0859-54-3860

FAX　0859-54-5102

Eメール s-shohukuji@wine.ocn.ne.jp

◆ホームページ http://www18.ocn.ne.jp/~shohukuj

◆交通アクセス

［電車の場合］ 山陰本線「大山口駅」または「みくりや駅」よりタクシーで7分。

［車の場合］ 高速米子道「米子インターチェンジ」より正福寺まで約15分。山陰道「大山」出口で下りる。

◆沿革

地名の茶畑（ちゃばた）の由来は、当地に藤原氏の庄園があり、茶の栽培が行われて朝廷にも献上されたという伝説からです。当寺は当初、霊鷲山祇園寺といい天台宗でしたが、1684年に傳翁素眞大和尚を招請開山として曹洞宗に改宗し、金華山正福寺と号し今日に至ります。本尊は薬師瑠璃光如来です。樹木葬墓苑の開設は、2006年3月です。

【墓地の概要】

◆名称

観音樹木葬墓苑·樹木葬墓苑·桜葬墓苑·ばら墓苑、観音永代供養墓

◆特徴

中世の豪族の館跡で、いまも館を守る土塁が残り、史跡指定の歴史とロマンの墓苑です。平地であり車イスでもお参りできます。樹木葬墓苑では、樹木葬にふさわしく、樹齢400～500年の椎、欅の大樹が皆様を迎えてく



桜葬墓苑（個別区画と合同墓）

東北に涙と希望の桜咲け
――震災の悲しみを復興のチカラに

後藤泰彦
［ごとう たいげん］
岩手県・常堅寺住職



自然はなんと残酷なのでしょう。

夫や子ども、家族を亡くし、雪の降るなか、ぼう然と海辺にたたずむ妻。

孫を守ろうと身をかばい、屋根の下敷きになり、覆いかぶさったそのままの姿で息絶え発見された祖母と孫。

「あの時、手を離さなければ助けられたのに」――年老いた母をつかんだ手が寒さで麻痺し、母は引き波にさらわれました。「自分ばかりが生き残ってしまった」と自責の念にかられる男性。

4月から中学生という男の子は、1カ月後に発見され、泥が付いたままの姿で棺に入れられました。遺体の上に、母はそっと学生服をかけたといいます。

2011年3月11日、巨大な地震と津波が東北を襲いました。

自然はなんと残酷なのでしょう。

しかし、人は誰を恨むことでもなく、自然を憎むこともありません。

時として荒ぶる神は、恵みをもたらす慈父であり、心を癒してくれる慈母でもあるのです。

芭蕉の句に「さまざまな事思ひ出す桜かな」という句があります。その一片ひとひらに、喜びがあり、悲しみがあり、人生がありま に散った無数の命。桜を見るたびにあの人を思い出し、自分に重ねてみます。

けっしてあなたのことは忘れない。何十年も、あなたを見守り、あなたに寄り添い、またここから思い出をつくっていくのです。花となって生まれ変わるのですから……。

東北に涙と希望の桜咲け！　犠牲者の数だけ、桜を植える〝鎮魂と復興の手あわせ桜プロジェクト〟は、桜葬がコンセプトとなり、活動となりました。

この未曾有の大震災に〝自分は何ができるだろう〟と誰しもが思うことです。僧侶でなければできないこと、そこで取り組んだのが、供養の桜植樹活動でした。

鎮魂と供養の桜

枝垂れ桜には魂が宿ると柳田國男は「信州随筆」に書いています。古来、亡くなった人の魂を鎮め供養するために、桜を植えることがあったそうです。

亡くなった人を偲び桜を植樹することから、桜そのものが亡き人と重なります。子どもを亡くした人には、子どもの成長と同じように桜も成長しますので、桜が子どもそのままの姿と映ることでしょう。また、まだ行方不明の人がいる方々にとっては、この木が大切な人そのものになるのです。大切な人を偲び、桜に生まれ変わってほしいという願いもこめて植樹します。

悲しみを癒す桜

絶望の淵に立たされたとき、がんばれと励ます人の言葉は、時に残酷にさえ聞こえます。深く大きな悲しみを前には、時として人間の言葉は無力です。

そんなとき、桜は静かに寄り添い、無言で見つめてくれます。「あなたは一人ではないよ。私がついているよ」。何もできなくても静かに隣にいてくれればそれでいいのです。自然や花が人の心を癒してくれるのです。

復興への希望の桜

東北の冬は長く厳しい苦難の季節です。大切な人を亡くし、仮設暮らしの高齢者にとって、住み慣れない土地は暗くさみしいことでしょう。

桜も寒く苦しい冬を乗り越え、春一番に花咲くように、桜から希望のチカラを授かりましょう。必ず光がさします。春が来ます。みんなで手を合わせ、寒く苦しい時を乗り越えていきましょう。

桜はあなたのことを決して忘れない

桜は毎年花を咲かせます。5年後、10年後、20年後、震災の日から約1カ月後の4月中旬、東北は桜の季節を迎えます。亡くなった人は、忘れられることが悲しいのです。花が咲くたびに、桜はあなたのことを決して忘れません。50年後も、百年後も、永遠に……。

桜による魂のふるさとづくり

家を失い、この地を離れて生活している人もいます。しかし、彼岸や盆になれば遠く離れても墓参りに帰ってきます。お墓が故郷の心のよりどころだからです。

故郷に桜を植えていきましょう。桜を見るたびに、亡き人を思い、先祖を思い、故郷を思い出します。地域のシンボルとして、桜が供養の心へと導くのです。

桜は日本の象徴、そして復興の象徴です。世界からもこの〝鎮魂と復興の手あわせ桜〟プロジェクトは注目され、支援されています。皆様の想いが託された桜が点から線となり、万里の桜回廊となることを願い、またいつか桜の巡礼地として復興を遂げた東北の姿を皆様にご覧いただける日が来ることを祈り、今後も活動していきたいと思います。

【墓地の概要】

◆名称　東北花の樹木墓園（管理運営·常堅寺）

◆特徴

樹木葬·桜葬、花芝墓地·夫婦墓、永代供養墓があります。

桜をシンボルとした樹木葬桜タイプ: 1区画50×50cm（2人まで）

花芝墓地（墓石プレートの夫婦墓）: 1区画1.7×1.7m（1家族）

◆区画数

樹木葬桜タイプ·花芝墓地（墓石プレートの夫婦墓）タイプ計70区画

◆契約の条件　宗旨·宗派は問いません。

◆費用

樹木葬桜タイプ30万円、花芝墓地（夫婦墓）タイプ70万円。管理費別途。

◆その他

自然回帰と魂のふるさと·人間の尊厳とエンディング（終末活動）、これからの時代に応じた墓を考えていきます。



桜葬

常堅寺［じょうけんじ］

◆宗派　　曹洞宗

◆所在地　〒029-0201 岩手県一関市川崎町門崎字舘畑309

◆連絡先

電話 0191-43-3932／FAX 0191-43-4006

Eメール info@sizentai.net

◆ホームページ http://sizentai.net/

◆交通アクセス

［電車の場合］ JR一関駅（新幹線で東京駅から2時間8分）より東へ車20分。

［車の場合］ 仙台より車で90分。

◆沿革

奥羽山脈の夕日を遠望し、東北の大河·北上川を眼下に望む絶景の地にあります。

◆主な活動

東日本大震災の鎮魂と復興を祈る桜の植樹活動「手あわせ桜の会」主宰

◆その他

手あわせ桜の会代表·住職のブログ「もっと楽に生きられる仏教ホッとケア説法」があります。［桜和尚］で検索できます。



散策コース

京都の「桜葬」

村井定心
［むらいじょうしん］
京都府・西寿寺住職



西寿寺は、京都市にある浄土宗の尼寺です。江戸時代初期の創建で、世界遺産で有名な御室・仁和寺のすぐ近くにあります。周辺には、竜安寺や妙心寺といった観光寺院が多くあり、また古くから別荘地として大きな屋敷が連なった風光明媚な場所です。境内そのものは歴史的保存地区に指定されていて、開発はできないために、山奥のような感じがしますが、境内の外は静かな住宅街で、交通の便のよい場所にあります。

２００６年から西寿寺では、都市型自然葬の「庭園葬」をしています。境内墓地が1千坪あったおかげで、墓地整理を行い、自然葬をすることができました。

西寿寺の自然葬のテーマは「癒し」で、これはお寺そのものでもあります。

その象徴として、２０１１年8月10日に読売テレビ系列の「ｔｅｎ！」という情報番組でも取り上げられました。

２基、自然葬の墓地にも2基設置され、お参りに来られた方の心の癒しとなっています。

「水琴窟」がこのお寺にあります。「水琴窟」は、癒しの音といわれ、お庭にいます。

自然葬で埋葬され、花となって蘇るということは、大切な人を亡くした遺族への最高のグリーフケアであると私は考えています。私自身、2年半前に大切な師匠を突然死で失い大きなグリーフを受けました。おかげさまで、ようやく立ち直れるようになりましたが、師匠の死を通して、遺族の深い悲しみ・苦しみ・怒りを、他人事（ひとごと）ではなく受け止めることができるようになりました。

お寺の使命は何かということを常に問いかけ続けた私に、師匠は自らの命をもって「遺族の悲しみに寄り添い、共有し見守ること」、遺族のグリーフケアをすることがお寺の使命であるということを教えてくださったのだと今では思っています。自然葬はそのグリーフケアの大きな支えとなるものです。

「花に生まれ変わられた大切な人と一年に一度だけでもまた会うことができる」

そう思うだけで、悲しみで打ちのめされた心が少しだけでも癒されるような気がします。

現在、西寿寺では3タイプの庭園葬をしています。その中に桜葬も含まれています。

桜葬の墓地からは京都市内が一望でき、よく映画やドラマの撮影にも使われています。本堂は、「京都地検の女」の成増警部の実家のお寺ということで、毎週テレビ出演していました。そんな環境のいい墓地の中で、小鳥の囀りと眼下に広がる京都の街を見下ろし、美しい桜の花を見ていると、大切な人とのいろいろな思い出に浸ることができます。

最近、庭園葬の中で、一番人気となっているのが、桜の木の周りに作られた花壇型墓地です。好きなお花を植えることができるのと、桜の木のすぐ側で静かに眠れるということが人気の理由のようです。

また、プレート付きなので、そのプレートに皆さん本当にいろいろな言葉を書かれています。そのプレートを見ているだけでも「楽しい」と言われた方もおられます。素直な気持ちを大切な人にお供えできるのは、とてもよいことだと思います。

また、花に埋もれて永遠の眠りにつけると思うと、私だけかもしれませんが、なんとなく嬉しいような気持ちがします。

自然葬をしてよかったと思うのは、自然葬の会員「薬師の会」の会員さんたちとの温かい交流があることです。檀家制度ではなく、自由なスタイルの墓友の会ですが、いろいろなお楽しみの行事、たとえばジャズコンサートや落語会、ボケ封じで有名な「鳴り釜」の神事、沙羅双樹と水琴窟の会などなど、年間を通して行われるさまざまなお楽しみ会を通じて、会員さんたちと温かい心の交流ができたことです。

遠くは北海道、九州からわざわざ会に参加してくださる方、年間行事には万障繰り合わせて皆勤賞ものの参加率を誇られる方、そして、となりに座られたというご縁からお友達をつくられた

方などいろいろなご縁であふれているこの会を通して、私自身、とても温かな気持ちになれます。いずれ、同じお墓に入る仲間どうし、生きている間に親しくなれるというのは、とても楽しいものです。

私もやがて会員の皆さんと一緒に花になれる日がくるのが今から嬉しく思えます。

家制度で結ばれた皆さんとはまた違った、親しみの心を会員の方に覚えます。

これからのお寺は、檀家さんだけではなく、広く多くの皆さんとともに、皆さんの期待に応えることのできるようなシステムをつくり上げていかなければならないのではないでしょうか。

最後に、私は西寿寺を、「お寺が好き」と言っていただけるような場所にしていきたいと思っています。これからも、そうなれるように努力していくつもりです。微力ではありますが。

京都にご旅行の際には、別に自然葬の見学でなくても「あなたの知らない京のお寺」を散策する気分で、お気楽にいらしてください。春の桜、夏の紫陽花、秋の紅葉、冬の南天、境内には四季折々の花々が植樹されていますから。お待ちしています。

【墓地の概要】

◆名称　桜葬、樹木墓地（庭園墓地·ホワイトロード）

◆特徴

宗旨·宗派·国籍·宗教は問いませんが、西寿寺墓地内で行う宗教儀礼、供養、墓に関することはすべて西寿寺が行います。継承は自由です。会員は水琴窟を聴く会、護摩焚き、落語会、音楽会、ボケ封じの鳴り釜などの年間行事に参加できます。

◆埋葬方法

お茶の葉で作られた特殊なカプセルに納骨して埋葬します。

◆期限の有無

大半は自然葬ですが、一部は合祀墓の薬師如来さまに分骨させていただき、薬師の会の会員として、合同位牌に戒名等を記名して、永代にお守りさせていただきます。永代供養付きで、月命日には回向させていただきますので、跡取りがいなくても無縁仏になることはありません。

◆契約の条件　原則生前予約制

◆費用

入会金5,000円、納骨志納料135,000円（永代供養料含む）、管理費用なし（永代使用権はない）

◆その他

桜散骨しだれの札、桜葬花壇型墓地、家族型庭園墓地（桜の苑·藤の園）などもあります。お問い合わせください。



桜葬

泉谷山　西寿寺［さいじゅじ］

◆宗派　　浄土宗·捨世派

◆所在地　〒616-8253

京都市右京区鳴滝泉谷町16

◆連絡先

電話 075-462-4851（代表）

075-462-4850

FAX 075-462-4851

◆ホームページ

http://www.d4.dion.ne.jp/~saijuji/



樹木墓地

◆交通アクセス

京都駅より市バス26号で約40分、「福王子」下車徒歩7分。三条京阪より市バス10号で約30分。

◆沿革

寛永4年（1628年）、浄土宗の高僧·岱中良定上人が開山しました。

◆主な活動

NPO法人自分で考えるラストセレモニーの会

◆その他

境内の庭にご霊泉の水を引いた陰陽一対の水琴窟があります（見学は要予約）。



水琴窟·陽「三光石」



水琴窟·陰「丈六」

桜と共に寺が変わる

菊池泰啓［きくち たいけい］
大分県・妙瑞寺住職



開創３５０年が経ち、新たなスタートの年を迎えた２０１１年の春、私が住職を務める大分市の妙瑞寺に檀信徒用樹木葬墓地「桜葬」が開設されました。

九州では初めての桜葬墓地ということでエンディングセンターの全面的サポートをいただき、現在、毎月大分市内で桜葬説明会を企画開催しています。寺とＮＰＯ団体がタッグを組んで、地方都市の中にこの新しい葬法を根付かせようと試行錯誤しながらも現在奮闘中です。

妙瑞寺は、永代供養墓「大分安穏廟」を運営して13年の実績があります。そのノウハウを活かし、それぞれの家族の事情に合わせて柔軟に対応できるように構造も運営内容も、よく配慮した理想のお墓が実現できたと思っていました。

しかし、エンディングセンターとの連携により、そのクオリティはさらに見違えるほどよくなりました。いくらよいお墓があっても、亡くなったあと自分でお墓までたどり着くことはできません。家族が遺族となり、今まで普通に行われていたことがこれからも同じように行われる保証

はどこにもありません。むしろ家族のかたちが多様化している現代においては、今まで家族が行っていたことを当然のように考えていれば、お墓までたどり着けない人は想像以上に多いことでしょう。

「遺骨をこのお墓までお持ちくださる方は、いらっしゃいますか?」から始まるエンディングサポートのきめ細やかな対応とその本気具合には、敬意をもって学ぶものがたくさんあります。エンディングセンターの活動を拝見していて宗教法人とNPO法人は、社会に対して行動をするときに、とても相性のよいパートナーになり得ると思っています。

特にエンディングサポートのようにビジネスとしては成立しないが、現代人の家族の有りようからどうしても社会に必要なサポートを、お墓の管理業務の中に取り込むことなど、今までにないことです。

妙瑞寺の場合、お墓の永代供養・管理の責任をもつ寺が、「桜葬」の機能をきちんと保証するため、必要があれば埋葬予定者のエンディングサポートを約束します。その橋渡しをエンディングセンターが取り持ち、両者に不備がないかチェックし実務を助けてくれる、といった具合です。

「桜葬」に関心をもってお寺へやってきた方にこのシステムをお話ししたら、その周到さに感動した方までいました。住職という運営責任者の顔が見える寺院墓地の利点は、ただ単に墓として

良いものを提供するだけでなく、安心して託せるサポート環境の確立が大切だと思います。

エンディングセンターとの協力関係は、今後も続きます。この協力関係において従来の葬送問題、ことに墓地問題には一つの解決の方向性を大分でも提示することができたと思っています。しかし、周囲を見渡せば、従来の慣習の中で問題を解決できないまま、今を生きる人々の生活を圧迫するような、葬送をめぐる場面は、まだまだたくさんあります。

私は「桜葬」の取り組みを通し、利用者との交流が新たな広がりとなって地域の意識を変えるエネルギーになると思っています。地道なようですがこうした積み重ねが、より良い葬送のかたちを示唆する貴重な情報になっていくものと信じています。

また妙瑞寺は、これからの時代に合ったお寺の環境づくりとして、関係する人々の意識の上からも檀家制度を廃止し、檀信徒制への移行に努めています。旧来の檀徒も含め、「檀家」という言葉に象徴されるような、親世代から子世代へ檀徒であることのなかば強制的な継続のお願いは、現実無理になってきています。

非婚等により家名が連続しなければ、既存の檀徒数は減少します。かといって一人っ子同士の夫婦の場合などは、両方の親世代がおつき合いしていた2つの菩提寺の檀家であり続けることも現実的ではありません。

檀徒となるのも、やめるのも、寺との関係は自らの意思で決定する自由度の高いものでありたいと考えます。次世代へお寺との関係を相続するかどうか檀徒としての意思確認は、るたびごとに行うべきだと思います。

将来を見据え、寺のあるべき姿について考えます。対応するためにも、敷居が低く出入りが自由な風通しのよいものでなくてはいけません。賛同者が参加しやすい環境・場所であることも大切です。力あるものにするには、情報の発信や活動の求心力は、情報の発信や活動をもって魅。これからの寺は、そんな条件のもとに社会になくてはならない存在になっていけるように思います。

妙瑞寺は「桜葬」を通して、一歩一歩着実にそんな未来図を描き始めています。

【墓地の概要】

◆名称　妙瑞寺樹木葬墓地　桜葬

◆特徴　桜をシンボルツリーとし、地中に遺骨を埋葬します。

◆契約の条件

申込者の宗教宗派は問いません。ただし、妙瑞寺（日蓮宗）により供養が行われること、桜葬会員として妙瑞寺では「信徒」として扱うことに同意される方に限ります。

◆区画数

第1期募集区画100区画。4つの埋葬エリアの空いている区画の中からご希望の場所をお選びいただきます。

◆埋葬方法

定められた区画の土中に埋葬します。基本区画は遺骨を2体埋葬可能です。また、希望する埋葬数に応じて家族区画を設けています。埋葬ごとに埋葬料を埋葬作業･手続きに関する費用としてお支払いいただきます。

◆期限の有無

お一人の場合でも、亡くなって年会費の納入が停止して13年はそのまま維持され、その後には合祀し、永代に供養いたします。遺骨が合祀された後は、個別区画は再利用されます。桜葬墓地区画の使用期限延長を契約者が希望された場合、または承継者が希望される場合にはご希望の年数に対応いたします。

◆費用

永代使用料（区画種類によって埋葬可能な体数が異なります）は、

基本区画: 60万円（1区画契約 全2体／埋蔵可能）

家族区画2: 110万円（2区画同時契約　全4体／埋蔵可能）

家族区画3: 150万円（3区画同時契約　全6体／埋蔵可能）

このほか、年会費（事務･運営･管理費に充当。1契約ごとに）4,000円、埋葬料（遺骨を埋葬する時の1回あたりの経費）3万円、埋葬者プレート刻字料（1区画につき）5,000円（埋葬エリアごとに埋葬者のお名前を真鍮製プレートに刻字）

昌光山　妙瑞寺［みょうずいじ］

◆宗派　　日蓮宗

◆所在地　〒870-1141 大分市下宗方901番地

◆連絡先　電話 097-541-7389／FAX 097-541-7505
Eメール taikei@nifty.com

◆ホームページ　桜葬紹介サイト: http://www.oita-sakura.com

◆交通アクセス

［電車の場合］ JR大分駅よりタクシーで20分、JRしきど駅よりタクシーで8分。

［車の場合］ 光吉インターより4分。

◆沿革

妙瑞寺は、稲葉藩能登守信通公の発願により、当時京都本山本法寺第十八世日允上人を招じ創立されました。日允上人は本阿弥光悦の孫にあたり、当山山号（昌光山）は本阿弥家ゆかりの「光」と本山本法寺山号叡昌山の「昌」に由来します。

開創350年記念事業として境内の拡張と山門の修復を行い、現在、家族のかたちや社会変化にともなう葬送問題に取り組むNPO活動の拠点として活動を支援しています。

◆主な活動

「NPO法人これからの葬送を考える会九州」の活動拠点でもあります。

◆その他

平成8年に開設された「永代供養墓　大分安穏廟」は全区画利用され、現在「これからの葬送を考える会九州」と共に合同供養祭等を行っています。



山門と桜



妙瑞寺樹木葬墓地 桜葬

第6章

協働している団体

「安穏廟」の22年とエンディングセンター

小川英爾
［おがわ えいじ］
新潟県・妙光寺住職



これまでの墓が家族血縁による継承を前提にしてきたことに対し、継承者を必要としない新形式の墓「安穏廟（あんのんびょう）」を1989年8月に開設しました。

当時、教団の研究員の一員として、全国の過疎地で運営が立ち行かなくなっている寺を数多く見聞きしていました。一方、大都市圏で墓地需要の急増と、片や跡継ぎのいない家族が墓を求めにくいといったことが社会的な問題になっていたのです。これは背景となる人口の流動化や、核家族化など家族の形と意識の多様化が原因で、やがては「家」を基盤とした檀家制度が崩壊し、寺の衰退につながると考えました。

「家」と寺で行われてきた墓の継承と先祖祭祀は、命の継承と先人への敬意という点から大切で、アイデンティティの確立としても有効だと思います。しかし一方で血筋や系譜への過度なこだわりは、物理的にも意識的にも現代社会では無理があります。これからは多様な家族形態が共存する社会であるべきで、一方でそこに起こるリスクの回避や、孤立化の防止に対して寺が一つ

の役割を担えるのではないか。また、墓の継承者がいないことで、〝無縁仏〟にされるという不安を感じる、さらには、そのことでこれまでの人生すら否定されるかのような思いになるには、多い。こうした誤解に対しても、寺は回答を出すべきだと考えました。そのための寺どうしても従来の墓とは違う、血縁による継承を前提にしない墓が必要だと思い至ったのです。

それは遺骨の受け皿という単なる合祀の墓ではありません。継承者の有無に関わりなく、寺が家族血縁を超えて新たな縁を結ぶ核となり、皆で供養を継続する。そこではこれまでの人生も肯定され、不安のない老いと死を迎えることができる。さらに世代を超えて心安らかで穏やかな世界を目指す。そのシンボルともなる墓として「安穏廟」と名づけました。

しかし当時は、〝無縁仏の受け皿〟、なかには〝シングルをねらった寺の新しいビジネス〟とまで言われました。むろん最初から理解されるとは考えていませんでした。翌１９９０年の春に井上治代さんとの出会いから、その年の夏に共同で「21世紀の縁作りと墓を考える集い」を妙光寺で開催。井上さんはエンディングセンターの前身となる「21世紀の結縁と墓を考える会」を、この前に立ち上げました。妙光寺では合同祭祀と生前交流を目的にした供養の場として「フェスティバル安穏」と名づけ、檀家を挙げて取り組みました。これが大きな反響を呼び、従来の墓制度のもつ問題点が社会的に広く知られるところとなったのです。

この催しは以来22年間継続されていて、檀徒や安穏会員が中心となって企画運営までを担当し、当日のボランティアスタッフは１００人に及ぶまでになりました。この間ずっとエンディングセンターは名実共に共催団体で、さらにまた「葬儀の生前契約」のシステムや会員交流のノウハウ等々、数多くの助言をいただきました。

その結果、妙光寺は大きく変わりました。「フェスティバル安穏」（２０１０年から「妙光寺の送り盆」と改称）をはじめ、多数の行事を通して人の輪が広がりました。また、それまで寺に縁の薄かった方たちが多数参加する各種の研修会、団体ツアーなど、新たな縁作りが形になっていきます。一方で病院のカルテのような〝現在帳〟が機能を発揮していますが、その基本台帳としても〝過去帳〟ならぬ、さまざまな悩み相談が寄せられるようになりましたが、その生前契約、生前の戒名授与なども認知され、定着しました。〝生きているときこその寺〟としての理解が進んだと受けとめています。これらがもとになって自発的な寄付が増え、施設も充実しました。本堂が建て直され、境内も整備されました。また、宿泊も葬儀も可能な塔頭寺院が再興、皆さんに活用されています。

寺の組織も〝檀家〟ではなく、〝檀徒と信徒〟としての定義づけが明確化しました。入るも辞めるも自由とした結果、大幅に新たな檀徒が増加しました。さらに経理の完全公開、役員の定年

制など法人としての体制もオープンでまた堅実になりました。

今の姿は「安穏廟」による経済効果と言われることがままあります。しかしそれは違います。墓を変えることで寺の持つ古い体質を変え、今を生きる人たちの支えとなる寺を目指した結果です。それは、このことに共感された方々による、物心両面の協力の賜物に他なりません。

すべてが順調というわけではありません。永代供養のための原資としての基金運用が、昨今の世界経済の混乱で目減りしています。きめ細かいサポートには時間と人手がかかりますが、専従職員の充実も思うに任せない状況です。〝直葬〟をはじめ葬送に対する社会の意識が急激に変化しているこのような現代人の死生観に対して寺のメッセージを伝え続けることもエネルギーを要します。こうした現代社会にあって、〝共同性の再構築〟という20年来の目標に向け、これからもエンディングセンターと共に歩み続けたいと願っています。

【墓地の概要】

◆名称　安穏廟―杜の安穏･池の上

◆特徴

山に抱かれた自然の中にあって、個別にカロート（納骨室）と墓碑板を有し、墓碑前でのお参りが可能です。

◆契約の条件

宗派は問いませんが、妙光寺（日蓮宗）の供養形式に同意される使用者ご本人。契約者はすべて「安穏会員」として登録いたします。

◆区画数　既存区画数820　受付中区画数132

◆埋葬方法　ご納骨に関しては別途ご案内いたします。

◆期限の有無　（年会費の滞納後13年で合祀区画に埋葬）

◆費用

永代使用料／1区画85万円（複数体の納骨が可能です）

墓碑の文字刻み料（ご希望の時点で）実費（平均3万円）

年会費（通信事務費に充当します）／3,500円

墓碑板等すべて用意されていますので、この他には納骨時の費用以外一切不要です。分割納入は契約時に50万円、残金を3年以内です。

◆その他

契約者はすべて「安穏会員」として登録いたします。会員としての義務は一切ありません。妙光寺から定期的に通信物を郵送し、所在地の確認と行事のご案内をいたします。

永代使用料の一部を基金運用することで、お盆と春秋のお彼岸、合同供養祭の年4回の法要回向、および維持管理を妙光寺が行います。ご事情で年会費の納入が停止された場合、その年から起算して13年間は個別埋葬を継続し、その後も総廟に合同埋葬のうえ、お名前を刻み、引き続き永代にわたり供養を継続します。



杜の安穏･池の上

角田山 妙光寺［みょうこうじ］

◆宗派　　日蓮宗

◆所在地　〒953-0011

新潟市西蒲区角田浜1056

◆連絡先

電話 0256-77-2025

FAX 0256-77-2163

Eメール　ogawaeiji@myoukouji.or.jp

◆ホームページ http://www.myoukouji.or.jp/



フェスティバル安穏

◆交通アクセス

［電車の場合］ 新潟駅よりJR越後線で20分の内野駅に下車。タクシー20分が便利です。内野駅の先、巻駅前からバス「角田行き」で30分、「妙光寺入口」で下車の方法もありますが、バスの便数が不足です。巻駅、越後曽根駅からタクシーもあり、所用15分です。

［車の場合］ 新潟市内からは国道402号線で角田浜へ。北陸高速道路「巻・潟東I.C」からは国道116号線を右折、レストラン赤ひげを左折、竹野町を右折、松野尾のコンビニのある交差点と次の追分交差点を左折して、402号線に合流します。バス停「妙光寺入口」を左折してすぐ。I.Cから25分です。

◆沿革

文永8（1271）年10月、寺泊を船出された佐渡配流の日蓮聖人が、強風のため当地角田浜に漂着されて「七面大明神」を教化、「岸・岩・波」の三題目を書き遺されました。後に孫弟子にあたる日印上人が日蓮聖人ゆかりの聖地として、鎌倉時代末期の正和2（1313）年に創建されたことに始まります。日蓮聖人滅後31年目のことです。創建以来700年の歴史を有し、今日まで歴代住職53代の法灯が継承されています。

◆主な活動

国内外の親睦旅行、各種研修会、ボランテラ（相互支援、落ち葉はき等内部でのボランティア）等、会員の交流が盛ん。

◆その他

相互興隆と埋葬者への合同祭祀を目的に、1990年から毎夏「フェスティバル安穏」を開催し、300～400人が参加されます。

NPOの時代とお墓

秋田光彦
［あきた みつひこ］
大阪府・大蓮寺住職



特定非営利活動法人法、通称NPO法が制定されたのが1998年。その1年前に大蓮寺塔頭の應典院を再建しました。「葬式をしない寺」として知られる、地域ネットワーク型の劇場型寺院です。葬式や法事の代わりに、演劇やアート展、NPOの講演会やセミナーなどを連日開催して、再建以来14年を経て、今ではNPOの広場的存在として親しまれています。應典院自体も「NPOと若手芸術家の育成支援」という理念を掲げ、会員制で運営していますが、その他にも社会に参画する多くのNPOと協働や交流を続けてきました。

2000年にエンディングセンターがNPOとして設立されたとき（法人格取得は2007年）、私には少なからず衝撃がありました。それは、「葬送」が市民活動の主題として立ち上がってくる発見でもありました。葬式、墓、供養などいずれも家や個人にまつわる私事です。そして、きわめて宗教的なものであって、NPOが扱う「公共」「市民」「地域」といったテーマとは、一線を画すると考えていたからです。

90年代以降、日本の葬送は地殻変動を繰り返してきました。葬送の個人化、自由化という波です。伝統的な共同体が衰退して、少子化が進み、家族が多様化すれば、それは自明のことかもしれません。とりわけ家制度と密接に関係してきたお墓への関心は、「わが家の問題」から意識ある個人個人が共有する「公共問題」へシフトしていきました。葬送を扱うNPOが登場する十分な背景はあったのです。

その葬送の変動期とほぼ同時期に、應典院は「開かれた寺院」としてNPOと活動を創設、エンディングを考える市民の会・エンディングをはじめ、交流のあったエンディング系のNPOとネットワークを発足させました。医療や介護、住まいや相続、そして仏事、葬送も含め、人生の完成期をどのようにデザインするのか、市民活動の知恵を結集しました。

應典院も大蓮寺も同じですが、そういった市民活動の核にお寺があります。2002年、大蓮寺の墓地の一角に、生前個人墓「自然（じねん）」という集合墓を設けました。生前に、自分の意志で申し込むお墓です。家単位ではなく、個人が参加することで、生前に互いの関係を紡ぎ、死後には供養し合うネットワークを目指しました。現在会員は100名、定期的に供養会や勉強会をお寺でさらには、2010年から、その「自然」に申し込まれた志納金を基金として、

定期的にＮＰＯに贈呈する「自然賞」という顕彰制度も設けました（第１回目の受賞者はエンディングセンターでした）。意志ある個人、ネットワーク、市民活動の支援なども「自然」もＮＰＯ的な発想に立った新しいお墓であると言えるかもしれません。

90年代半ばからは、市民社会、ＮＰＯの時代と言ってもよいと思いますが、私には、やは行して、注目していることがあります。それは既存の寺院のＮＰＯとの連携です。

従来のお寺は、所属する宗派の教義に基づき、檀信徒の教化育成に当たってきました。しかし、戦後65年が経って、盤石であった寺檀関係にも大きな変化が生じ、今は葬式仏教の危機と言われていますが、伝統的な「葬送の風景」も移り変わりつつあります。それは、おそらく伝統や権威に依存したまま、時代の変化や個人の心と向き合ってこなかった既成仏教に対する異議申し立てでもあったのでしょう。

それに対し、まだほんの小さな動きですが、日本中の地域のあちこちで、寺院・僧侶がＮＰＯと協働して、あるいはＮＰＯモデルを用いて、社会活動に取り組む実践が見受けられます。自死対策やホームレス問題、ビハーラによる看取りなど、弱者と言われる人々への支援は、仏教者ならではのものでしょう。また、伝統教団がこういった取り組みに資金を提供して支援する動きなども起きています。

大胆な言い方をするならば、ＮＰＯは日本の寺院と社会の関係を相対化していきます。「菩薩行」「慈悲行」と仏教が語ってきたものは言葉だけであってはいけないはずです。それがどのように現代社会に実践として届けられていくのか、地域との協働や対話など、寺院がＮＰＯに学ばなくてはならないことはたくさんあります。また、それらを通して、次世代の仏教者たちの新たな役割も見出されるのではないでしょうか。

エンディングセンターは、「葬送」という日本仏教の核心に、市民の立場から初めてアプローチをされたＮＰＯです。そこに私も含め、積極的に協働、参画する仏教者もいます。今後は葬儀社や医療、福祉に関わる人たちとのネットワークも広がっていくことでしょう。お寺が市民とともに、どのような「新しい葬送の風景」を描いていくのか、これからもしっかりと見据えていきたいと思っています。

【墓地の概要】

◆名称　生前個人墓「自然（じねん）」、永代供養総墓「共命（ぐみょう）」

◆特徴

変化や個人の考え方の多様化に対応した、新しいお墓「自然」は、個人の資格で生前に申し込んでいただき、没後、大蓮寺が責任をもって永代にわたり供養、管理してまいります。また、インターネットを駆使したエンディングサポートは、人生の完成期を安心して迎えることのできる、いのちのサービス情報を専門NPOと連携して、提供します。

なお、家単位の永代供養墓として「共命」をご用意しております。

生前個人墓「自然」にお申し込みいただいた方々は、同時に「蓮華の会」会員に登録されます。会員向けの法要、案内、会報など各種特典があります。法要、行事とも参加は自由です。会費は一切不要です。お申込者ご当人に対し、1基「自然の碑」を設置します。「自然の碑」には、戒名と俗名を刻銘します。

お申込者には、浄土宗の戒名をお授けします。できるかぎり、毎年春彼岸に開かれる帰敬式（戒名授与の一日道場）にご参加ください。お申込者がご逝去された後、納骨する際には、納骨法要を営みます。

◆契約の条件

ご契約は、原則として申込者ご本人と生前に取り交わします。ご契約者のこれまでの宗旨は、在来仏教であれば問いません。

◆区画数　総数約200基

◆埋葬方法

申込時点で、自然の碑を建立し、没後別に用意した個別の納骨廟に納めます。

◆期限の有無

すべてのお墓は、永代にわたりご供養します。

毎年「春彼岸」「盂蘭盆」「秋彼岸」の3回は合同の供養会を開催します。33回忌までは個別の供養、それ以降は「蓮華の総会員位牌」として永代にご供養します。納骨は個別のままです。

◆費用

1基88万円（上記一切の諸費用を含む。会費·管理費等も不要です）

※ご志納はなるべく一括でお願いします。

如意珠応山 極楽院 大蓮寺 [だいれんじ]

◆宗派　浄土宗

◆所在地　〒543-0076 大阪府大阪市天王寺区下寺町1-1-30

◆連絡先　電話 06-6771-7641／FAX 06-6771-8901
Eメール info@dairenji.com

◆ホームページ　http://www.dairenji.com

◆交通アクセス

［地下鉄の場合］ 地下鉄堺筋線「日本橋駅」／近鉄線「日本橋駅」8番出口より東へ徒歩7分

地下鉄谷町線「谷町九丁目駅」／近鉄線「近鉄上本町駅」3番出口より西へ徒歩8分

地下鉄御堂筋線·四つ橋線·千日前線「なんば駅」／近鉄線「近鉄難波駅」／南海線（南海電鉄）「なんば駅」から千日前通　徒歩15分

［新幹線の場合］「新大阪駅」にて地下鉄御堂筋線に乗り換え、「なんば駅」下車、徒歩15分またはタクシー（1メーター）

◆沿革

1550年（天文19年）足利家の大坂祈願所として創建、江戸時代には教育と芸能の浄土宗別格寺院として知られ、800坪の墓域には石門心学門弟の墓所などがある。

◆主な活動

大蓮寺·エンディングを考える市民の会。塔頭寺院應典院を運営。

◆その他

住職が著した『葬式をしない寺』（新潮新書）に、生前個人墓の紹介を詳しく述べている。





生前個人墓「自然（じねん）」

私が目指す活動の指針

鳴海善通
［なるみ ぜんつう］
神奈川県・成就院住職



この寄稿にあたり、林逸子さまのお手紙を引用させていただくことをお断りいたします。彼女は私の良き理解者であり、協力者であり、「樹木のお墓」の完成を心から応援くださった方でした。２０１１年４月８日、百花咲き競う午後、彼女の遺骨は埋葬され、湘南の大地に遷られたのです。

「わぁッ、本当にすてき。後ろの桜山もきれいだけど、海に向かって開けていてとても明るい」
「富士山や箱根も見えるし、夏は花火がすてきでしょうね。潮の香りがするの」
と彼女は鼻をふくらませて両手をのばし、深呼吸するのでした。５月の連休のある日、なんじゃもんじゃの花見がてら、「樹木のお墓」完成のお祝いにかけつけた彼女の第一声でした。
「これで安心ね。私の第二のおうちができたのだから……。私の最後を見届けて送ってくださるものね」と満面の笑みをたたえて彼女は語るのでした。

彼の日あの時……

社葬を終えて自宅に戻ると、そこはいつもの静けさに満ちた我が家であった。おった方々に挨拶を申し上げ、社員も帰り、私の一番大切な姪もシアトル行きの便に頃だろう。今までの喧騒が夢のように、目覚めた自分の姿が鏡に写った。

「ウワッ」と泣き出したい衝動におそわれ、リビングルームの窓をあけると、ワの音に包まれていつもの自分に戻った。

主人を亡くして天涯孤独になった私に今できることは……。そうだ！　祈ろう。四ヶ所霊場巡拝の旅に出発したのは、私の純粋で初めての宗教体験でした。

彼の日あの時……

「ホテルの一室にご婦人がひとりで寝ていらっしゃるところへいくら主治医と言えども男性ですから、ここは一ツ、エチケットを重んじルームサービスのメイドさんにお願いして一緒に来てもらいましたヨ」

40度の熱を3回も出して、まだモウロウとしている私が待ちに待っていたのに、何だかたのしそうにご到着。私は泣き笑いでベッドの上に正座した。

私が、白金のMホテルの一室を病室として、出張中のH先生を待っていたのにはワケが

ある。突然発熱したのは、あと2日で節分という日だった。

早朝急に、経験したことのない震えに襲われ歯の根も合わず……N僧侶に電えたら、N僧侶は驚いて私をどう助けるかを我が仲間の二人に相談したのだ。この三人が、高熱で意識もなくなりそうな私を運んでくれたのが、病院でも白金のホテルだったのには理由がある。

わが仲間三人の決断は早かった。……どうも私たちとN僧侶のプロジェクトチームは、悲劇にしてしまう、ありがたくもおかしい仲間たちなのだ。何かの時に声をかければサァーッと手をさしのべて輪になって行動する仲間たち。そのつとめが終われそれぞれの日常に戻ってゆく。何事もなかったかのように。

（高田宏先生の教室　同人誌『みず』より）

そんなことがあって以来、彼女はますます仏教に深く傾倒していくのでした。仏観、行住坐臥に至るまで笑いながら問いかけては私を慌てさせる彼女がある日、真て私に問うたのです。「私の最後はどうなるんでしょう」「現実の話、私天涯孤独な「私の最後、住職は見届けてくださるのかしら。私はどこで永眠（ねむ）るのかしら」

あれから10年――。２０１０年12月17日、セコムサービスから突然の電話が私のもとに来ました。林逸子さまはレスキューされて緊急入院をされたのでした。病室を訪ねると、身だしなみを整えたいつもの彼女が待っていました。「ご心配をおかけいたしました」と言って頭を下げます。

クリスマスを病室で過ごし新年を迎えた10日、担当ドクターより私に電話が入って病院にかけつけました。担当ドクターからうかがう病状は私の心を曇らせました。やさしいナースや来客の声がひびき、器具や食事をのせたカートが行きかう一日が終わりを告げる頃、カーテンを引いて部屋を後にしようとする私に、目覚めた彼女は微笑みながら手を振りました。枕元に近づくと、「来てくださってありがとうございます。ＺＥＮさま頑張って。遊び過ぎてはだめよ」

それが最後の会話でした。１月17日早朝、77年の天命を気高くすてきに彼女は果たされました。

４月８日はお釈迦さまのご誕生を祝う〝花まつり〟が華やかに執行され、境内は春の息吹きに包まれます。生前のお約束どおり、入院から葬儀・埋葬に至るまでのすべてを託された私は役目を無事務め終えました。私は大きな安堵と共にある、別れの淋しさをかみしめていました。

そして思うのです。私を必要としてくださる方がいるかぎり、安心をお与えするために活動することが一つの〝私のエンディングテーマなのだ〟ということです。

【墓地の概要】

◆名称　樹木墓

◆特徴

埋葬されたご遺骨に供養のための樹木を植える個々のお墓です。個人埋葬を希望される方々の個別集合型の墓地として、墓苑内の緑地に特定した聖域を設けました。甘沼山の自然に抱かれて、樹木を墓標に、一人ひとりが安らぎの世界に住する幸せが偲ばれるお墓です。宗旨宗派を問わずご利用いただけます。家族内で埋葬の自由を求める方、独身でおすまいの方、また人生を完結した証をお考えの方ご利用ください。

◆契約の条件

どなたでも生前にご契約いただけます（ご遺骨の場合は代理人）が、埋葬後のご供養事（仏事）は成就院が執行します。

◆区画数　新区画300区（ご家族タイプ、個人タイプがあります）

◆埋葬方法

読経に合わせて参列者と共にご遺骨を埋葬して、記念植樹いたします。

◆期限の有無

故人のご供養は、永代供養となっておりますのでご安心いただけます。「おまいり」はどなたでもご自由にお出かけください。皆様のおまいりが必ずや当所におまつりされている各霊位の安寧につながります。春秋彼岸に総供養を、お盆にはローソク供養が執行されます。また、関係者のご希望により故人のご供養（命日や回忌法要）や大施餓鬼法要等を寺にて執行させていただきます。

◆費用　60万円（志納金、永代供養料含む）

◆その他

樹木葬のお問い合わせは、下記の指定管理会社へお願いします。

湘南メモリアルネット株式会社

〒253-0004 茅ケ崎市甘沼493番地　電話 0467-55-1784

成就院［じょうじゅいん］

◆宗派　　真言宗

◆所在地　〒253-0004 神奈川県茅ヶ崎市甘沼473番地

◆連絡先　電話 0467-52-6704／FAX 0467-52-6599

◆交通アクセス

［電車の場合］ JR茅ヶ崎駅北口、みずほ銀行前、バス停①番乗り場から、「文教大学行き（茅50）」または「湘南台駅西口行き（茅03、湘11）」で「甘沼バス停下車」徒歩5分」

［車の場合］ 茅ヶ崎駅北口より約12分 駐車場完備

◆沿革

成就院は甘沼山薬王寺と号し、宗旨は高野山真言宗です。茅ヶ崎駅から北へ車で15分ほどの小高い寺山の麓に開山されました。ご本尊薬師如来をはじめ、不動明王、愛染明王、千手観音さま等をおまつりしています。

ここ甘沼の里が北条氏分国の頃、東西の鎮護に寺社を創建したのが開山と伝承されますが、相模風土記には中興の祖は真恵と申し、寛文13年10月11日入寂せらると伝えています。

◆主な行事

新年大絵馬祈願、降誕会（ごうたんえ、お釈迦さまの誕生を祝う花まつり）、春秋彼岸供養、お花見（5月連休、9月随時。境内に咲く花を楽しむ集いです）、お施餓鬼会（お盆前の総供養）、ローソク祭（御霊迎えの法要で、墓前に燈籠が点されます）、遊行会（日帰りのバス旅行）



御霊迎え（お盆の3日間、お迎えした永代供養の御霊は本堂内に設けられた精霊棚にまつられ、供養されます。



ローソク祭（樹木墓の墓前には燈籠が点されてお盆供養が執行されます）

これからのお寺と墓のあり方

長谷川俊道
［はせがわ しゅんどう］
群馬県・瑞岩寺副住職



宗門の大学で仏教の基礎を学び、虎ノ門の青松寺で小僧として住み込み、永平寺で3年余り修行させていただきました。あれから早20年が過ぎゆき、月日の流れの早さを感じさせられます。その頃の私は、お寺に生まれた僧侶ならきっとだれもが一度は思うこと、そう、この業界から抜け出したいと考えていました。

仏教への魅力云々よりも先に、すでに現前と決定している自分の人生を呪ったものです。たまたま寺の長男に生まれただけなのに……と。

永平寺を終え、ハワイで開教師という仕事のチャンスに飛び乗りました。海外寺院を直接見聞きし、経験したかったのです。宗派・宗教を超えた布教やつながりに驚き、毎週行われるサンデーサービスや、境内での日本語学校、各種日本文化教室なども体験しました。もともと海外寺院は日系人の集会の中心であり、日本の心のよりどころだったのだから当然でしょう。

しかし、現在、宗門の海外日系人寺院の半分が消えています。生き残っている寺院の特徴は、開教師がローカルの僧侶を育成し、地域住民とのつながりを濃くして、大きく根を張っているところだけです。そして、なによりも地域の人々に必要とされることをお寺で提供し続けているということです。

海外に行った理由も、元を正せば日本仏教のいわゆる「葬式仏教」にイヤ気がさし、将来の展望が見えなかったからでした。しかし、今は「葬儀こそ最大の布教の場所だ」と１８０度考えが変わりました。どれほど一生懸命、故人を想い葬儀に魂を込めることができるか？　また、それまでの生前をいかにつき合うかが大切だと痛感しています。その濃さこそがすべてだとわかったのです。

エンディングセンター理事長の井上治代先生によれば、「今後はますます『〇〇家』のお墓を継ぐことが難しい社会が訪れる」とおっしゃっています。そのサポートとしてお寺は家族の人間関係を整理し、その人に合ったお墓を提供していく必要があると思います。またお墓に限らず、葬儀、介護、家や財産の整理などもやろうと思えば僧侶の出番は限りなく多いはずです。これからますます「無縁社会」になるでしょう。東日本大震災によって地域社

会の「絆」の大切さが叫ばれていますが、やはり日本人は近所づき合いが苦手だと思うのです。「個」として救える社会でないと日本の社会保障のシステムは成り立たなくなっていると感じます。

松本市の神宮寺・高橋卓志住職に言われたことがあります。「長谷川くん、生・老・病・死、お釈迦さまの説かれた苦に僧侶が寄り添わないでどうする？　僧侶って何する人？」その言葉問いかけが今でも脳裏から離れません。

幸い瑞岩寺には保育園があります。少子高齢化にともない境内に老人介護の施設も計画しています。子育て、終末医療、老人介護、葬送とこれらの機能が組み合わさって提供できる、そんな寺が理想です。

日本に戻って8年余。境内整備や人生相談、座禅会、朝がゆ会（朝が愉快）、永代供養墓、樹木葬、ペット供養、水子供養、葬祭に関する一切の業務、寺子屋ライブや時代に即した講演会などさまざまなトライをしてきました。これからも思考錯誤しながら続けていくつもりです。人間的にも辛いことを経験したおかげで幅も広がったような気がします。

「これからのお寺」のイメージは以上のようなものですが、大切なのは、私自身がいかに魅力

的な僧侶になるかなのでしょう。祈祷寺、観光寺、本山はいつまでも生き残るでしょう。それ以外の寺院は世の中に必要とされないと消えて無くなるかもしれないということがハワイでよくわかりました。宗門でもすでに、人口減で無住になった寺院や跡取りがなく兼務される寺院が増加しています。

「あなたに会えて本当に良かった、心が楽になりました」心底そう言われる僧侶になりたいと思います。

今、毎日のように悩み相談や供養、墓地の相談などがあります。お話を傾聴するたびに、私も少しは世のためにお役に立てているかな？　と感じます。有難いことだと想います。

宗祖であられる道元禅師さまは、「一箇半箇（たとえ1人でも優れた弟子を打ち出すこと）」「正師（自分にあった正しい師匠を見つけること）」をとても大切にされました。

宗門を変えようとか、日本仏教を変えようなど、大それたことは考えていません。今、息をしている場所で、必要な人たちのお役に立つこと。それが、今の私の生き甲斐になっています。

合掌

【墓地の概要】

◆名称　樹林墓地「木もれ陽（こもれび）」

◆特徴

墓を建てたいが後を委ねる家族がいない、子どもがいても後々の負担をかけられない、かけたくない。こうした家族の変化を受けて、瑞岩寺では、宗派を越え、かつ跡継ぎを必要としない樹木葬墓地お墓「木もれ陽」（個別型）を建立しました。最近、注目される自然葬であり、墓石などは建立せず、土に還るタイプです。承継者がいなくなっても、瑞岩寺が基金運用によって供養、管理を続けるお墓です。

また、個人型の永代供養墓を新たなコンセプトをもとに建立しました。個々の納骨式になっています。親子、夫婦での使用も可能（2人まで）です。相続する方がいなくなった場合（連絡が途絶えて13年後）まで瑞岩寺が責任をもって供養します 。お骨はシンボルツリーの周りの芝生に納骨する形になります（ネームプレート有り）。 生前に契約し、瑞岩寺が責任をもって葬儀、納骨、供養することも可能です。

毎年お盆に合同の供養祭を行います。

◆区画

1区画ごとに芝生の下にホール（納骨穴）と、みかげ石の墓碑板が設置されています。カロートには2体までの納骨ができます。墓碑板にはそれぞれ自由に墓碑名を刻むことができます。お墓参りの際には花立、線香置き、手桶が用意されています。

◆費用

樹木葬「木もれ陽」A区画
1名:33万円（墓石、永代供養･管理費込）
樹木葬「木もれ陽』B区画
2名（夫婦ならびに親族）:
60万円（墓石、永代供養･管理費込）
石板彫刻代（別途）



慈眼山 瑞岩寺［ずいがんじ］

◆宗派　曹洞宗

◆所在地　〒373-0016 群馬県太田市矢田堀町388

◆連絡先　電話 0276-37-1231／FAX 0276-37-1729
Eメール info@zuiganji.com

◆ホームページ　http://www.zuiganji.com

◆交通アクセス

［電車の場合］東武伊勢崎線太田駅より車で10分。JR 両毛線小俣駅より車で3分。

［車の場合］ 東関東自動車道の太田桐生インターチェンジより1分。

◆沿革

天文12年（1543年）に常陸国河内郡若芝本宿（茨城県）の「金龍寺」の末寺として創建され、運慶作といわれる十一面観世音菩薩像を本尊とします。御開山様は金龍寺七世でもあり、禅師が在住中に写経した「碧巌禄」（十巻）が今も寺宝として存在しています。また、御朱印地として「永代宗護不入地」となっていたが、慶長2年（1649年）徳川家光の代に以前の由緒ももって御朱印地を賜りました。

しかし、格式などはそれほど意識しておりません。敷居を低くして、どんな方でも気軽に来られるようなお寺を目指しております。お寺は信徒の皆様のものです。皆さんのお寺として、今どうあるか、これからどのように運営されるかが大切であると考えています。 そのような意味では、現実を直視して、清潔で、世間のお役に立てる寺院でありたいと思っています。細心の注意で運営し、会計も公開しています。

◆主な活動

毎年、寺子屋講座（毎回各界の著名人を迎え、「いのち」をテーマに講演やパフォーマンス）を行っています。

◆その他

座禅会·写経会·悩み相談、人生相談、自殺·自死についての相談（ネットワーク風会員）を行っています。年中無休で正午12時の定例法要をしています。参加は自由、どなたでも結構です。

大自然に抱かれる墓のかたち

三上隆章
［みかみ りゅうしょう］
山口県・宝宗寺住職



宝宗寺は永平寺（開祖・道元禅師）をご本山とする曹洞宗のお寺です。「維新のふるさと萩」から車で20分程度の里山にあり、自然が豊かで災害の少ないところにあります。さまざまな生き物が自然の中から生まれ、自然の中へ帰っていきます。人もまた例外ではありません。私たちも、ほかの生き物たちと同じように、土へ還ることができるのです。

日本では現在、人は石の墓に入るものと思われていますが、他のすべての生き物たちと同じように大自然に抱かれたいという気持ちから自然葬へ感心をお寄せになる方々も増えておられるようです。樹木葬では遺骨は土に還り森を育て、さまざまな生命を育み続けることでしょう。

私は、自分のおりますこの宝宗寺が素晴らしい自然に恵まれていることを生かし、そういった方々に新しいお墓の形をご提供できればと思い、この樹木葬を始めました。

樹木葬を始めて私どもが何より嬉しく思いましたのは、樹木葬をご予約になられる方の多くは

「自分はやりたいことをすべてやったから、どこに埋もれても構わない。石碑を建てても在を示さなくともよい」という考えをもっておられるということです。「人生を悔いなく生きよう、納得できるような生き方をしよう」というお気持ちでおられること、それが何より素晴らしいことだと思うのです。

こういった方々とは別の理由で樹木葬に興味をおもちになられる方もおられます。「家系」を重んじたこれまでのお墓のあり方では立ち行かなくなっておられる方々などです。こういった方は深刻な悩みを抱えておられます。

子どもがいない（または女の子しかいない）、お墓は誰が見ていってくれるのだろうか……。

子どもは遠く故郷を離れ、おそらくもう戻ることはないだろう……、お墓を移転させたいが移す先が見つからない……。

先祖代々のお墓に入りたくない→自分でお墓を探さなくてはならない、自分自身が信仰してきた宗教がないので、どこにも行き場が見当たらない……など。

他にもいろいろな悩みがあるがゆえに樹木葬墓地をお訪ねになる方がおられます。

先祖代々のお墓を立派にお祀りなされる方は、たいへん尊いことと存じますが、今までのお墓

の形にとらわれず、別の解決策をお探しになることで、悩みから解放されることもあるのではないかと思います。

樹木葬に限らず、近年は葬送の自由度が広がっておりますので、「死後のため」にもよい形のものをお選びになられるとよいと思います。ご先祖様は子孫の幸せを願うものですから、お墓を守ることを優先するあまり、子孫の負担になってしまうことはないはずです。

仏教は本来、「今」をいかに生きるかを説いているものであります。

近年、仏教は死後の世界に葬儀にまつわる儀式ばかりに力を入れてしまい、「仏教は死後の教え」との誤解を生じさせるようになってしまいました。しかし、仏教は一生懸命生きることの大切さも説いているのです。

その点において、仏教本来の教えと重なり合うこの「樹木葬」が縁となり、今をいきいきと生きておられる皆様、自分らしく生きたいと思っておられる皆様と触れ合える機会を得られたことは、たいへん感慨深いことです。

お寺のあり方もまた、変わってきています。

明治以前は、宝宗寺の「曹洞宗」では妻帯は許されず、後を継ぐのは血のつながりのない、法

のつながりの弟子でした。明治以後、妻帯し自分の息子にお寺を継がせるという風潮が広がりました。今では何代も世襲している所もあります。そうなってくると、仏教の教えを守るよりも、我が生活を守ることが大切になり、葬式仏教などと揶揄されても平気になってしまっています。

僧侶はそもそも「出家」をした人なのですから、自分の家を出ずに後を継ぐというのはおかしなことなのです。僧侶自身がそういったことに気づかなければ、日本の仏教は衰退してしまうでしょう。

また、そうでなくても、過疎化の進む地域ではお寺を守っていくことは難しくなっています。日本全体も少子化によって人口の減少が危惧されています。

我々は血縁でなくても、さまざまな場面で支え合い、つながり合っていくことができるのです。「樹木葬」はそういった意味で、人と自然とを守り支え合っていく考えに立つものであると思います。

【墓地の概要】

◆名称　宝宗寺樹木葬墓地

◆特徴

宝宗寺の樹木葬墓地は宗教·宗派に関係なく墓地のみ、つまり土に還る場所としてのみ、使っていただけますので、お寺とのつながりや宗教の違いといったことを気にせず、安心してお選びいただけます。従来の樹木葬墓地の隣が桜葬墓地となっております。

◆区画　　埋葬地点から半径1m

◆埋葬方法

宝宗寺の樹木葬は墓地として認可されている里山(2005年。現在は宝宗寺の裏手にある山)に遺骨を埋葬し、記念植樹を行っていただいております。ご遺骨は直接埋葬していただくか、土に還る骨壺を使われてもかまいません。

お選びいただいた苗木をお植えいたします。ご希望があれば土をかけるのにご参加いただけます(竹の骨壺あり)。墓石などはおきませんが、場所には目印をつけ、他の方と重なることがないようにします。苗木は、落葉樹の低木、花木、果樹などの中で土地に合うものの中からお選びいただきます。

◆期限の有無　　契約期間50年

◆費用　　永代使用料(埋骨料+その他の経費)、埋葬後管理料なし

◆その他　生前契約の方は「百草の会」の年会費が必要です。



芝桜が植えてある樹木葬墓地

宝宗寺［ほうしゅうじ］

◆宗派　曹洞宗

◆所在地　〒758-0211　山口県萩市福井上1927

◆連絡先　電話 0838-52-0521

Eメール housyu2@yahoo.co.jp

◆ホームページ　http://www.geocities.jp/jumokuso_hagi/

◆交通アクセス

［新幹線の場合］「新山口」駅からバスで萩市へ（約1時間）

山口宇部空港から近鉄乗合タクシー（要予約）で萩市へ約（1時間）、石見空港からバスで萩市へ（約1時間）

［電車の場合］JR山陰線「東萩」駅

萩市街地より津和野または吉部行きバス（約20分）で、「山崎」バス停下車徒歩7分

◆沿革

永平寺をご本山（開祖·道元禅師）とする曹洞宗です。

◆主な活動

宝宗寺では「百草の会」という樹木葬を支える会をつくっています。その活動としてご遺骨の移送をいたします。費用その他はお尋ねください。



年に1度の合同供養祭 馥林祭（ふくりんさい）

あとがき

桜葬のある東京・町田の事務所には、お墓を求めていろいろな方がおいでになりますが、その方の人生や家族関係は桜葬のご案内やご説明をしているだけなのに、いつしか、プライベートなことを踏み込んでお聞きできることが度々あります。初対面の方から、プライベートなことを踏み込んでお聞きできることは、とても貴重なことです。自分のため、あるいは亡き人のためにお墓を選ぶ、ということはまさに、その人の人生の集大成なんだということを日々感じています。桜葬を契約される人々のそういう思いに触れて、そのお手伝いができることは、私たちのやりがいとなっています。「こうしかったのよ、ありがとう」という言葉をいただくことは、私たちにとって無上の喜びです。

２００５年に初の桜葬「Ｅｎ21」ができて7年。エンディングセンターの桜葬はどん進化していています。日々接する人々の声を聞いて、社会状況の変化に対応し、自分たちの求めるものをつくり上げているからです。２０１１年には、大阪・高槻に関西初の桜葬も完成しました。桜葬

ネットワークも全国に広がっています。理事長の井上治代が自分自身の問題からこの活動を始めたように、これからも、利用する市民の視線を大切に活動していきたいと思っています。

そして、桜葬を契約される方も、どんどん増えています。本書の企画が始まった2００７年7月の会員数は９４０人だったのが、この2年半で１６００人に達しています。この会員数の急激な増加は、桜葬が認知され、必要とされていることの証でしょう。年その方たちの思いをさらにお聞きして、このあと第2弾もまとめたいと思っています。ご期待ください。

２０１２年3月8日

エンディングセンター事務局長　東　操

井上治代（いのうえ はるよ）

NPO法人エンディングセンター理事長、東洋大学ライフデザイン学部教授（社会学博士）、エンディングデザイン研究所代表。

自著に『最期まで自分らしく』毎日新聞社、『墓をめぐる家族論』平凡社新書、『新・遺言ノート』KKベストセラーズ、『墓と家族の変容』岩波書店、『より良く死ぬ日のために』（イースト・プレス）。共著に『思想の身体―死の巻』春秋社、『自分らしい葬儀とお墓の全てが分かる本』三省堂、ほか多数。

NPO法人エンディングセンター

〒157-0061 東京都世田谷区北烏山1-8-18

［町田事務所］

〒195-0051 東京都町田市真光寺町318-12

TEL 042-850-1212 FAX 042-850-1211

E-Mail: info@endingcenter.com

URL： http://endingcenter.com

［関西事務所（神峯山寺桜葬現地事務所）］

〒569-1051 高槻市原1371-4 神峯山寺開成院霊園内

TEL 072-669-9131 FAX 072-669-9132

URL： http://osaka.sakurasou.org/

ブックデザイン　安田真奈己
カバー写真　アフロ
写真協力　NPO法人エンディングセンター

桜葬　桜の下で眠りたい

2012年4月25日　第1刷発行

著　者　井上治代
NPO法人エンディングセンター

発行者　株式会社　三省堂
代表者　北口克彦

発行所　株式会社　三省堂
〒101-8371　東京都千代田区三崎町二丁目22番14号
電話　編集（03）3230-9411
営業（03）3230-9412
振替口座　00160-5-54300
http://www.sanseido.co.jp/

印刷所　三省堂印刷株式会社

©H. Inoue 2012 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします〈桜葬・244pp.〉

ISBN978-4-385-36577-0

Ⓡ本書を無断で複写複製することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複写権センター（03-3401-2382）の許諾を受けてください。また、本書を請負業者等の第三者に依頼してスキャン等によってデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。